

# ラジオ修理メモ 第2巻

兵頭 勉・著



# 著者の序

雑誌「電波科学」に「修理メモ」を書き始めてからもう2年、先般これを単行本にまとめてからまた再び第二の「修理メモ」として1冊になるくらいのボリュームになってしまいました。よくもこんなにタネがあるものと思うくらい、故障に関する話題はあとからあとからと尽きないものです。

故障発見には、いわゆる診査法なる一つの型によるよりも、かつて経験したこと、あるいは他から見聞いたことの方が、どれほど多く役立つかわかりません。そう思ってこの「修理メモ」を綴っているのです。

「修理メモ」に選んだ内容は、特殊な故障、珍しい故障などというよりは、よくある故障あるいはそれが一般の技術の理解に役立つようなものを特に選んで、それを徹底的に追及するよう心がけてあります。ただ筆者が浅学のため、その解釈にはあるいは誤りが無いとも限りません。それゆえ誰にでも簡単に追試実験ができ検討していただけるよう、なるべく特殊な測定器を使わず、できるならテスター一つだけで判る範囲のものを取りあげてあります。

「修理メモ」執筆に当り、毎回資料の提供とその検討をいただいた十日会のグループの諸氏、及び雑誌掲載後いろいろと御叱正御鞭撻をいただいた読者諸氏に厚くお礼を申上げるしだいです。

昭和25年11月

著者しるす

# 目次

著者の序	1
<b>第1部 一般受信機に関して</b>	<b>5</b>
1.1 単一調整の不調は2点同調となるか	5
1.2 連続笛音の出る並四球	6
1.3 再生コイル断線の予防	8
1.4 6ZP1のプレート回路が切れたら	8
1.5 ハムとデカップリング・フィルター	10
1.6 並四球が鳴り出すまでのハム	12
1.7 抵抗結合にできない並四	14
1.8 迷惑な高周波二段セット	16
1.9 また並四受信機の不思議	18
1.10 幽霊放送局!?	21
1.11 高周波管が切れても鳴っているラジオ	22
12 レコードが鼻声の電蓄	24
<b>第2部 スーパーに関するもの</b>	<b>27</b>
2.1 85の代りに6ZDH3は使えなかった	27
2.2 東京第二放送950kc受信にビートが出るスーパー	29
2.3 ハイ・インピーダンス・アンテナコイルとスーパーの自己発振	30
2.4 スーパーとハウリング	32
2.5 東京第一放送がAFRSのイメージに悩まされるスーパー	34
2・6 地元局受信にモーター・ボートィングを起す電蓄	35
2・7 950kcを聴くときビートのでる中間周波トランスは不良か	38
2・8 放送が受からなくてもマジック・アイが閉じるスーパー	41

2・9	AVC回路からハムを拾う . . . . .	42
2・10	スーパーでは聴けない放送局がある . . . . .	44

### 第3部 増幅器関係 46

3・1	出力とは反対にプレート電流が減る電力増幅 . . . . .	46
3・2	出力を出すとプレート電流が減る 42 シングル . . . . .	48
3・3	近所のラジオに混入するマイク・アンプ . . . . .	50
3・4	2A3 を続いてダメにした話 . . . . .	53
3・5	チョーク・インプットの悩み . . . . .	56
3・6	音の酷く歪む学校用増幅器 . . . . .	59
3・7	LC 音質補償回路の悩み . . . . .	61
3・8	出力トランスの絶縁破壊 . . . . .	63
3・9	初段管からのハムの原因は? . . . . .	65
3・10	ロフティン・ホワイト直接結合電蓄の音質 . . . . .	67

### 第4部 部分品について 72

4・1	巻線と鉄心間に高電圧の出るパワー・トランス . . . . .	72
4・2	パワー・トランスのワットと鉄心断面積 . . . . .	73
4・3	パワー・トランスのワットと巻数との関係 . . . . .	77
4・4	パワー・トランスの無負荷電流 . . . . .	78
4・5	擬皮フリーエッジの硬化 . . . . .	80
4・6	パラフィンのいたずら . . . . .	82

### 第5部 修理技術のいろいろ 84

5・1	電熱器とモジュレーション・ハムの問題 . . . . .	84
5・2	ラジオ火事 . . . . .	85
5・3	予言をする共聴スピーカー . . . . .	86
5・4	ムービング・コイルから火花が出るスピーカー . . . . .	88
5・5	4.5V の乾電池で感電する?! . . . . .	90
5・6	雷公御用心 . . . . .	92
5・7	夏場の修理は迅速に . . . . .	95

5・8	モジュレーション・ハム止めコンデンサーのパンク . . . . .	97
5・9	ハムはなぜ出ないか, またなぜ出るか . . . . .	98
5・10	グリッド・リークが切れたら . . . . .	100
5・11	直流磁化防止の出力トランス?? . . . . .	102

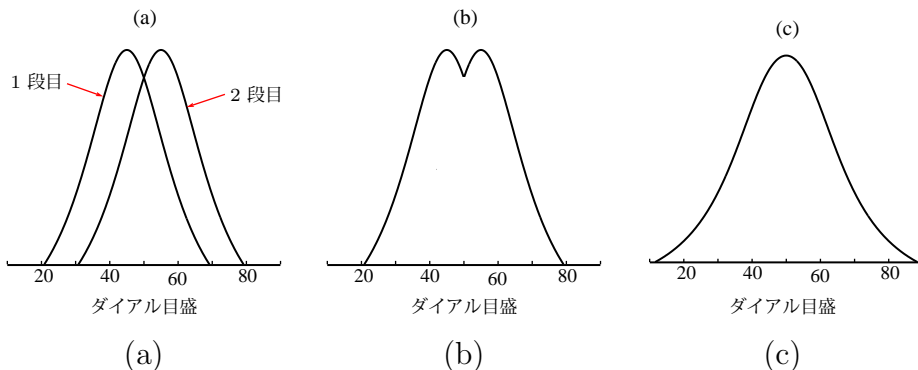
修理メモをお読みになる皆様へ

105

# 第1部 一般受信機に関して

## 1.1 単一調整の不調は2点同調となるか

高周波一段受信機で、一つの放送が2点で受かるという現象が生じると、“それは単一調整がうまくとれていないからさ”とあっさり片づけてしまう人が少なからずあるようですが、はたして事実そうなのでしょうか。

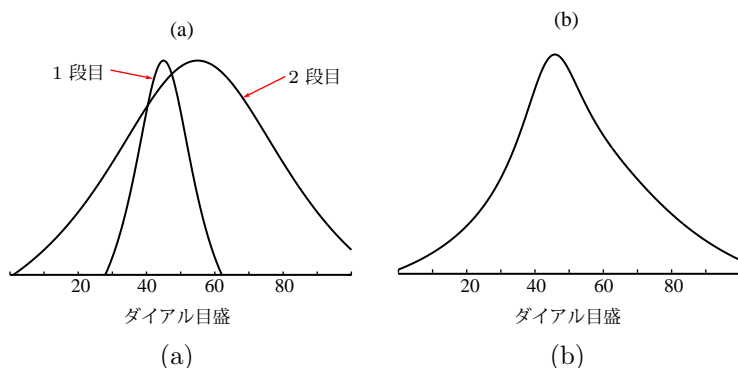


第1図 (a) のような各段の同調の狂いは (b) のような2点同調とはならず (c) のような1点同調となる

ある周波数の放送に対し、一段目と二段目の同調回路の同調点を別々に調べてみます。それには二段目のバリコンの接続をはずして非同調としておき、一段目のバリコンだけで放送を受けてみます。次には二段目を生かし、一段目のバリコンの接続をはずした状態で同調させてみます。その結果、第1図のように、一段目はダイヤル目盛の45度、二段目は55度で同調したものと仮にしてみます。このように同調点が一段目と二段目とで互いに目盛り10度も狂っている場合、この状態で受信してみると、第1図(b)のように、45度の点と、55度の点との2カ所で受かるものと一応は思えるでしょう。ところがさにあらず、たいていは同図(c)のように、多少ブロードな単峰になって1点で受かるのです。これは一種のスタガ一同調と考えてもよいでしょう。

国民一号型<sup>1)</sup>のように、検波方式がグリッド検波である場合、二段目の同調回路のQが、受信状態では非常に悪くなりますから、いわゆる分離が悪く、この部分の同調曲線は相当ブロードになります。一段目は、アンテナの状態とか同調コイルとの結合度によって多少異なりますが、二段目のものよりはシャープになっているのが普通です。第2図(a)はその一例で、両方の同調点は目盛で20度も差が

1) 戦前に設定されたラジオの規格。金属材料の不足を反映したため、構成は12YV1—12YR1—12ZP1—24ZK2の4球トランスレス・ラジオとなっている。感度は0.1mV。低周波出力は300mW以上



第2図 全体の同調特性はシャープな段の同調特性に左右される

ありますが、全体としての同調曲線は同図(B)のように単峰になり、そしてその同調点は一段目の同調点と同じ45度です。

以上は放送局所在都市などで地元局を受信するような場合、すなわちアンテナ端子入力が比較的大きく、従って再生も大きい入力に抑えられて効かなくなるような場合です。もし電界強度の弱い場所で大きなアンテナあるいは電灯アンテナ<sup>1)</sup>などで聴く場合は、一段目の同調はブロードになり、それと反対に二段目は再生が効くためシャープになりますから、従って同調点は前の例とちょうど反対に二段目の同調点と同じになります。また一段目二段目の同調特性がほとんど同じでシャープであるようなときは、同調点は両者の中間へ来るか、あるいは双峰特性すなわち軽い2点同調を示すかも知れません。しかしスタガー同調で完全な双峰特性を得ることが言い易くして困難であると同様、単一調整の狂った高一受信機が2点同調を示すことは、ごく稀にしかないでしょう。

結局、“一段目と二段目とで、同調点目盛が狂っていても、特別な場合を除いては2点同調とはならず、やはり1点で受かる”というのが本当でしょう。以上の実験は、テスト・オシレーターと普通のテスターがあれば、大した困難なしにできますから、一度実験しておくとういと思えます。もし近距離局を受信するときどうしても2点同調になるという場合があったとしたら、それは検波管の飽和か、あるいは高周波一段として常識はずれに単一調整が狂っているものと思って差支えなく、これに関しては前編で述べてあります。

## 1.2 連続笛音の出る並四球

57-56-12A-12Fの並四球で、連続してピーという笛音が出ています。

1) 家庭用電灯線をアンテナとして使う方法。アースをアンテナ端子につなぐ

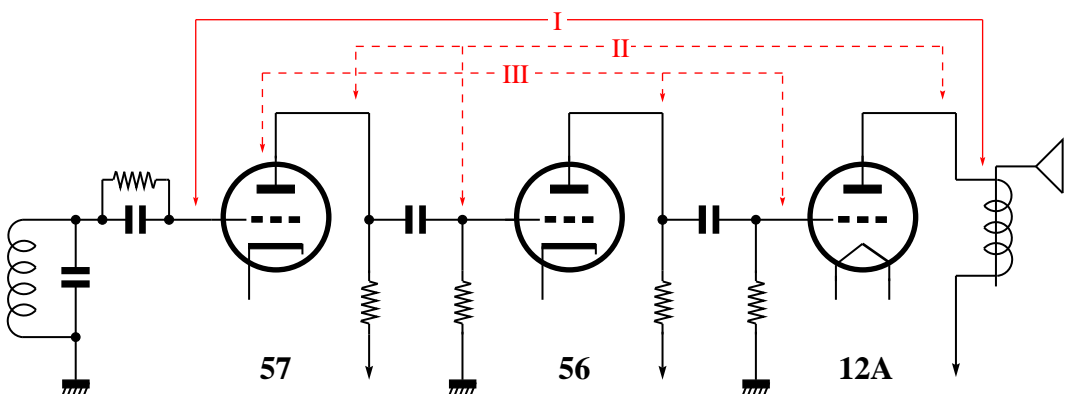


再生の効かし過ぎかと思って豆コンを廻してみると、再生が起きるとやはり普通のように到来電波とビートを作ります。むしろ再生を効かさない時の方が笛音は強いのです。放送シグナルから同調をはずしておいて再生を起してみると、ポコッといって再生が起きると同時に連続笛音は却<sup>かえ</sup>って消えてしまいます。いわゆるシンギングと称する現象です。

次にシャシーをキャビネットから出して働かせてみると、シンギングは止み普通の状態で受信できることが判りました。このシンギングは、マグネチック・スピーカーのフレームをアースさせることによって完全に除くことができました。要するに出力回路のプレート側から前段へフィードバックして、高音部の低周波の発振を起していたのです。

こういった経験は、たいていの方は持っていると思います。それでは出力回路と前段のどの部分とが結合して低周波発振を起すのでしょうか。第3図に矢印で示した間を、小容量のコンデンサーで結合させてみると、いずれもシンギングを起します。特にIの結合の場合には、57のところへスピーカー・コードを近づけただけで笛音を発します。II及びIIIの結合の場合では、よほど近づけない限りシンギングは起きません。

II及びIIIの場合は、互いに同位相のところと結合するのですから、正<sup>きかん</sup>饋還<sup>きかん</sup>となって発振するのは当然です。Iの場合では互いに位相は反対で、負<sup>きかん</sup>饋還<sup>きかん</sup>となって安定するはずですが、それにもかかわらず発振するのは、特性の悪い低周波増幅部のため饋還<sup>きかん</sup>電圧の位相のズレが甚だしく、かつ増幅度も高いため僅かの饋還<sup>きかん</sup>量でも発振してしまうものと思います。なお、再生を起すとシンギングが消えるのは、再生振動によって初段管の増幅度が下るからでしょう。

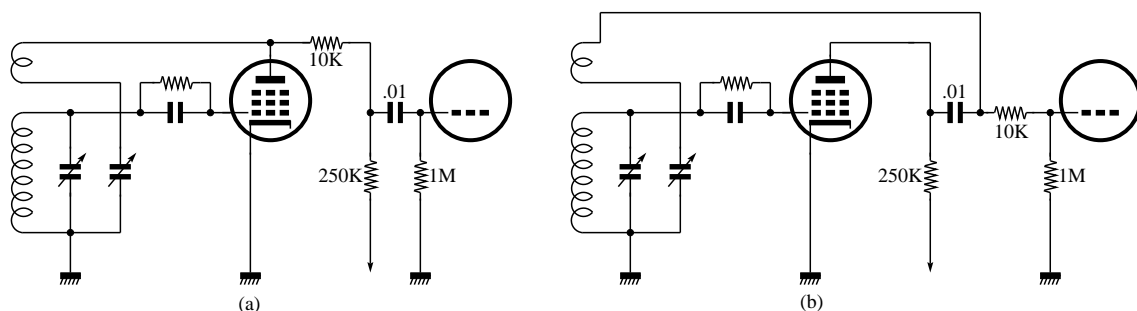


第3図 矢印で示した間に結合が生じるとシンギングを起す

以上の並四での経験は、高級受信機ことにアンプリファイアーを組立てる場合のよい参考になるでしょう。

### 1.3 再生コイル断線の予防

並四ないしは高一受信機に再生は付きものですが、再生が効かなくなり、調べてみたら再生コイルが断線していた、という故障がよくあります。プラスの直流電位にある巻線はよく断線することは前にもしばしば述べましたが、再生コイルも検波管のプレート直流電圧と同電位にあるので、とかく切れ易いのでしょう。ベークライト・ボビンですら再生コイルの断線は起るのですから、まして絶縁の悪いプレスパン<sup>1)</sup>のボビンやファイバーでできているスパイダー・コイルが切れることは無理ありません。



第4図 再生コイルにはプラス電圧をかけない方がよい

第4図(a)は普通の再生式の回路ですが、これを(b)のように接続替えをすれば、もう再生コイルの断線の心配はなくなります。なぜなら、再生用コイルには直流のプラス電圧はかかっていないからです。もち論こうしても感度や再生の起きぐあい、ないしは低周波の周波数特性などには影響しません。十数年前の某メーカー製品にこのような方法を用いたものがあって、既に実証されています。

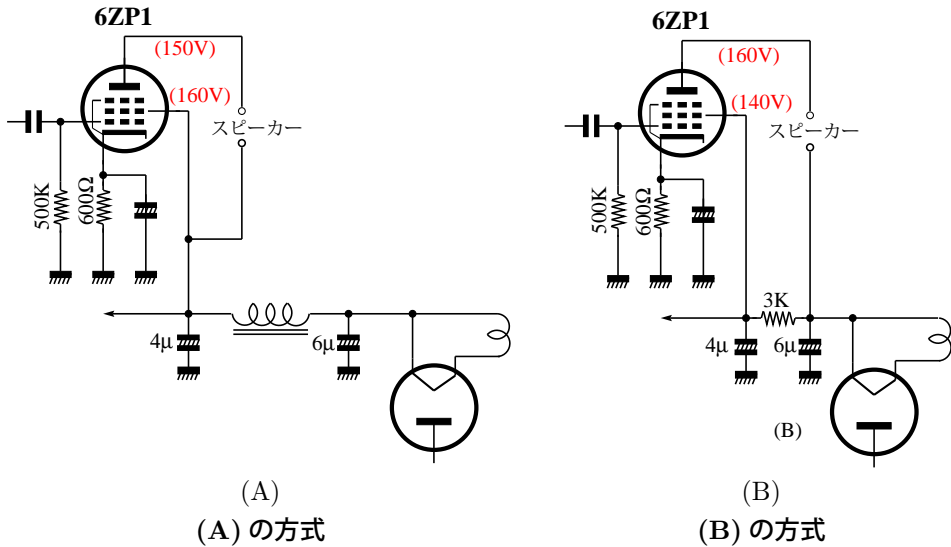
### 1.4 6ZP1のプレート回路が切れたら

鳴らなくなった、見ると6ZP1のスクリーン電極が白熱している、故障はスピーカーの出力トランスが断線していた……ということはザラにあります。

故障でなくても、スピーカーをつなぎ忘れてスイッチを入れ、出力管のスクリーンが赤くなってきて気が付いた、ということなら皆さんは実験済みでしょう。

“スクリーンを過熱させると球がノビるよ”とたいていの人はいいますが、さてそれではプレート回路が切れたままスイッチを入れたら、スクリーン電流はその真空管をダメにするくらい流れるのでしょうか。

1) パルプを使用した絶縁紙



	プレート電流	スクリーン電流
正常	14mA	2.1mA
SP 断	0	14.0mA

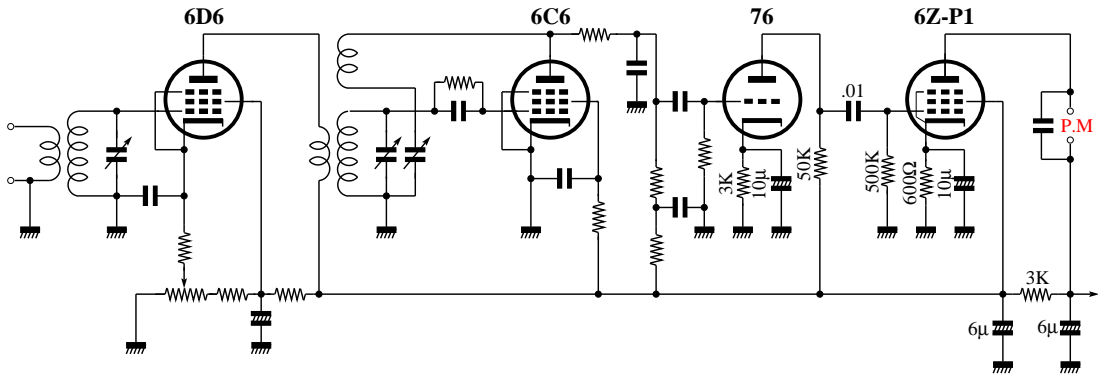
	プレート電流	スクリーン電流
正常	12mA	1.8mA
SP 断	0	9.0mA

第5図 この回路でスピーカーが断れたら

高周波一段でよく見かける第5図の(A)及び(B)の二つの回路で、そのときの電流状態を調べてみると図の下に示したようになりました。ちょうどスクリーン電流がプレート電流に代ってしまうようなありさまです。もち論、真空管やその動作電圧あるいは回路などの個々の差によって、このデータ通りにはならないでしょうが大体のことはうかがえましょう。プレート電圧がかかっているときは、カソードの放射電子はプレートが吸引しているため、スクリーンの吸引する量は僅かですが、プレート回路が切れてプレートが電子を吸引しなくなると、スクリーンに集中します。そうするとスクリーン電極をプレートとした三極管となるわけで、試みにスクリーン回路にスピーカーを入れてみると、かなりよく鳴ります。面白がってこんな実験をしていると球をダメにするかも知れません。プレート回路が切れた状態では、スクリーン損失は許容値を遙かに超しているでしょうから真空管を不良にする可能性は充分あるわけです。以上の実験結果から、他のペントード<sup>1)</sup>あるいはビーム出力管についても同様なことが想像できます。

「プレート回路が切れたらスクリーンには相当な電流が流れるのは判り切ったものさ」とはいうものの、それを測ってみるといふ簡単な実験でさえ案外やってみる人は少いようです。

1) pentode—五極管



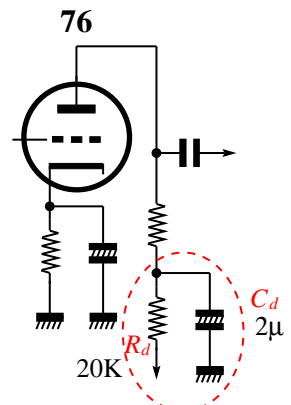
第 6 図 76 を抜くとハムのふえる受信機の回路

## 1.5 ハムとデカップリング・フィルター

放送局より遠隔の地方で、最も経済的に実用になる受信機は第 6 図のような高一低二<sup>1)</sup>のストレート 5 球式で、感度としては 5 球スーパーに匹敵しましょう。高周波の感度不足を低周波のゲインで補うため、とかく雑音とハムが問題になります。

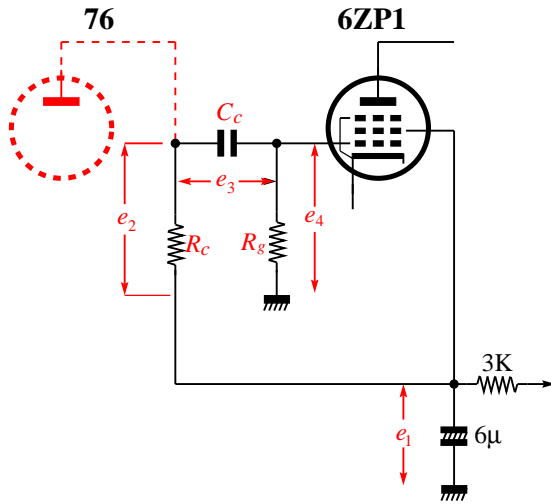
ところで第 6 図で組み立ててみたところ、ハムが大分多いのです。診査の順序として、検波管 6C6 のグリッドとシャシー間をショートしてみました。検波コイルがパワー・トランスから電磁誘導を受けているかも知れません。あるいはグリコン<sup>2)</sup>とリーク<sup>3)</sup>のところで同じく静電誘導を受けている場合もあります。しかしグリッドをアースさせてもハムはほとんど変化しないので、この段は OK です。次に 76 のグリッドをアースさせてみました。しかしこの段でも余りハムは減りません。最後に 6ZP1 のグリッドをアースしてみると、ハムはピタリと止まりました。とすると 76 と 6ZP1 の間にハムが出る個所があるわけです。

次の診査方法として 76 を抜いてみました。ところが何とハムは甚だしくふえるではありませんか。そこで再び 76 を差してみると、それが温まって動作してくるにつれてハムは減っていき、最初通りのハムの大きさになります。76 を抜いておき、 $0.01\mu\text{F}$  のカップリング・コンデンサーをはずしてみると、ハムは止まり

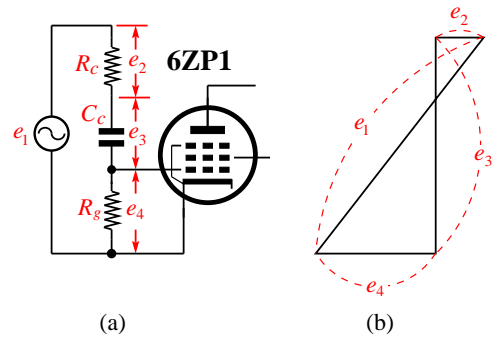


第 7 図 フィルターを入れるとハムは無くなる

1) 高周波一段低周波二段  
 2) グリッドに接続されるコンデンサー  
 3) グリッドリーク抵抗



第 8 図 ハムを生ずる回路



第 9 図 ハム電圧は分割されて 6ZP1 のグリッドにかかる

ました。そうするとハムは 76 の負荷の  $50\text{k}\Omega$  を通じてきているのです。結局そこに第 7 図のようにフィルターを入れるとよいことが判りました。このフィルターは前段との低周波結合が B 回路を通じて起るのを防ぐため、デカップリングといわれていますが、同時にハム・フィルターの役目もしているわけです。

このフィルターがないとなぜハムが大きいのでしょうか。また 76 を差してあるとないとで、どうしてハムの大きさが違うのでしょうか？

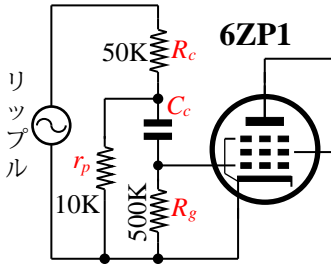
76 を抜いたときの回路は第 8 図のようになります。ハムを起すリップル電圧は B 回路の  $3\text{k}\Omega$  の出力側の  $6\mu\text{F}$  のところに生じているものです。これを等価回路に書き直すと第 9 図 (a) のようになり、B 回路のリップル電圧  $e_1$  は同図 (b) のような関係に分割されて  $e_4$  となり、それが 6ZP1 によって増幅されて出力に現われるわけです。それゆえ

$$e_4 = e_1 \frac{R_g}{\sqrt{(R_c + R_g)^2 + X_c^2}} = \frac{1}{\sqrt{\left(1 + \frac{R_c}{R_g}\right)^2 + \left(\frac{X_c}{R_g}\right)^2}}$$

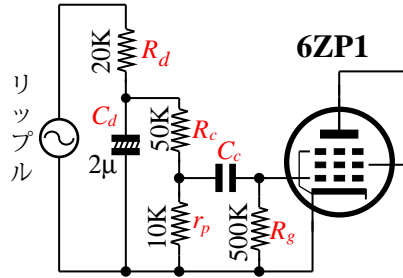
という関係になります。

今リップル電圧を仮に  $5\text{V}$  とします。またカップリング・コンデンサー  $C_c$  のハム周波数 50 サイクルに対するリアクタンスは

$$X_c = \frac{1}{2\pi f C} = \frac{1}{2 \times 3.14 \times 50 \times 0.01 \times 10^{-6}} = 320\text{k}\Omega$$



第 10 図 76 が差してある場合のハムに対する等価回路



第 11 図 フィルターがある場合のハムに対する等価回路

ですから、従って  $R_g$  両端のハム電圧は

$$e_1 = 5 \times \frac{1}{\sqrt{\left(1 + \frac{50}{500}\right)^2 + \left(\frac{320}{500}\right)^2}} = \frac{5}{\sqrt{1.6196}} \approx 3.9V$$

結局 6ZP1 のグリッドにかかるハム電圧は電源のリップル電圧の

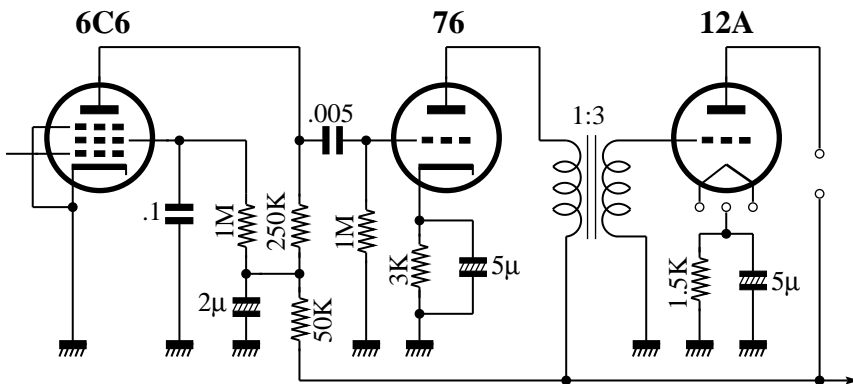
$$\frac{3.9}{5} = 0.78$$

すなわち約 78% がかかり、それが増幅されてハム出力となることが判ります。ところで 76 の内部抵抗  $r_p$  は 10kΩ 程度ですから、その動作中の等価回路は第 10 図のようになり、ハムはずっと減少することが判ります。

この回路にフィルターを入れた場合の等価回路は第 11 図のようになり、極めて有効にハムが除けることが了解できましょう。

### 1.6 並四球が鳴り出すまでのハム

ある初歩者が、“並四球を組みたてたところ、調子はよいがどうも気になることがある。それはスイッチを入れてから鳴り出すまでの間、ハムが大きく出る。ど



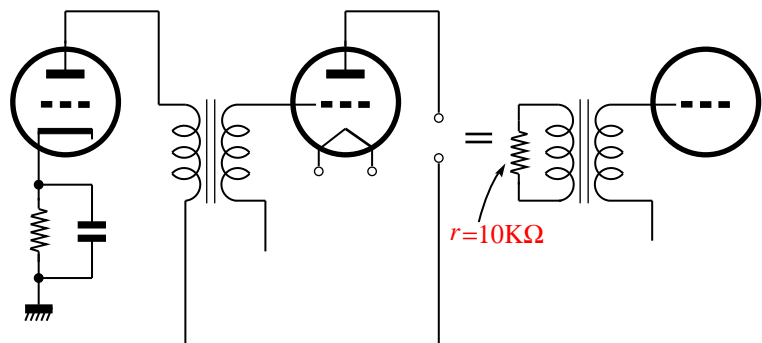
第 12 図 鳴り出すまでハムの出る並 4 球

このせいか”と相談に来ました。セットは第12図のような6C6-76-12A-12Fで、76と12Aの間はトランス結合になっています。近頃のこととて電解コンデンサーは十分な容量のものが使っており、B電圧のリプルがハムの原因となっているとは思われません。

たしかに、鳴っているときはハムはそれほど気にならない程度です。その状態で6C6を抜いてみましたが、ハムは大差ありません。次に76を抜いたところ、ハムは大層大きくなりました。要するに、スイッチを入れてから76がヒートするまでの間だけ、ハムが大きく出るのでした。76を抜いて置いた状態で12Aのグリッド・アース間をショートしてみると、ハムはピタリと止まります。またトランスの一次側P~B間をショートしても止まります。インプット・トランスの位置を試みに変えてみるとハムの出かたに変化があり、それをパワー・トランスから遠ざけてみるとハムは減っていきます。結局パワー・トランスとインプット・トランスが電磁結合をしていたためのハムでした。そのトランスをパワー・トランスから一番離れた位置に、そしてその向きもハムが最少になる状態にして固定しましたが、並4球のシャシー上では、パワー・トランスからの誘導を完全に除ききることはできませんでした。

原因は判ったのですが、“そんなら鳴り出すと、なぜハムが消えるのか”と説明を求められましたので次のように説明してやりました。

パワー・トランスからの磁力線によってインプット・トランスに



第13図 誘導されたハム電圧は76に消費されて減少する

は50サイクルの電圧が誘起され、それを12Aで増幅する結果大きなハムとなっているわけなのですが、76が動作しているときは、それを等価的にみると第13図のように、76の内部抵抗約10kΩが一次側に並列に負荷されているのと同じこととなります。すると誘起されたハム電圧は、76の内部抵抗中にハム電流となって流れ、そこにハム電力の消費が起きます。パワー・トランスから受けている誘導磁力線数は極めて少くそして一定ですから、76の内部抵抗により流れるハム電流の減磁作用のため、誘起されているハム電圧は降下して極めて僅かの値になっ

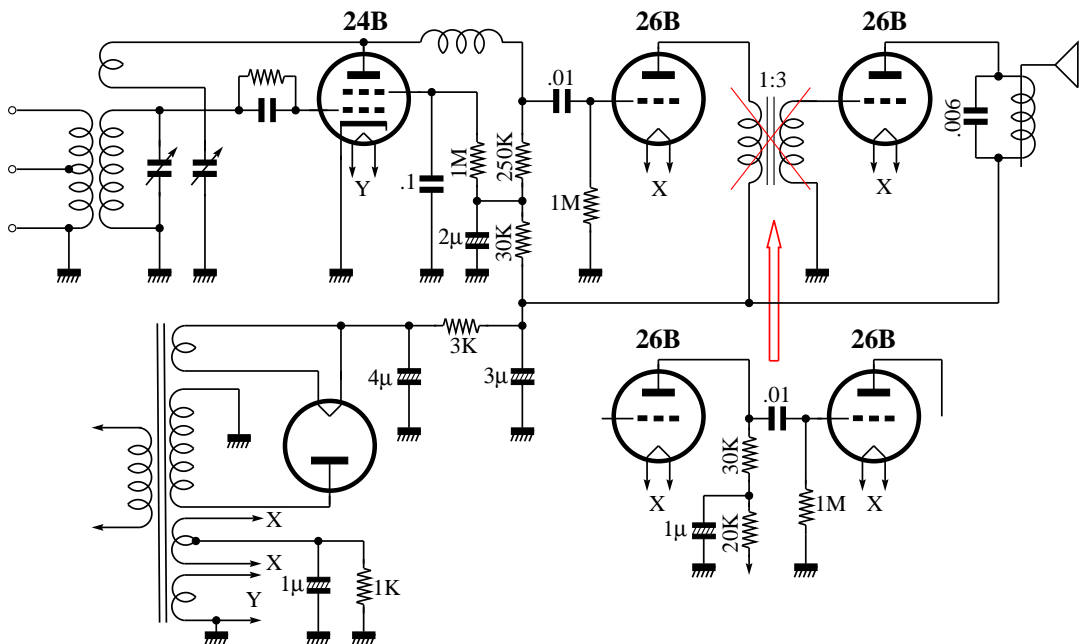
てしまうのです。要するにパワー・トランスを一次とし、インプット・トランスを二次とした特別に変動率の大きい一個のトランスのようになるのです。こうしてハムは減るのです。しかし76が差してあってもそれが動作するまでは内部抵抗は断れている状態なのです。ところが12Aの方は直熱型ですからスイッチを入ると直ぐに動作します。そこに76の動作と時間的なズレができて、その間だけは誘起電圧は低下せず、ハムは大きく出るのです。以上が鳴り出すまでのハムの原因というわけです。

ところで古くからやっているあるラジオ屋さんに聞いたととろ，“そんなことは昔の並四にはザラにあったんだよ”とのことでした。

### 1.7 抵抗結合にできない並四

第14図のような古い型の並四ですが、低周波トランスが切れたので、そこを抵抗結合にしてみました。ところがどうでしょう。ガーという連続音ばかりで、放送音声はちっとも聴こえてきません。モーターボーティングの周期の早いやつです。

そこで、デカップリング・フィルターのコンデンサーを増してやったり、カップリング・コンデンサーの容量を小さいものに取り替えてみたり、電源部のフィル



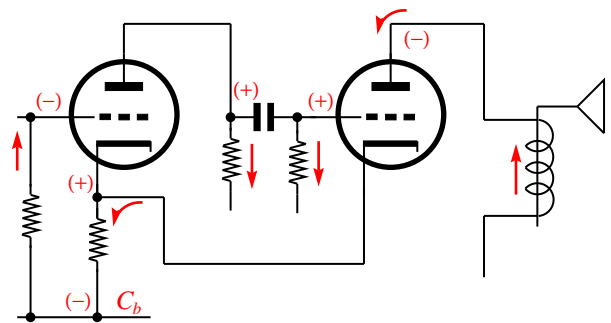
第14図 この4球は全抵抗結合にはできない



ター・コンデンサーを付け足してみましたが、さっぱり効果はなく、どうしても発振音は止まりませんでした。バイアス抵抗のところのバイパスを増してやると、発振音は低くなりますが音声は聞こえてきません。結局元通りにトランス結合にしてみました。今度はそれでも同じようにガーと発振します。昔の修理の本に、そういう場合は低周波トランスの接続極性すなわちP~BかG~Fのどちらか一方だけを反対にしてやれば止まるということが書いてあったのを思いだし、そうしてみたら発振音は止まり、元の通りに働くようになりました。ところが抵抗結合だったら、極性を反対にしろといったところで、抵抗には極性はないのだからどうにもなりません。結論として、抵抗結合にはできないことになります。

ところで、抵抗結合とするとどうして発振するのでしょうか。またトランス結合では接続極性によっては発振するのはなぜでしょうか。

これは26Bを2本使ってあるか、或は26Bと12Aを使ってあってもバイアス抵抗を共通にしてあるものに限り生ずる現象です。そこで2段の増幅回路が共通のバイアス回路で結合されるため、その位相関係がポジティブ・フィードバック（正饋還）になって発振してしま



第15図 共通バイアス抵抗による正饋還

まうものと考えられます。この場合の位相関係を図示してみると第15図のようになります。これを順を追って説明してみると、最初の段のグリッドが(-)になるようなシグナルがかかるとき、そのプレート電流は減ります。従って次段のグリッドは(+)の方向になり、そのプレート電流は増加します。次段の増加したプレート電流は共通のバイアス抵抗中を通り、そこに前段のグリッドがカソード(26Bではフィラメントの中心)よりも(-)になるような電圧を生じますから、結局入力シグナルで与えられたよりも一層大きく(-)になっていきます。以上の反対の場合も同様で、前段のグリッドが(+)になるシグナルがきたとすると、そのバイアス抵抗中を通る次段のプレート電流のため前段のグリッドはますます(+)になっていきます。これがすなわち正饋還ですが、共通バイアス抵抗中を通る次段のプレート電流は、前段のプレート電流に較べ非常に大きいので正饋還作用は著しく、ついに発振してしまうのです。

トランス結合ではその接続極性によってはネガティブ・フィードバックに反転

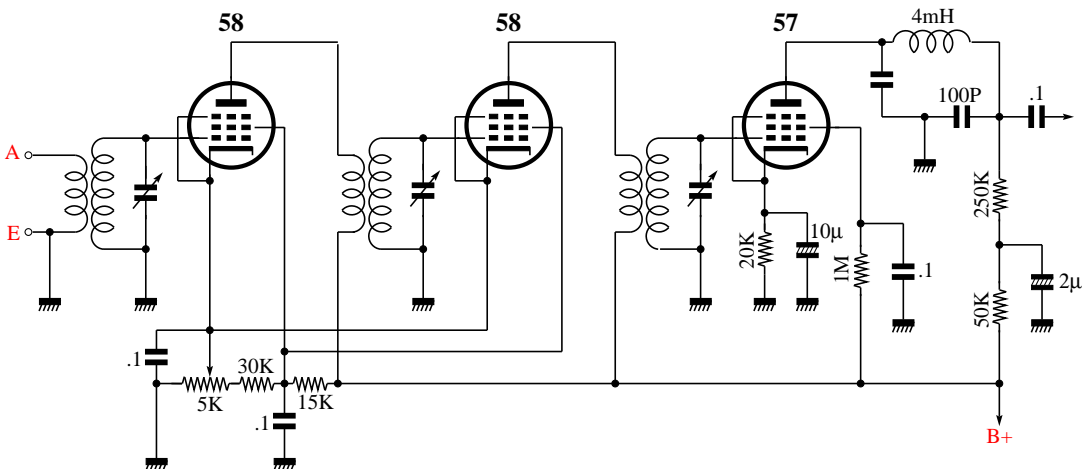
させることもできますから、発振を止めることは容易なわけです。

ところでバイアス回路にはバイパス・コンデンサーが入っていますが、一般には $1\mu\text{F}$ 程度ですから、高い周波数以外はリアクタンスが大きくて役に立たず、従って低い周波数で発振してしまうのです。たとえば容量を増してみても発振周波数が低くなるだけで、有効に防ぐことは困難でしょう。誰も一度はこの苦い経験を持っている筈です。

## 1.8 迷惑な高周波二段セット

自分の家の受信機は月並の高一で、故障や異状はない筈なのに、それが聴取中にシャーッという音がしてきて放送が聴きとれにくくなるのです。そしてその現象は第一放送だけに限り、特に浪曲とか歌謡曲のような大衆プログラムのときによく起こります。また第一放送がその雑音で聴取困難なときに第二放送を聴いてみると全くなく、連続して聴いていてもその雑音は決して這入らないのです。アースだけで受信しているのですが、そのアースをアンテナ・ターミナルから外してみれば雑音は這入らなくなりますが、放送ももち論受かりません。以上のようなことから、結局これは外来の障碍で、近所のどこかの受信機が関係しているらしいと見当をつけてみました。

この話の受信機のある土地は放送局から相当離れていて、そろそろ近距離フェーディングの起きようとする限界のところですが、上記の雑音は近所のラジオにも同じように這入ることが判りました。この障碍の発見には長い期間かかりましたが、結局近所の或る一軒でラジオをかけているとき、そのラジオが同一電灯線回



第 16 図 高二は自己発振を起しやすい

路で聴いている他の受信機に妨害を与えるのだということを探り当てました。しかしそのラジオが第二放送を聴いているときは、近所のラジオは何ともなく、また第一放送に障害を与えているときでもビートは伴わないのですから、単なる再生障害ではないらしいのです。

妨害発生受信機を調べてみたところ、それは誰か熟練していない者の試作品らしい高周波二段で、おまけに低周波も二段というすさまじいものですが、再生式ではありません。そして使用球は 58-58-57-56-2A5-80 という大分以前に作られたものらしいのです。この受信機の高周波部分の回路は第 16 図の通りで、第一放送を受信するときは、他に与えている妨害雑音と同じジャーツという音がして、やはり放送はろくに聴きとれません。これは同調点を少しずらしボリュームは最大にした状態で受信していたときですが、試みにボリュームを少し絞り、同調を完全に合わせてみたところ、今度は強いビートが出てまるきりダメで、その状態ではもち論近所へも強いビート妨害を与えます。

妨害発生受信機の電圧をチェックしてみたところ、2A5 のプレート電圧は、ボリュームを絞りきったときは 400V にもなっていて、そのカソード電圧は 420Ω のバイアス抵抗に対し、わずか 5V しかでていません。これは 2A5 のプレート及び SG 電流<sup>1)</sup>の合計が 12mA 弱しか流れていないことを意味し、要するに 2A5 が大分ボケているので、その他には故障箇所はありませんでした。そこで 2A5 を新品に取替えてみると、その正味のプレート電圧は 250V、カソード電圧は 18V 近く出るようになり、大体定格値に近い状態になりました。そしてボリュームを相当に絞った状態で聴いてみると低周波 2 段のおかげで実用程度に受かり、また近所への妨害も起しません。しかし或る程度以上ボリュームを上げる、即ち高周波増幅の感度を上げてやると、その受信機のスピーカーからものすごいジャーツという音を発し、近所の受信機も全く聴こえなくなってしまう。

これはつまり高周波増幅回路で自己発振を起したので、従ってボリュームをある程度絞って高周波増幅管の感度を下げてやれば自己発振は停止するのです。ところが 2A5 を取換える以前は B 電圧が非常に高くなっていたので、自己発振は極端に強く、ボリュームを全部絞ってみたところで発振が停るまでにはならなかったのです。面白いことには 3 連バリコンの単一調整がほとんどデタラメで、かなり同調はブロードであるらしく、従って同調点を少し位ずらしても少しは受信できるのです。そしてそのときの自己発振の周波数は到来電波と 10kc 近く離れる

1) スクリーングリッド電流

ので自他ともにあまりビートは感じなかったものの、到来電波の近接周波数で強い発振出力を出しているのですから、近所の高一や並四ではそれを分離しきれず、その勢力で受信機はオーバーロードしてしまい、結局放送電波は打消されてしまうような現象になったのでしょう。それが第二放送の周波数附近になると妨害受信機の単一調整は一層狂いが大きくなり、もう自己発振は起さず、大体差支えなく聴えていたのです。これは単一調整を完全にしようとする<sup>わた</sup>と、全バンドに亘って自己発振をするので判ったのです。

この妨害発生受信機の自己発振は、そもそも高周波回路の配置の不適当によるもので、即ち写真で見られるように6D6-6C6の各トップグリッドへいく線が並行しているため、そこでフィードバックするからです。これは組み直しでもしなければ、なんとしても救われない状態でした。ともかくも高周波2段を一人前に仕上げることは、なかなかむずかしいもののようです。

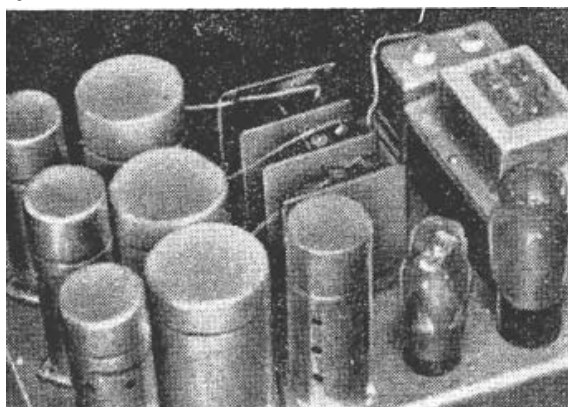
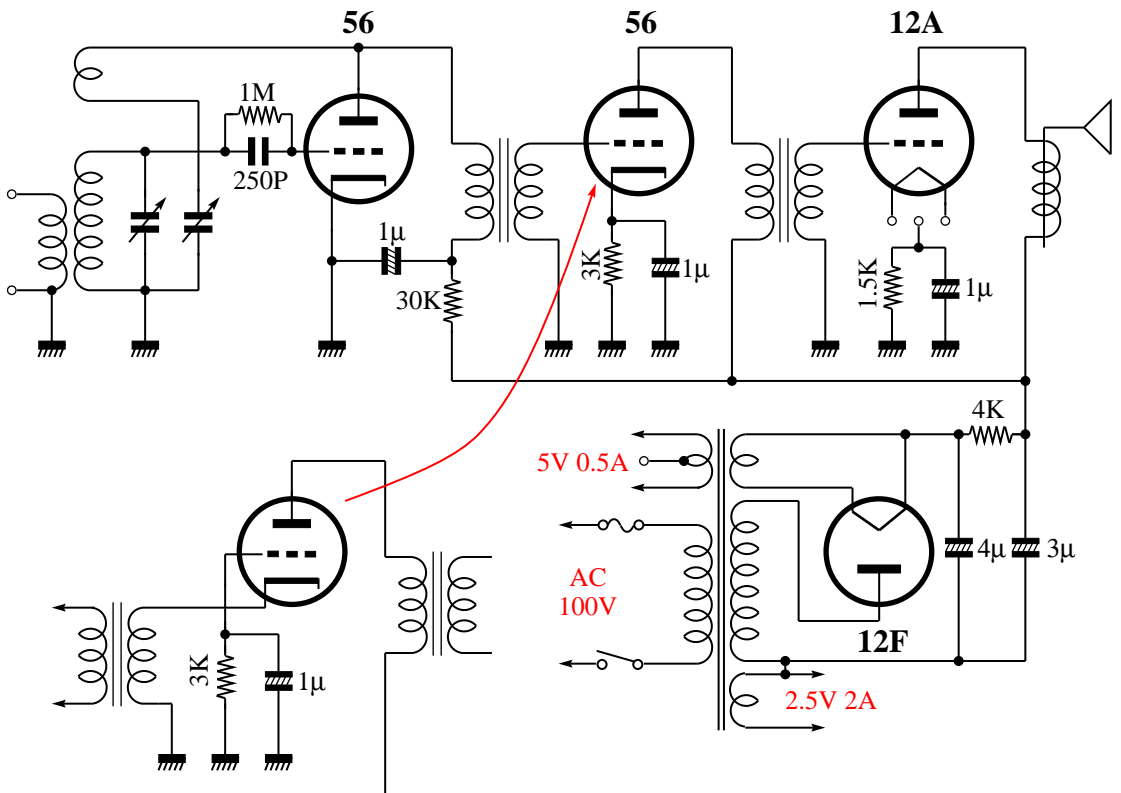


写真 トップ・グリッドの線で結合し発振する

## 1.9 また並四受信機の不思議

並四受信機が修理にやってきました。お定まりの低周波トランス断線なのです。交換するべくはずしかけてフト気が付いたのは、2段目の56の回路に間違いがあり、第17図のようにそのグリッドとカソードの接続が反対になっているのです。部品の様子からみると、原形は26Bであつたらしく、それを56に替えるため、ヒーター電圧を検波の56から引いてきてありますが、ソケットを取替えるときにそのカソードとグリッドを取違えてしまったものらしいのです。工作の手ぎわが実に下手で、一見してシロウト仕事と判りますが、それにしてもグリッドとカソードを間違えているのですから、あまりにもひどすぎやしませんか？

「これじゃトランスが断れなくとも聴えるわけではないですよ。一体どんな人がこれをいじったんですか」と持主に聞いてみると、「一昨年球が無いとかで、隣りの中学生が改造してくれたんです。ラジオにかけては天才的な子供ですよ。それからは音が前より良くなり、故障なしにずっと今まで聴いていたんです」という答です。ラジオを修理に持ってくる客にはこういう手あいが多く、さんざんい



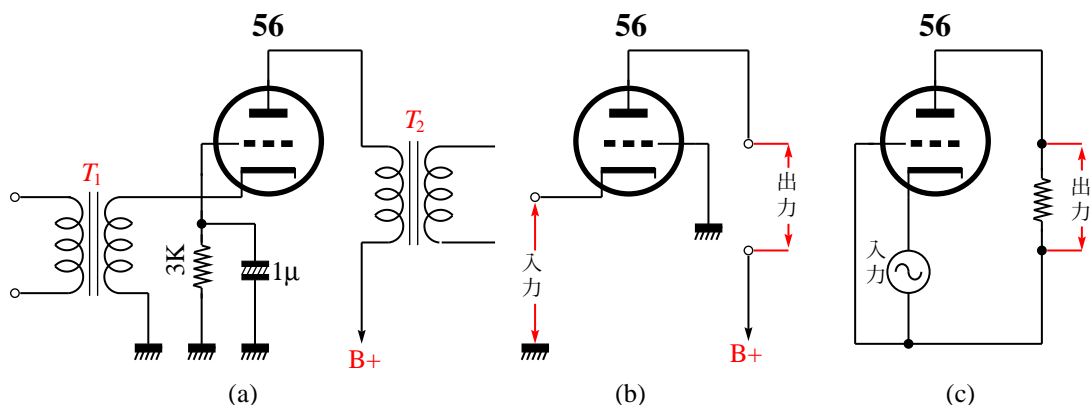
第 17 図 56 のカソードとグリッドを取り違えたら

じり廻して壊したあげく、どこも手を付けてありませんと、そらとぼけるのです。

「こんな間違った配線をしてあって、鳴るわけはありませんよ、誰かが直しかけたんでしょ」となじると、「いや絶対に。故障して直ぐこちらへ持って来たんだ」と、客はムキになるんです。

こっちも癪にさわったので「そんならこのままで、切れたトランスだけを新しくしてみますよ。そして、もし鳴ったらお金は頂戴しないでもよいです」と宣言し、お客の見ていない前で、誤配線のままトランスだけを取替え、「いいですか、聴いていてごらんなさい」と、スイッチを入れると、どうでしょう、かなりの音量で鳴り出したではありませんか。

ハテナ？ すると 56 の球が、ベースの中で反対に接ぎ直してあるのだなと思い、「この 56 はインチキです。球の中に仕掛けがしてあるのです。新しい球を差してみますから」といいながら試験用の 56 を差してみると、何とまた同じくよく鳴るではありませんか。客はソラみたことかという顔つきで、笑いながら修理代は置いていってくれましたが、面目まるつぶれです。開業以来こんなにハジをかい



第 18 図 カソードとグリッドを取違えればカソード・インプット方式になる

たことは始めてです。56 なんてそんな働きをする球なんでしょうか。このわけはどうしてでしょうか？

以上は私がいつも行くあるラジオ屋さんが不思議そうに語ってくれたものです。要するにトランス結合の並四受信機で、2 段目の 56 の配線を誤り、第 18 図 (a) のように、カソードとグリッドを取違えて接続したところ、相変わらず鳴っていた、というのでした。

これを考えてみるに、グリッド回路の  $3\text{k}\Omega$  の存在は、グリッド電流が流れない限り、問題ではないわけです。また低周波に対しても  $1\mu\text{F}$  があるためインピーダンスは非常に低く、無視してもさしつかえありません。従ってこれは、同図 (b) のようにグリッドを直接にアースしたと同様です。要するにこれは同図 (c) のようなカソード・インプット方式という特殊な増幅回路となっているわけです。またこの場合、56 のカソードとアース間には、トランス  $T_1$  の二次側が入っているので、この直流抵抗がちょうど自己バイアス抵抗の働きをします。このような条件で、けっきょく正規な増幅作用をするわけです。

カソード・インプット方式では、入力端子のインピーダンスは高くありません。そのため  $T_1$  の二次側へ並列に抵抗を入れたように働き、検波管に対する負荷インピーダンスを低下させ増幅度は小さくなります。特に高音部では  $T_1$  による損失が大きくなります。また、逆に出力インピーダンスは高くなりますから、 $T_2$  による低音部の損失が幾分大きくなります。

要するに、このように、56 のグリッドとカソードを間違えても、鳴ることに不思議はないわけです。といっても、わざわざこのような配線にするほどの利点はないでしょう。

## 1.10 幽霊放送局!?

私のセットは並の高周波一段再生式の4球です。私の家は東京都内です。ですから東京の放送は、第一も第二も、そして進駐軍向け放送<sup>1)</sup>も、みな調子よく受かります。しかしそのほかにもう1つ不思議な放送が受かるのです。

それはダイヤルの目盛の1500kcに近い方で受かるのですが、面白いことには、その放送局では、JOAK<sup>2)</sup>と東京AFRSのプログラムを同時に出しています。つまり2つのプログラムがゴチャゴチャに混じって、同音量で聴えてくるのです。

友人の家の並四球で受けようとしてみましたが、その放送は全然受信できず、ビートすら出ません。ところが高周波一段か二段のセットなら、都内のどこの場所でも、例の放送が完全に受信できることが判りました。要するに、並四では全然ダメで高周波増幅が付いていれば聴こえ、また高周波一段付きのスーパーでは、特によく受信できるのです。

不思議な放送の周波数を正確に測ってみたら、それは1360kcです。そしてその放送はJOAKとも、また東京AFRSとも同じプログラムですから、それに関連があるものと思ったところ、JOAKの放送が終わってしまうと、東京AFRSは放送中にもかかわらず、不思議な放送もJOAKと共に消えてしまいます。まるで幽霊のような放送です。受信機で再生を起してみるとその周波数のところでビートが出ますから、たしかにその放送はあるのです。この放送は毎日続けられていますから受信してみてください。

ところで種明かしをしてしまえばこの怪放送の正体は、高周波増幅回路で起きるクロス・モジュレーション（混変調）といわれる現象なのです。1360kcは、即ちJOAK 590kcと東京AFRS 770kcの和の周波数

$$590 + 770 = 1360(\text{kc})$$

です。

どうしてこういう現象が起きるのでしょうか。受信機のアンテナ回路には、JOAKと東京AFRSの2つの高周波電圧が同時に誘起されているはずですが、これは同調回路で分離されるので、両者は別々に聴取することができるのですが、もし大きいアンテナ、あるいは電灯線アンテナ<sup>3)</sup>即ちアース・アンテナなどの場合には、第

1) 1952年、米国を中心とする連合国とのサンフランシスコ講和条約が締結される以前に、日本に駐留していた米軍向けの放送。NHKが担当したため、NHK「第一放送」「第二放送」にならって「第三放送」ともAFRS (American Forces Radio Service)とも呼ばれた。後のFEN

2) 東京第一放送のコールサイン

3) 屋外に架設してある電灯線をアンテナとして使用する方法。ラジオのアンテナターミナルをアースする。「アース・アンテナ」ともいう

一段目の同調回路だけでは両者を完全には分離できず、全同調範囲に涉って、幾らか混じるはずですが、しかし次段の同調回路で完全に分離しきってしまいますから、混信のおそれは全く無くなるのです。

この場合、第一段目で分離しきれないことが問題なのです。たとえばバリコンを廻して 1360kc に合わせても、第一段目の真空管のグリッドには JOAK と東京 AFRS の両シグナルが少しはかかっています。そこで高周波増幅管の特性に非直線性があるときは、増幅と同時に僅かでしょうが検波をします。この頃の球のように特性の悪いものではこれは不可避です。二つのシグナルを同時に検波すると、スーパーの周波数変換と同じ理由で、プレート側には両周波数の和または差の周波数即ち中間周波を生じます。JOAK と東京 AFRS の和は 1360kc、差は 180kc ですが、このうち 1360kc は放送周波帯に入りますから、二段目の同調回路をこれに合わせれば、そこで増幅され検波管に達し、両シグナルの合成プログラムが完全に受信できることになります。

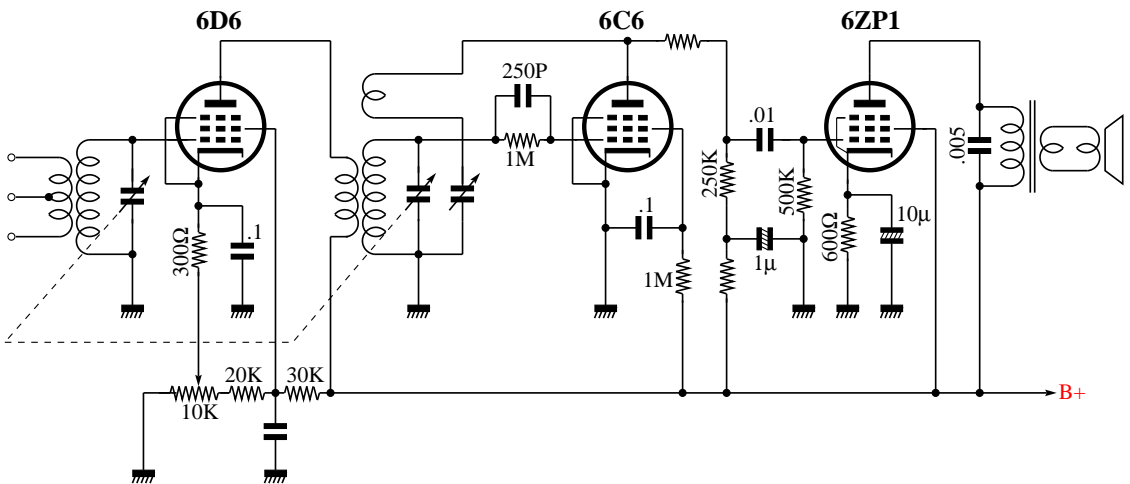
即ち初段の高周波増幅管が混合管として働き、二段目の同調回路は中間周波回路となり、丁度スーパーのような原理で動作するわけなのです。ただしこのスーパーでは、局部発振は無くその役目は 2 つの放送電波のどちらかが引請けているわけです。上記と同じ現象即ちクロス・モジュレーションは、二重三重の放送のある地方で、その 2 つの放送の周波数の和が BC バンド内に入っていれば起る可能性があります。

### 1.11 高周波管が切れても鳴っているラジオ

友人が「近頃うちのラジオは音が小さくなった。ラジオ屋へ持って行こうと思いついおっくうで。球が 1 本消えているだけらしいので、残りの球だけでまだ鳴っているんだから……」というのです。見ると高一 4 球で、消えているのは高周波増幅の 6D6 です。試しにボリュームのツマミを廻すと音量には何の変化もありません。再生作用もスムーズに効いています。なるほどあまり音量は出ませんが、それでも並 3 を室内アンテナで聴く程度の感度は、かろうじてあります。

このラジオはアマチュアの作品らしく、どうも感心できない配置です。調べる道具は何一つ持ってきてないので、電氣的なことは判りませんが、回路は第 19 図のような最も普通な式で誤配線や故障箇所はなさそうです。6D6 が切れても鳴るとすると、まず考えられることは、強い電波が検波コイルに直接感じて鳴るこ





第 19 図 このラジオは 6 D 6 を抜いても鳴る

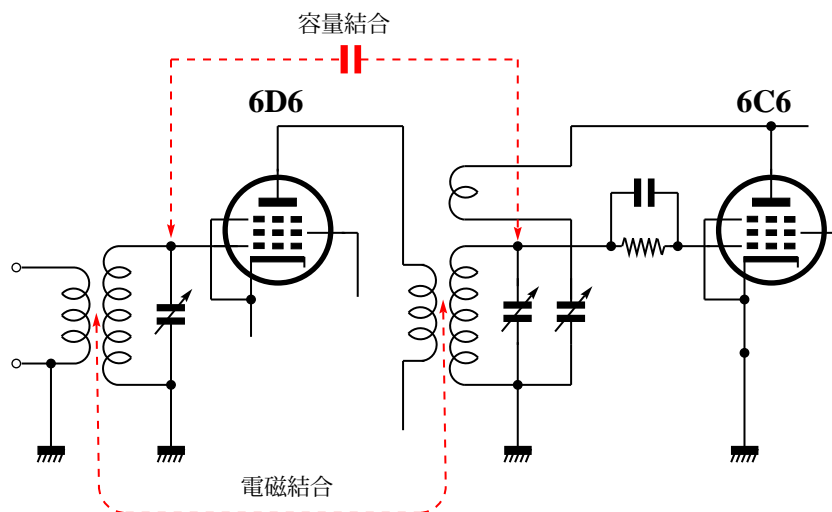
とです。そこでアンテナ・ターミナルに挟んであるアース線ははずしてみたところ、感度が下ってしまい実用にはなりそうもありません。次に考えられることはシグナルが 6D6 の電極容量  $C_{pg}$  を通じ、初段コイルから検波コイルへ感ずることです。ところが 6D6 を抜いてみましたが、全く影響なく鳴っています。6D6 には SG<sup>1)</sup>があるので  $C_{pg}$  は非常に小さいのでした。

ここで一つの冒険を考えました。6D6 のヒーターにパワートランスの B 電圧をかけ、切れたところを熔接してやれと、パチンとやってみたところ、はたして大成功です。これで完全に鳴るわいと、6D6 を差してみると、ギャーといって放送も何も聴えません。猛烈な自己発振です。ボリュームを絞っていくと、ある点から発振は止み聴えるようになりますが、このときの音量は先の 6D6 が切れていた状態のときより少しよい程度です。それにもかかわらず、友人曰く「おかげで作って貰ったときの最初の状態と同じになった」と大喜びです。ラジオとは、調節のしかたによっては変な音が出るのが当りまえだと思っているらしいのです。

友人のラジオの話はこれでおしまいです。さて我々にとっては、6D6 が断れていてもなぜ聴こえるかという問題が残っています。

以上のように、高一 4 球が激しく発振するのでボリュームを最大にすることができず、いつも高周波のゲインコントロールを半分以下に絞って聴かなければならないというシロモノで、その高周波増幅管 6D6 を抜いておいても、かなりの音量で受信できるものはメーカー製品では見られませんが、初歩アマチュアの自作品にはよく見られます。その理由を解くことは、高周波増幅回路の配置を検討す

1) スクリーングリッド



第 20 図 6D6 無しでも鳴るわけは

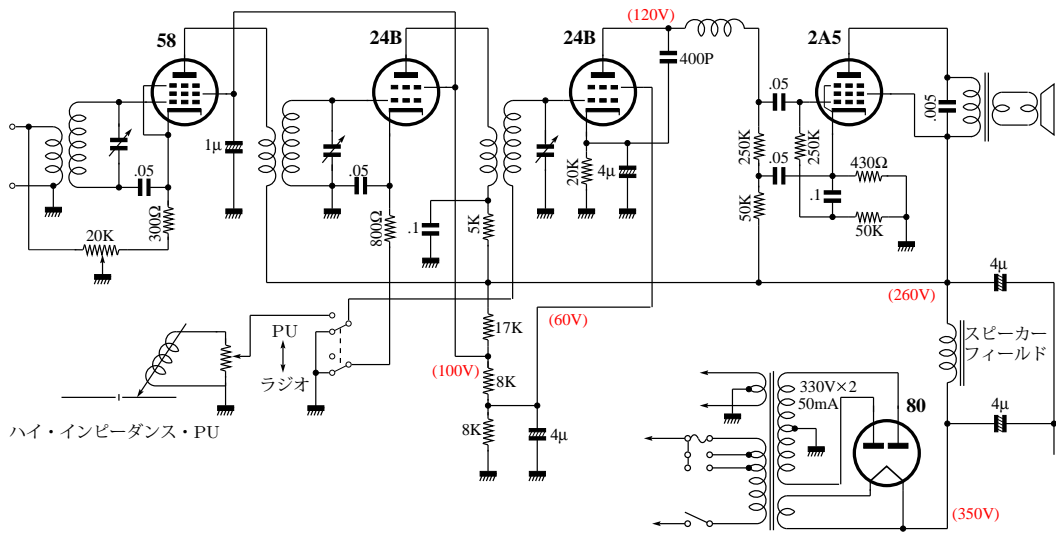
るのにぜひ必要なことです。以下それを考察してみましょう。

6D6が無い状態でアンテナを外してみると（アース・アンテナ式受信法でしたらアースを外す）殆んど受信できなくなるのですから、電波が直接検波コイルに感じているのではないことは確かです。

そうすると可能な二つの場合を考えてみると、その一つは初段コイルと検波コイルとの間の電磁結合、次は両同調回路が容量結合されている場合で、もち論両方の原因が同時に重なることもあります。いずれにしてもそのような場合には、6D6の感度を上げていけば必ず発振をします。この証明には、メーカー製品で初段のグリッド側の線を検波のグリッドに接近させてみると、問題の現象を起させることができます。コイルは初段はシャシーの上に、検波段は下へ取付け、且つ互に直角に配置するので、下手に組んでも両者の電磁結合は少いでしょう。二連バリコンの上部からコイルまたは6D6、6C6のトップ・グリッドへ持って行く線がクセモノで、この間の漂遊容量はバカにできません。多くはこれで失敗するので、特に高周波二段増幅などはむずかしいわけです。組上り後の調整方法の一つとして6D6を抜いても相当な感度で受信できる、ということのないように両段の配置を変えてみて、前段と検波段との結合を減らす必要があります。

## 12 レコードが鼻声の電蓄

第 21 図のようなビクター JR-101 のラジオ・シャシーを利用して組立ててある電蓄です。かねがね“レコードの音が悪い”と聞いていたので、それを調べてみました。ラジオの音はよいのですが、ピックアップに切替えてレコードを掛ける



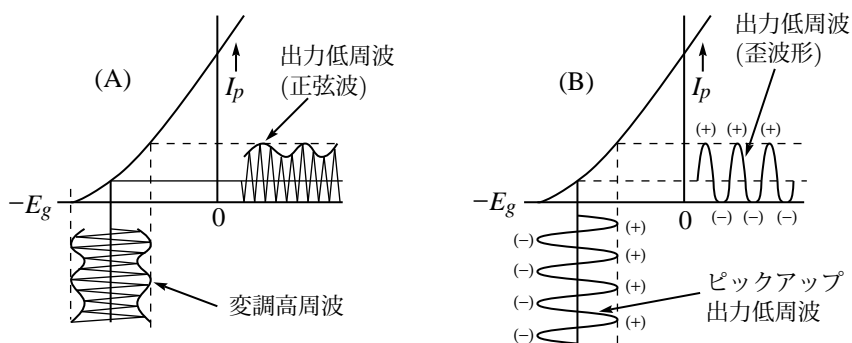
第 21 図 ビクター JR-101 型

と、なるほど鼻詰まり声です。

これはピックアップが怪しいな、と考えました。ピックアップの針を指先でこすってみると、右の方へこするときは音が出ますが、左の方へこすったのでは音は小さく、まずほとんど出ないのです。さてはアマチュアの片寄りだな、と思ってピックアップの蓋を取って見ると心持ち片寄りしていたのでそれを修正しました。再び針を付けて指でこすってみると、なんと今度は前と反対に、左の方へ向ってこすと音が出て、反対だと出ないように変わっています。やれやれもう一度か、と再び蓋を取ってアマチュアを見ると、チャンとポールピースの中央に位置していて、指で針を押してみた感じでも片寄ってはいないことが確認できました。そこで今度は蓋を取ってあるまま針をこすってみると、なんとまたまた反対になり、最初のとおりと同じ状態になってしまいました。

ここで気付いたことは、アマチュアを調べるには磁石を取はずすので偶然ですがその都度磁石の極性を反対に変えて取付けていたのです。要するに磁石の極性によって、右にこすると音が出たり、極性を逆にすると左にこすとき音が出るようになるのです。いずれにしても片方へこすったときだけ音が出るのです。ですから、この状態でレコードをかければ音声出力波形は半分になるので、結局鼻詰まりの音しか出ないのです。

さて以上の現象は、ピックアップの不良でしょうか。それともシャシーの方に故障があるのでしょうか。ちなみに、シャシーを調べてみたところ、図に記入のように、部品定数や電圧電流状態ともすべてビクター社で発表してある通りで異



第 22 図 検波の動作状態で増幅に使ったら

状は認められません。

ところで配線図をよく見ると、検波の 24B のカソードの抵抗値が  $20\text{k}\Omega$  になっているので、これでは増幅用としては高すぎるように思えました。そこでレコードをかけながら試みにこの  $20\text{k}\Omega$  に並列に  $3\text{k}\Omega$  の抵抗を当てがってみました。案の通り、当てがったトタンに音は良くなり、音量もややふえました。

このことはビクター社で発表された通りの接続にしたのではプレート検波の状態のままピックアップに切替えられるので、従って第 22 図のようにピックアップの出力低周波をも検波してしまうので、24B の出力波形は半分になり、それが鼻詰り声の原因となっているのだということを物語っているわけです。

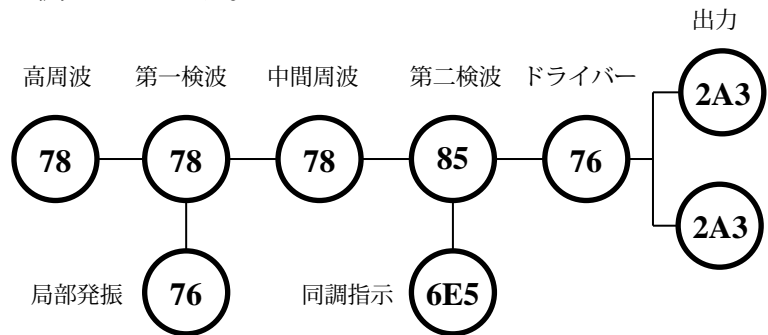
ピックアップの針を指でこする方向を、その起電力が 24B のグリッドが (+) になるようにこすればプレート電流は流れますが、グリッドが (-) になるようにこすったのではプレート電流は遮断されてしまいます。それゆえ音の出るのは片方向だけになるのです。ピックアップの磁石の極性を反対にすれば、こする方向は同じでも起電圧の極性は反対になるから上記の現象も反対になるまでで、決してピックアップの不良ではありません。この場合レコードの音を良くするには、検波管のバイアスも切替えられるようにする必要があるわけです。

## 第2部 スーパーに関するもの

### 2.1 85の代りに6ZDH3は使えなかった

スーパーの第二検波用の真空管として国産品では6ZDH3Aが唯一のものであることは、保守に際して困ることが往々あります。75の代りには6ZDH3を差替えるか、またはちょっと接続替をして6ZDH3Aに取替えることもよいでしょう。しかしDAVC回路<sup>1)</sup>のように二極プレートを別々に使ってあるものでは二極プレートが一つしかない6ZDH3Aではどうしても間に合わず、その場合は同じ国産に6SQ7がありますからソケットを取替えてそれを使うより仕方ありません。85を使ってあるセットでも大体上記と同じようにして間に合わすこともできますが、中にはそれではダメな次のような例もあります。

第23図のようなビクター RE-48 型の電蓄ですが、この第二検波は85で、その二極部の二つのプレートは、いっしょにつないであります。この85が断線したので、ソケットの接続が同じですから、6ZDH3を代りに使おうとしました。



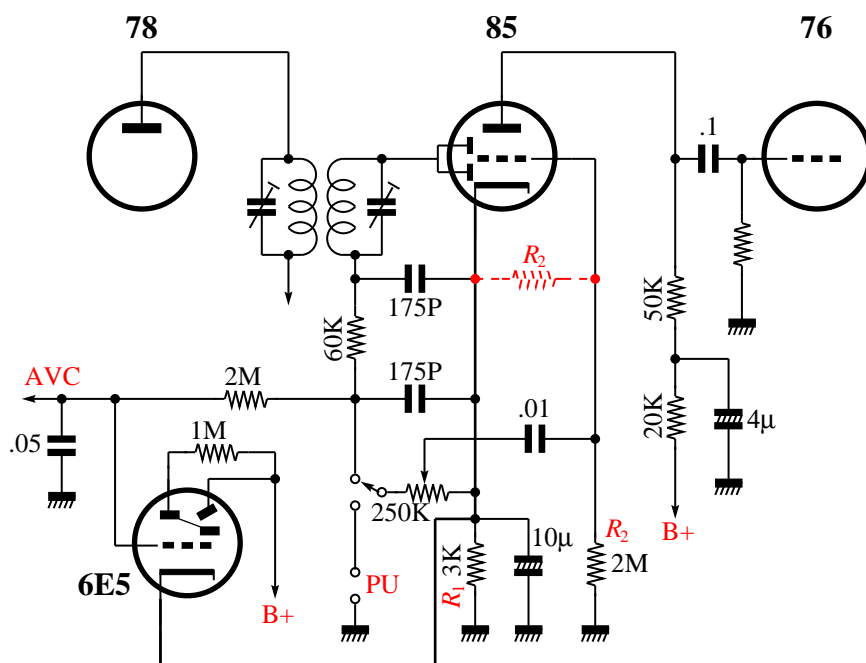
第23図 ビクター RE-48 型概要図

ところが、このセットは85のソケットへそのまま差しただけでは全然働いてくれません。ウンともスンともいわないのです。85の増幅率は8.3で、6ZDH3のそれは100ですから、増幅度は上りこそすれ全然鳴らないということは考えられませんでした。実際にはダメなのです。

このセットには第24図の通りマジック・アイ6E5が付いていますが、85を6ZDH3に代えても6E5のシャドウは完全に同調を指示してくれるのをみると、6ZDH3の二極部までは完全に働いていることは判ります。6ZDH3を何本取替えてみても鳴らないことには変わりありません。要するに三極部が働かないらしいのです。

それにもかかわらず、ピック・アップに切換えてレコードを演奏するには一向にさしつかえなく、よく鳴ります。回路を調べてみると、6E5は電蓄に切替えた

1) Delayed Automatic Volume Control——遅延自動音量調節。一定の検波電圧になるまではAVCが働かないようにしたAVC回路



第 24 図 ビクター RE-48 型の第二検波回路

ときにはそのヒーター回路が連動スイッチで切られ、ヒーターが消えるようになっていました。そこで試しにラジオ受信の状態でも6E5をソケットから抜いてみると、トタンに鳴りだしたではありませんか。しかし調べたところ、6E5は不良ではありません。

回路を詳しく調べてみたところ全然異常はなく、ただこの回路では6ZDH3のようなハイ・ミュー管では動作しないようにできているのでした。

その理由は次の通りです。85のバイアス抵抗 $R_1 = 3k\Omega$ には6E5のプレート電流が共に流れるようになっていて、両プレート電流でちょうど85の三極管部に適当なバイアス電圧が得られるように設計されているのです。

もし85を6ZDH3に代えると、6ZDH3のプレート電流は小数点以下の値で、6E5のそれは数ミリアンペアですから、従って $R_1$ によるバイアス電圧は殆んど6E5のプレート電流だけで作られてしまい、その値は6ZDH3にとっては全然動作不能になるくらいの高値、即ちカットオフ・バイアスとなってしまいます。

この場合、 $R_1$ の $3k\Omega$ をショートさせれば6ZDH3の三極部は動作するようになりますが、AVCのかかっている高周波増幅、第一検波及び中間周波増幅の各78のバイアスの状態が変わるので、どうもおもしろくないようです。そこで $R_2$ の $2M\Omega$ のアース端をはずして、それを赤線で示したようにカソードにつなぎ替え

ることにしました。これで動作は完全になりました。

この場合 6ZDH3 は、一見ノーバイアスのように思えますが、最初のシグナルによるグリッド電流のため、 $R_2$  中に自己整流バイアスを生じ、うまく動作してくれることは近頃の一般のスーパーでみられるものと同様です。

## 2.2 東京第二放送 950kc 受信にビートが出るスーパー

東京第二放送 JOAB の周波数が 950kc に変更されてから以後、ある種のスーパー、特に自作品に多いようですが、950kc を受信するとき連続したビートが出てしまって、実に聴き苦しいものを時おり見うけます。

そのようなスーパーを調べてみると、いずれも中間周波トランスの調整が 463kc よりも周波数の多い方へ少し狂っていることがみられました。

そして中間周波トランスのトリマー・コンデンサーを僅か締めてやり、本来の 463kc に正しく調整し直してやると、ビートから脱れることができます。つまり正確に中間周波トランスを調整してある受信機では、このビートはもともと起きないのです。

ではこのビートはどうして出るかを解いてみましょう。いま中間周波の同調が 10kc 狂っていて 473kc になっていたとすると、その第二高調波は

$$473 \times 2 = 946\text{kc}$$

になりましょう。従って JOAB 950kc のシグナルを受信すると

$$950 - 946 = 4\text{kc}$$

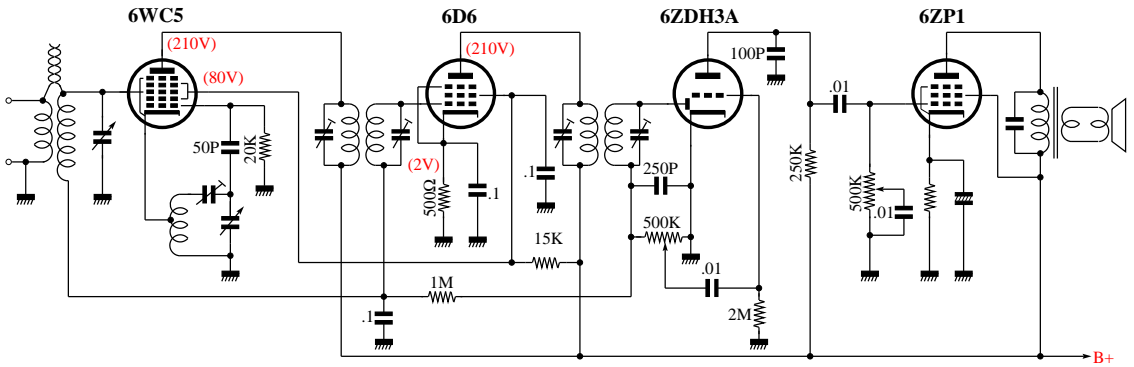
即ち 4000 サイクルのビートを作り、連続した笛音を発します。ともかくも中間周波数が 470~475kc の間で狂っていれば、JOAB 950kc に対しては、そのイメージとの間に 0~10000 サイクルの間でビートを作るわけです。また 950kc の放送を受けるときビートの出るものは、中間周波が狂っているということもできます。

それでは中間周波が正しく 463kc に調整されている場合、この第二放送の受信状態はどうなるかというに、そのイメージは 950kc 同調点から

$$950 - 463 \times 2 = 24(\text{kc})$$

だけ離れた、即ち 974kc に出ます。本当の受信点では AVC で音量を抑えられ、イメージの方は勢力が弱いため AVC はあまりきかず、そのため実際の受信点とイメージとで 2 点同調のようになるか、場合によっては同調がブロードになったような現象になることが一般に見うけられます。

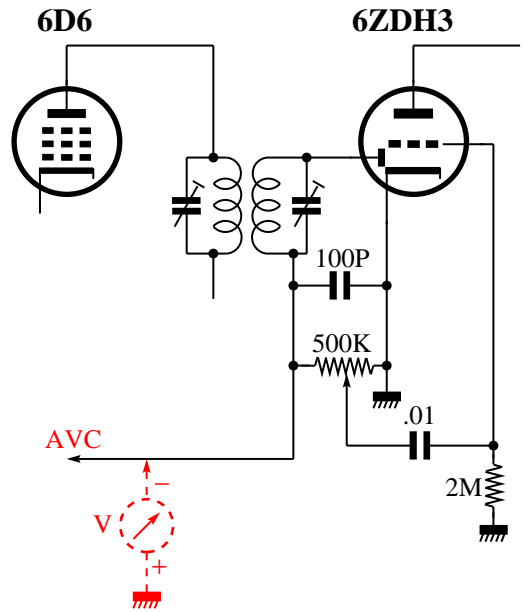
## 2.3 ハイ・インピーダンス・アンテナコイルとスーパーの自己発振



第 25 図 中間周波発振を起しやすいスーパー

買って間もないスーパーだが、雑音が出るようになったから見てくれと呼ばれました。第 25 図のような 5 球スーパーです。ダイヤルを廻して調節をしようと思ったら急に唸音が出たので、怖くなってそのままスイッチを切って、以来ずっと聴かないでいるといいます。

スイッチを入れてみると、真空管が働きだしてきたトタンにガーと凄い唸音が出て放送も何も聴えません。ダイヤルの目盛を見ると、周波数の一番低い方の端へ針が来ています。そこで放送を受けてみようとしてダイヤルを東京第一放送の方へ廻していくと、ある点で唸音はピクリと止み、放送は何の変りもなく入ってきました。他の遠距離局も普通に受信できるところをみると、中間周波やトラッキングの調節も大体よろしいように思えます。要するにバリコンを一杯に入れたところつまり受信周波数の一番低いところにダイヤルを廻したときに限って唸音を起すということが判りました。



第 26 図 放送を受けないのに AVC 電圧が出るのは自己発振

シャーシをキャビネットから出して操作してみると、バリコンを 100 度にしたときザーッと強い音は出ますが、しかし唸音にはなりません。その状態で第 26 図のように、第二検波の負荷抵抗のところへテスターを当ててみると、放送に同調させていないにもかかわらず電圧が示され、つまり整流電流が認められました。

これは中間周波の自己発振にほかなりません。しかし自己発振が中間周波増幅

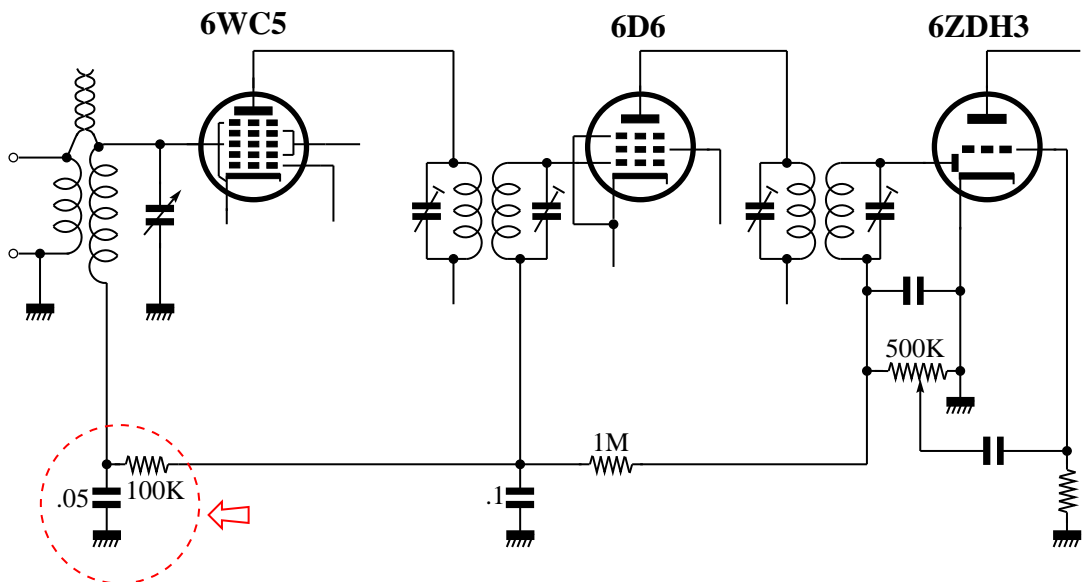


回路だけで起きているものでないことは、ダイヤルを廻すと自己発振が止まるので判ります。中間周波トランスの配置、及びその配線が不適當などで自己発振をしているなら、高周波の同調周波数には無関係のはずです。そうすると、これは中間周波勢力が同調回路へフィードバックしているものと考えられましょう。それゆえ、同調周波数を中間周波数 463kc に近いところ、つまりバリコンのハネを一杯に入れた場合の 500kc ぐらいのところに限って自己発振を起すのでしょう。

そこで、その自己発振の原因を調べてみました。まず気がついたのはアンテナ・コイルがハイ・インピーダンス型のものだということです。そしてアンテナ・ターミナルからアンテナ・コイルへのリード線が、中間周波増幅管 6D6 のソケットのすぐ近くを通過していました。そのリード線を、シャーシの側面に添って遠廻しに接続するように改めてやったら、自己発振は大体止まりました。中間周波がアンテナのリード線を通じ、アンテナ・コイルへフィードバックしていたものと思えます。

それでもまだバリコンの羽根をキッチリ一杯に入れたところでは自己発振をします。この受信機の AVC 回路は中間周波管 6D6 と変換管 6WC5 に共通になっていたので、それを第 27 図のように、6WC5 に対し別にフィルターを付けてやったら、完全に自己発振を止めることができました。

ところで先に述べたシャーシをキャビネットに入れてある場合発振を起すと咆



第 27 図 A.V.C のフィルターは完全にするとよい

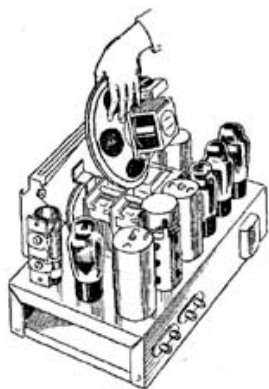
音が出るのは、スピーカーの振動が真空管に伝わり機械的に自己変調を起させていたらしいのです。

さて結論は、このようなスーパーでは、ハイ・インピーダンスのアンテナコイルを使うとしたら、アンテナ・ターミナルまでのリード線の持っていきかたに注意をしなければならないこと、即ち中間周波増幅回路にアンテナ・リードを近づけないことです。そしてAVCのフィルターは簡略にせず、やはり高周波部分、つまり変換管グリッド帰路にはフィルターを入れることです。そうしないと往々にしてこのような自己発振に悩まされることがあるようです。

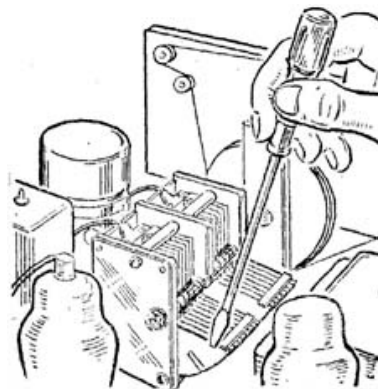
## 2.4 スーパーとハウリング

タマディン・コイルの永井社長が、スーパーでこんな特有な故障がある、といって次のことを語ってくれました。

「スーパー受信機で放送に同調させると、ビーンという大して強くはないが耳障りなハウリングを起す受信機がよくあります。そのシャシーをキャビネットから出してしまえば、もうハウリングは起きません。その昔並四時代に、ステーターのゆるんだガタガタバリコンで同じような現象をよく経験しましたが、ちょうどあれと同じです。このハウリングはスーパーではよく出合う現象で、近頃のバリコンは昔のものと違い、羽根が個々にゆるんでしまうことはないような機構になっているからといって油断をするとやられます。試しにキャビネットから出したシャシーのバリコンのシャフトに、これもキャビネットから出したスピーカーのフレームを第28図のように当てがって受信してみると、おそらく多少でもハウリングは起きるでしょう。ハウリングが起きにくいなら、そのままで第29図



第28図 スピーカーをバリコンに接触させるとハウリングが起きる



第29図 バリコンの羽根を叩いてもハウリングを起す

のようにバリコンの羽根をネジ廻しの先で引搔いてやれば、きっと起きます。要するにスピーカーから出た音波でバリコンの羽根を振動させることに原因があり、たとえ完全なバリコンでもその羽根には固有振動はありましようから、ハネの機構はしっかりしていても音波で振動することは避けられない筈です。

このハウリングを起し易いものと、起しにくいものとを統計的に調べてみて判ったことは、ハウリングを起し易いものは多少自己発振気味で非常に感度が高く、ハウリングを起しにくいものは調整の狂ったものか、あるいは良好な帯域特性を持った優秀品かに限るようです。ということは中間周波回路の同調特性が極めてシャープである場合、「ハウリングが起き易い」とのことです。

ではどういう理由でハウリングとなるのでしょうか。原因はスピーカーから出る音波でバリコンの羽根を振動さすことにあるのですから次のように解釈してみましょう。

バリコンの振動は当然その容量に微小変化を与えます。たとえば 463kc の 5 球スーパーでは、入力回路の同調はブロードですから、同調が多少変化しても受信感度には大した影響はないでしょう。しかし局部発振の方はバリコンの微小振動は発振周波数に微振動的变化を与えますから、従って中間周波数も 463kc を中心として微小変化するわけです。局部発振の周波数が音声振動によって変化をするということは、一種の周波数変調即ち FM です。従って出てくる中間周波も同じ変調を受けているわけで、要するに 463kc の FM というわけです。

しかし FM は普通の二極管検波では復調できませんから、微振動は音となって出る筈はないのですが、ところが中間周波の帯域特性が非常にシャープであれば、少しでも周波数がずれるとゲインはガタ落ちしますから、丁度 FM 受信機のディスクリミネーターのような働きになり、普通の検波方式で検波できるようになり、結局バリコンの微動が音となってスピーカーから出てくることになります。それがハウリングの原因となる、という次第です。要するに中間周波の帯域特性が極めてシャープであるということが第二の原因でしょう。

タマディン・コイルの社長は、「うちの IFT は相当良好な帯域特性であるのに、やはりハウリングが起るといって時々尻が来る」といっていました。またある受信機メーカーでは、これをバリコンのせいにしてバリコン屋をいじめているようで、知り合いのバリコン・メーカーもこぼしていました。コイル屋さんか、バリコン屋さんか、それとも受信機メーカーのいずれに罪があるのでしょうか？ このハウリングの原因は、つき詰めれば中間周波の発振気味ということにあるので

すから、誰のせいかということは、なかなかむずかしい問題です。

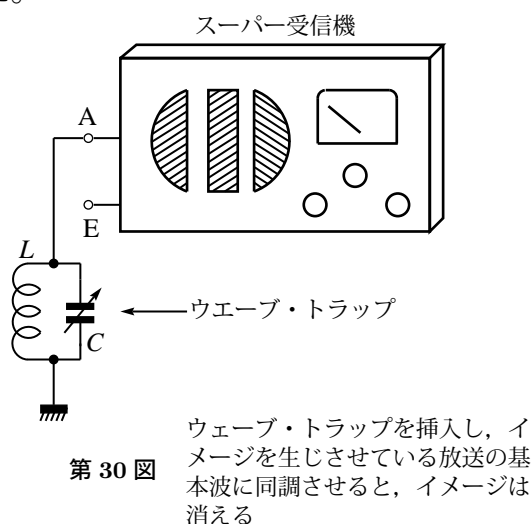
## 2.5 東京第一放送が AFRS のイメージに悩まされるスーパー

東京の北部地域のある学校で、全校式として使っている拡声装置に起った問題です。JOAK 590kc を聴くとき進駐軍放送 AFRS-TOKYO が混入して相当の障碍になっていました。ダイヤルを細かく調節してみると 590kc よりも僅か低い周波数のところに合わせれば、やや分離できるようになりますが、同時に JOAK の音も小さくなるので、ボリュームを上げると再び AFRS も大きくなって障碍になります。ダイヤルを僅か周波数の高い方へ廻すと、両方の音量がほとんど等しいと言ってよいくらいに混信するのです。

もち論この拡声装置の受信部はスーパーです。中間周波は大体 463kc 前後に相当な幅を持った、どちらかといえば 1 段目と 2 段目を互に狂わせてブロードな帯域を持つように調整してありました。これを調整し直し完全に 463kc に同調させると、混信はほとんど消えますが、各スピーカーの音は高音部が甚だしく減り、明瞭度が非常に悪くなってしまいます。スピーカー配線が不適當なためか、あ

るいは増幅器の周波数特性が良くないらしいのです。JOAK だけが完全に受信できればよいというので、試みに第 30 図のように、いわゆるアース・アンテナ式にして、アース線の途中にウェーブ・トラップを入れ、それを AFRS 770kc に同調させてやると混信は非常に小さくなります。しかしアース・アンテナ式受信法では教室用のスピーカーを働かすとき非常に音が歪むので、この方法は採用できませんでした。それで、おっつけ仕事ですが中間周波の中心周波数を 455kc に近く調整し直し、やはり大分ブロードに同調するよう各段を少しずらしてやって障碍を除くことができました。

混信を起した AFRS-TOKYO の周波数は 770kc ですから、分離のよいスーパーでは混信しそうには思えませんが、これは AFRS の第二高調波イメージの混信



ウェーブ・トラップを挿入し、イメージを生じさせている放送の基本波に同調させると、イメージは消える

だったのです。即ち AFRS のイメージの周波数は

$$2 \times (770 - 463) = 614$$

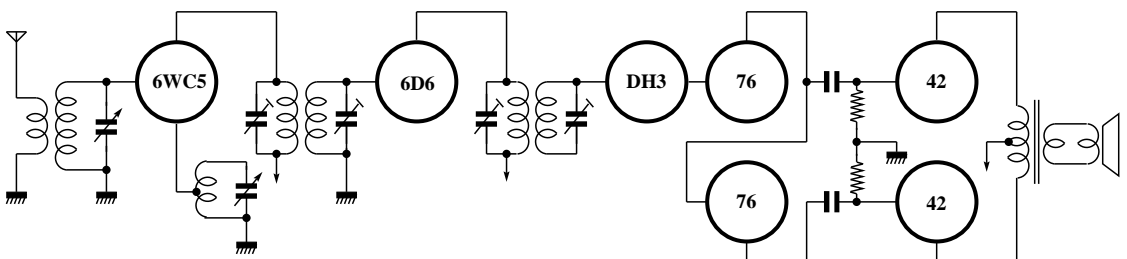
614kc で、JOAK 590kc に対して 24kc 離れた点に出るわけで、またそのレベルも低いはずですから混信は考えられませんが、中間周波が広帯域になるよう狂わせてあり、また放送所はかなり近い地区あったため相当の障害になったわけでしょう。他のストレート受信機で確かめてみたところ、AFRS の放送が他の放送よりも特に強勢に受かるので、上記のイメージ障害も大きかったものと思います。

## 2・6 地元局受信にモーター・ボーティングを起す電蓄

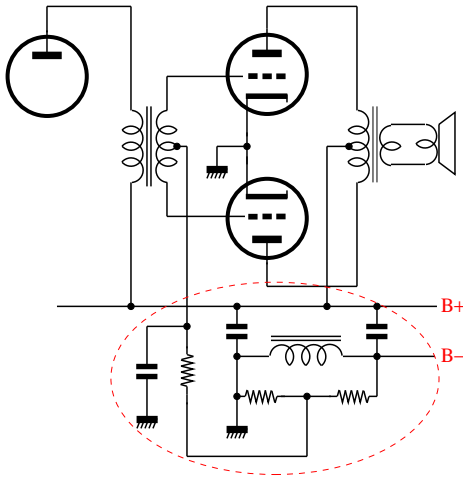
高低別々に音質調節ができるようになっている音質音量ともに相当な、たいそう豪華な電蓄でしたが、レコード演奏は誠に調子がよいのにもかかわらず、地元の強力放送を受けるときボリュームをあげてゆくと、ある程度からモーター・ボーティングを起して、スピーカーがどうにかなってしまわないかと気づかわれるような症状を起すものに出会ったことがあります。受信部は普通の方式のスーパーで、出力は 807 の抵抗結合プッシュプルでした。電圧電流状態は大体正常で、部品の異状もみられず、そして回路にも誤りはないのに、モーター・ボーティングを止めるあらゆる手段を講じてみましたがあまり効果はなく、全く手を焼いてしまった経験があります。

ところがその後たびたびこういうものに出会い、また人からもこの現象が相当あることを聞きました。その対策としては全く姑息の手段で、幾分現象を緩和させる程度でお茶を濁したしだいでした。これとよく似た話は前編に載せてありますが、今回はあれとは別な対策について述べてみましょう。

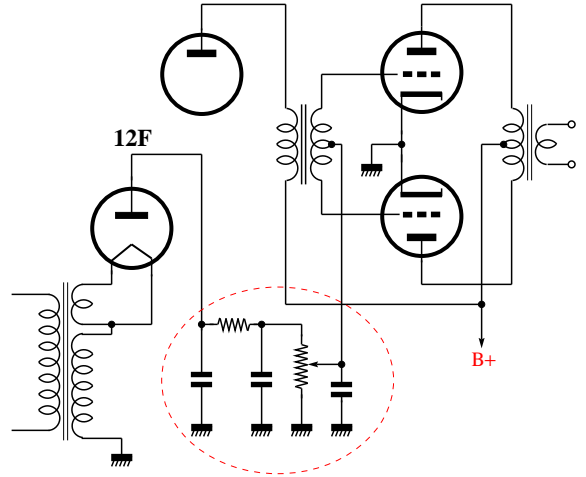
この現象の特長として、強力シグナルを受信するときだけ強いモーター・ボーティングを生じるので、遠距離受信には差支えなく、また地元局でも殆んどアンテナ無しに近い状態にして受信すればよいのです。もち論同調を少しズラせばこ



第 31 図 モーター・ボーティングを起し易いスーパー



第 32 図 直流抵抗も時定数も大きい半固定バイアス

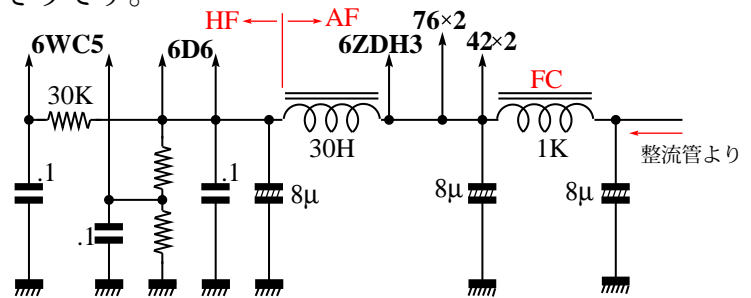


第 33 図 変動率の大きい固定バイアス

の現象も止まります。ボリュームを絞ってくれば、ある点以下では正常に動作するという事は、一般のモーター・ボータイングと共通しています。

受信機を統計的にみると、この現象を起すものは、第二検波の増幅部と出力管の間に1段以上の電圧増幅部のあるもの、例えば第31図の概要図で示したような低周波増幅3段以上のものに限るようです。特に抵抗結合に多く、トランス結合では第32図のような半固定とか、第33図のような固定バイアスで、いずれもバイアス回路の直流抵抗の高いものにみられます。そしてスピーカーのフィールド・コイルをチョークとしているものに特に激しいようです。しかし周波数変換方式や高周波増幅の有無、中間周波増幅の段数およびAVCの様式などスーパーとしての回路には関係はなさそうです。

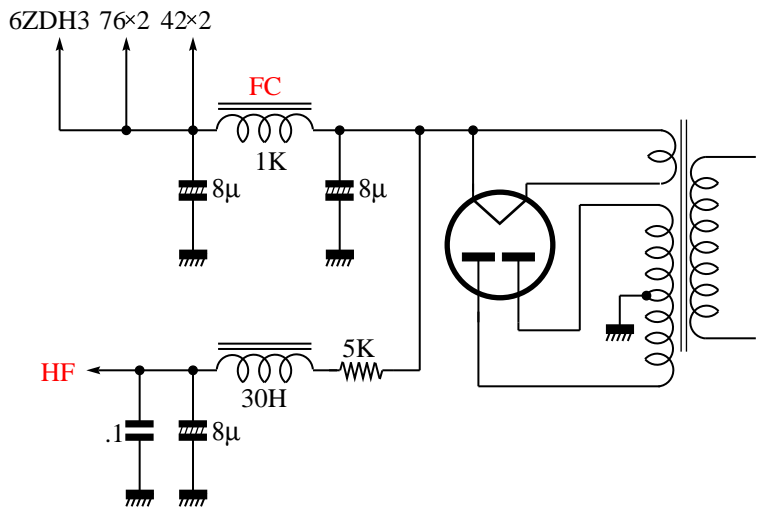
これで考えると、原因は低周波回路の方式の如何によるようですが、同じ低周波回路方式でもスーパーでなしに普通の高周波増幅のものでは、この現象はみられませんから、スーパーに関連して



第 34 図 B 回路を隔離する

いることは否めません。スーパーでも第二検波までの受信部分を低周波とは別の電源で切り離してあるものでは、この障害は生じないのです。従って原因はB電源回路の結合にあることが突き止められました。

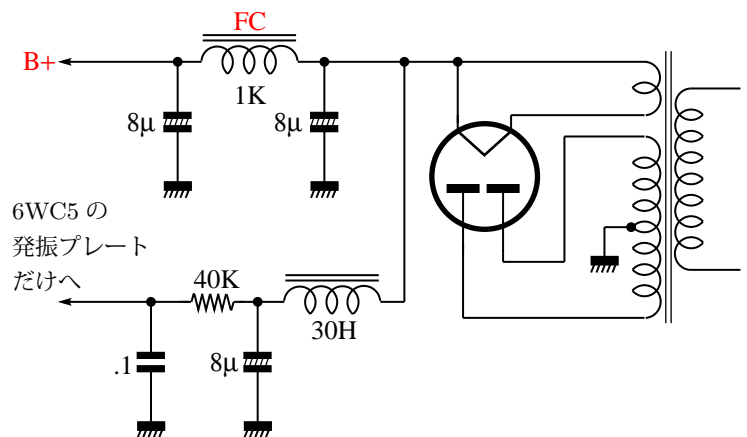
そこで第 34 図のように、B 回路の低周波部の間にフィルターを入れてみました。確かにボリュームは上げられますが、まだ完全ではありません。第 35 図のようにしてみると一層よくなりますが、やはりボリューム最大点ではまだモーター・ボートイングは起きます。スーパーが高周波増幅と異なる点は局部発振があることで



第 35 図 スーパー回路の B 供給はフィールドを通さないとい

います。最後の切札として、その局部発振のプレート電圧供給を、第 36 図のように他の段のものと別個に独立させてやった結果、よほどの大音量にしない限り安定し、やっと目的を達しました。ただし低周波のゲインのあまり高いものはそれでも不十分でした。

以上を総合してこの現象を解釈してみると次の通りです。強力シグナルは出力管に対し許容入力の数倍におよぶ大きな過振幅となって与えられます。出力管のグリッド側に高抵抗があった場合、大きなグリッド電流によって出力管のグリッドは非常に高い負電位となり、それは同じグリッド回路に



第 36 図 6W5 の発振プレートの B 回路だけを別にする

あるコンデンサーに充電される結果、それが放電されてしまうまでの間は、出力管はプレート電流をカット・オフされ、動作は全く停止してしまいます。それに伴い B 回路の電圧は甚だしく動揺するでしょう。その動揺電圧は局部発振部のプレート電圧をも変化させるわけですから、局部発振の強さは動揺的变化をし、変換部で中間周波出力をも深く変調することになります。これは局部発振出力に

対する AM を主因として考えたのですが、あるいは発振プレート電圧が変動するため、発振周波数が変動して FM となることも幾らか伴うかも知れません。いずれにしても動揺的変調を受けた中間周波出力が第二検波で低周波として取り出され、第二のショックとなって出力管に与えられ、同じことが次々とある一定の周期をもってくり返され、これが即ちモーター・ボートイングとなるのでしょう。これを生じるための条件として

1. 検波出力が、出力管に対しそのプレート電流を完全にカット・オフできるだけの過振幅入力となるような非常に高い低周波のゲインが必要なこと、つまりゲイン過大のものは特に甚だしいというわけです。
2. カット・オフがある時間継続されるような時定数回路が出力管のグリッド側に存在すること。それは抵抗結合か、または高い直流内部抵抗と時定数回路を持つところのいわゆる半固定ないし固定バイアスとした場合などです。
3. B 電源のインピーダンス、特に直流的な電圧変動率即ち直流抵抗が高いこと。それはスピーカーのフィールド・コイルなどをチョークとした場合特に著しいわけですが、パワートランスの変動率だけでも相当に問題になります。

この現象はスーパー特有なものではありますが、根本は低周波増幅、特に電力増幅回路の設計上の問題にある点で面白いと思います。RF 屋さんだと AF を相当に勉強しなければならないということを痛感されます。

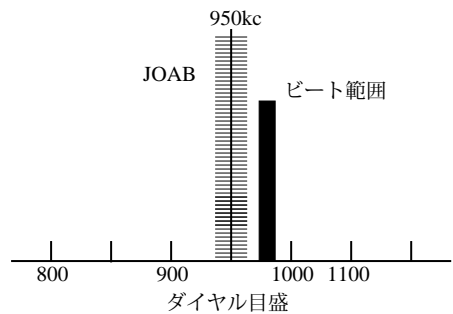
## 2・7 950kc を聴くときビートのでる中間周波トランスは不良か

さる名高いコイル屋さんのところへ行ったら、“面白い問題があるよ、君はこれをどう思う？” といって、一通の手紙を見せられました。その手紙は東京から程遠からぬ田舎のアマチュアラジオ屋さんとおぼしき人からそのコイル屋さんへ宛たもので、下のような文意でした。

貴社製の IFT を使って 5 球スーパーを組立てたところ、殆ど調整は不要なくらいすぐ鳴りだし、分離も感度も不足はないが、一つ気に喰わぬことがある。それは当地で東京の第二放送、JOAB 950kc を聴こうとダイヤルを廻すとき、同調点附近で、まるで再生式のようにビートが聴こえる。完全な同調点ではビートは消えるから、聴くことの邪魔にはならないが、不愉快である。ところが IFT を別の某社製品に替えてみると上記のような現象はなくなる。貴社製品では他の型のものを使っても、これもビートが聴こえる。要するに貴社製品は全部ダメなのである。との抗議状でした。



なるほど、そういわれてみると私自身にも覚えはあります。950kcの放送を高周波増幅なしのスーパーで受信するとき、**第37図**のように同調点の近くで多かれ少かれビートが聴こえます。これは受信機内で、中間周波の第二高調波と到来シグナルとが作り出すところのビートです。IFTが正確に463kcに調整されている場合は、同調点の950kcよりも



**第37図** 同調点の隣りでビートが出る

12kcだけ多い周波数の962kcのところをゼロビートとして、その前後にビートが聴こえる筈です。その理由は、962kcのところでは、局部発振周波数は、

$$962 + 463 = 1425\text{kc}$$

で、ここに950kcの到来シグナルが混入すると

$$1425 - 950 = 475\text{kc}$$

の中間周波を生じ、その第二高調波

$$475 \times 2 = 950\text{kc}$$

と到来シグナル950kcとで、ゼロビートとなる、という次第です。ただしこれは962kcの同調点で950kcが分離しきれないために生ずるのですから、高周波増幅を付けて選択性をよくすれば、問題はなくなるでしょう。

高周波増幅を付けない普通のスーパーでは、もしIFTの調整が狂っていて、463kcよりも多い周波数であった場合、ビート発生点は950kcの同調点にもっと近づき、そしてビートの強さも大きくなります。そしてIFTの帯域幅の中にビート発生点が入っているような場合には、強いビートのため聴取障害を受けるでしょう。

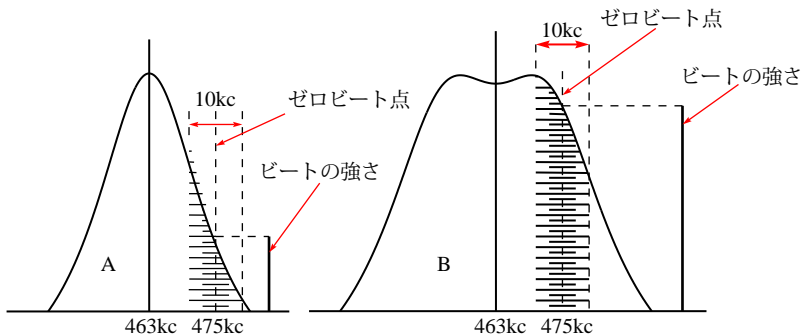
以上で950kcの同調点附近で聴こえるビートの正体はお判りと思いますが、ここで手紙の問題を考えてみましょう。某社のIFTでは全くビートが出ないということはなく、たとえかすかでも聴える筈です。すると、その手紙の主は、はたしてIFTを完全に再調整したのでしょうか。もし組み上ったままの状態、そのIFTは463kcよりも多い周波数に合ってしまい、某社のIFTの方は偶然にも463kcか或はそれ以下の周波数に合ってしまったものとする、確かに手紙の通りのことになるでしょう。そうすると罪はIFTにあるのではなく、再調整をやらないことにあるのです。だいたいIFTというものは、組み上り後再調整をすべきものではないのでしょうか。

しかしテストオシレーターを持たないでスーパーを組み立てる人も相当あるこ

とでしょうから、組み上がった場合にちょうど 463kc になるような調整済みの IFT を出庫すればよく、スターコイルの富田氏に聞いてみたら、一般にはメーカーはそうしているとのことです。しかしそうしても使う人の配線の具合で漂游容量は多少違ってしまうから、それを幾らにみて調整済みとするかが問題です。ここに問題の IFT と某社の IFT との使用結果に違いがあるのかも知れません。つまり漂游容量の決めかたに僅かの差があるとしたら、それが手紙にあるような現われかたをするものと思います。そうとしても、もち論ビートの出る方の IFT の品質が悪いというのではなく、この点では他の某社の製品の方が要領がよいといえます。

次に、もしオシレーターを使って再調整をしたものと考えてみましょう。普通級のアシレーターのダイヤルの目盛りの上で 463kc を正確に読みとることは、ことによるとできないかも知れません。多くの場合、受信機を組上げた際の偶然に決定された IFT の周波数に倣<sup>なら</sup>って調整されがちで、それに 10kc 位の誤差ができて判らないことが間々あります。実験者やそのアシレーターを疑っては甚だ申しわけないのですが、ビート発生を IFT のせいにするところをみると、上記のことは大体想像できます。テストアシレーターの IF バンドは、バンド・スプレッドとし、そして安定性の高いものに改造し、なるべく正確に 463kc、455kc を読みとるようにされることを提唱したいと思います。

ひるがえってこのビートを IFT 自身の問題として考えてみると、第 38 図のように帯域幅の相違によって、ビートの強さに差のあることは考えられます。音質を良くしようとして広帯域幅にすると、とかくビートやイメージの問題に突き当たります。この点から問題の IFT と某社の IFT とを比較することはできますが、そうかといってその優劣はにわかに決められはしないでしょう。まして未調整のまま、ビートが聴こえるか聴こえないとかで直ちに IFT の良否を論ずることは意味



第 38 図 IFT の帯域特性によってはビートの強さに違いがある

はないと思います。

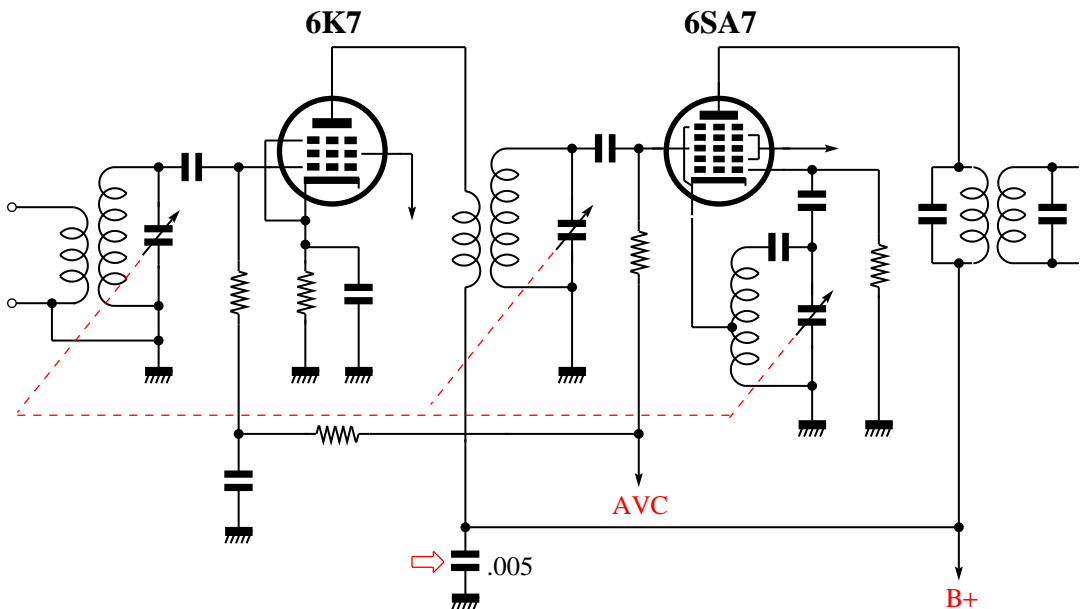
それよりも  $463 \times 2 = 926\text{kc}$  前後  $20\text{kc}$  ぐらゐの間の放送を遠慮して貰えば、こうしたいごころは大分減るでしょう。

## 2・8 放送が受からなくてもマジック・アイが閉じるスーパー

高周波1段付の3バンドのスーパーで、マジック・アイが付いています。第二のバンドだけが思わしくないのです。ダイヤルの中央ぐらゐの8メガ附近からそれ以上高い範囲が受信不能で、ここではサーツとまるで電波が到来しているときのようなノイズが聴こえ、マジック・アイは近距離局に同調させたときのように完全に閉じてしまいます。8メガサイクル以下及び他のバンドは割合に調子よく受信できるのです。

受信不能の状態でも AVC 回路をアースとショートさせてみるとマジック・アイは開きますから、6E5 は完全なことはもち論です。そのときはザーというノイズは一層大きくなります。さては中間周波回路の発振だと思い、中間周波増幅管 6SK7 のカソードのパスコンを取外して電流饋還<sup>きかん</sup>にしてみたり、その SG<sup>1)</sup>電極をアースとショートさせて感度を下げてやってみたりしても、相変わらず受信不能ですがノイズは少なくなり、マジック・アイは少し開いてきます。

また初段のバリコンをショートしてみるか、高周波増幅の 6SK7 を抜いてみる



第 39 図 B 回路に並列にマイカ・コンデンサーを入れる

1) スクリーングリッド

と、マジック・アイはパツと開きます。そうするとこれは中間周波回路での発振ではなく、高周波増幅回路の自己発振だということが判ります。

そこで第39図に矢印で示したようにB回路にマイカ・コンデンサーを入れてみると、8メガ附近は受かるようになりましたが、やはり少し高いところからは相変わらず受信不能です。バンド切換スイッチに來ているリード線を少々位置を変更してやったところ、更に僅かばかり高いところまで受かるようにはなりましたが、それ以上の周波数ではやはりダメです。6SK7を中間周波増幅のそれと交換させてみましたが同じです。万策尽きて高周波用の6SK7を取換えてみようと思いましたが替球が手元に無かったので6K7に変更してやったところ、今度は完全に受信できるようになりました。

結局これは6SK7のソケットの附近の配線のもっていきぐあいによって、そのグリッド回路とプレート回路が容量結合をしていたものようでした。BCバンドではそれくらいの容量では発振するに到らず、また第三のバンドのところでは周波数が余り高いため高周波回路のロスでゲインが上らず、それで自己発振は起こさなかったものと思います。そして丁度上記の受信不能になった周波数附近で単一調整が完全にとれてきて、その間だけが特に発振を起こしたものと思います。

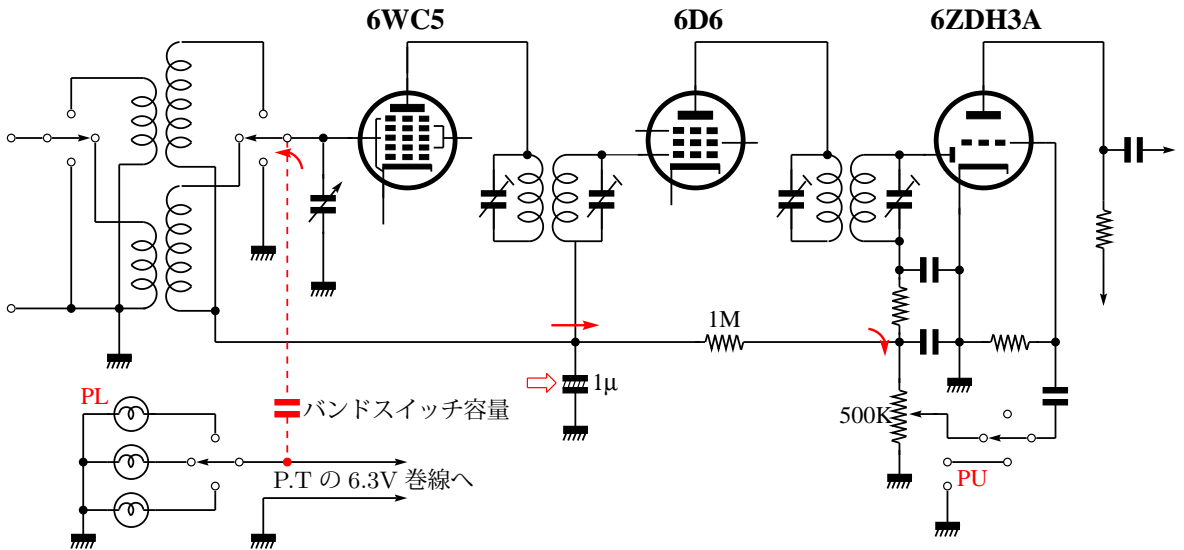
高周波回路で自己発振が起きれば、それと局部発振とで中間周波を作りだし、丁度近距離局を受信したかのような状態になってキャリアノイズが出たり、マジック・アイが閉じたりしたのです。この受信機はアマチュアの製品で、作った当初から8メガ以上ではこんな現象を起していたのだという事を後になって聞きました。

なおSWバンドで放送が受からなくとも、ある周波数帯だけマジック・アイが閉じる現象は、以上とは違った原因によって生じることもあるようです。

## 2・9 AVC回路からハムを拾う

2バンド・スーパーの42プッシュプル8球電蓄ですが、ラジオに切替えるとハムが少しばかりふえるのです。といっても大して強いハムではなく、ごく静かに耳を澄ますと気になるという程度ですが、神経質な持主はそれを完全に除いてくれというのでした。

このハムは、放送を受ける受けないには関係せずに出ていて、またBCバンドでもSWバンドでもハムの出かたは同じです。ピック・アップに切替えれば全く出ません。いろいろ調べてみたところAVC回路をアースすれば、ハムはピタリと



第 40 図 AVC 回路からハムを誘導する

なくなることが判りました。しかし AVC 回路には故障や誤接続は見当らず、その動作も完全です。真空管を他のものと差替えてみましたが同じことです。また 6WC5 と 6D6 を抜いてしまっても、出ているハムには変化はありません。とすればハムは AVC 回路の途中のどこからか這入りこんでくるのでしょうか。

第二検波から AVC 回路をたどってみると、その末はバンド切替スイッチに入っています。この切替方式は第 40 図のように、BC、SW 及び PU の 3 点切替で、また同じスイッチで用途表示のダイヤル・ランプも切替えるようになっています。従ってそのスイッチには 6.3V の AC 回路も来ているわけです。それゆえハム誘導の原因になりそうなところはそのダイヤル・ランプの切替部分です。そこで電源から来ているランプへの線をスイッチからはずしてみると、案の定ハムは止りました。明らかに 6.3V 回路からの誘導だということになります。

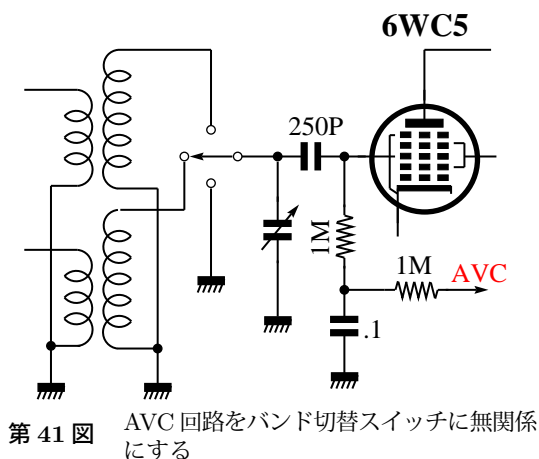
ところでそうすると多分スイッチがゴミかペーストなどで絶縁不良を起しているのだなと思ひ、AVC の線の来ているところと 6.3V の線の来ている端との間の絶縁を調べてみましたが、それは  $50\text{M}\Omega$  以上もあります。それゆえハムの原因はその間のリーケージではないということになります。

スイッチのところをよく見たら、同調コイルとダイヤル・ランプの各切替は、ちょうど対向する位置になっていました。そうするとハム誘導はその間の微小容量を通じて矢印に示したように流れる電流が原因だと考える他はありません。しかし

AVC回路は $0.1\mu\text{F}$ という大きな容量でアースにバイパスされています。従ってスイッチの微小容量を通じてかかるAC電圧は大部分このコンデンサーでバイパスされますから、ハムは出そうには思えません。それにもかかわらず少々出るので、これは低周波のゲインがかなり高いためなのでしょう。この受信機の低周波回路は6ZDH3Aの次に76を置き、もう一つの76で位相反転をして42PPとしてある全抵抗結合で、近距離放送を受けるときは御多聞に洩れずモーターボートティングを起します。きっとSWバンドの感度をよくするため低周波でゲインを上げているのでしょう。

このハムを防ぐ手段として、まずAVCの $0.1\mu\text{F}$ 容量を $1\mu\text{F}$ に替えてみたところハムはほとんど消えましたが、それではAVCの時定数が大きくなって面白くありません。それでスイッチの使いかたをダイヤル・ランプの切替えとアンテナ・コイルの切替とが対向位置になるように改めてやって、やっとハムの除去に成功したわけでした。

しかしトラッキング調整のやり直しの面倒をいとわずに、バンド切替の方式を第41図のようにすれば、切替はAVC回路には無関係になりますから、この方が無難だと思えます。ハムも気にしてみれば、こんな些細なところからも出ているものです。



## 2・10 スーパーでは聴けない放送局がある

スーパーで受信しようとするビートが出てしまって、明朗に聴取できないという放送局が現存しています。

この問題の放送局の周波数は930kcです。それは大阪の第二放送JOBGだったのですが、幸に周波数変更後はよくなりました。その代り現在では熊本の第一放送JOGKは、以前の大阪第二と同じような現象が生じているはずで

たとえば、6WC5-6D6-6ZDH3-42のような、中間周波数を463kcとした標準型5球スーパーで、930kcの放送を受信すると、相当強いビートが出て聴取の妨害になるというのです。もち論受信機はメーカー製品でも自作品でも同じで、製品によってビートの音色こそ違い、いずれも上記の現象のあることを確認されてい

ます。おそらく現在のスーパーでは避けられないものと思われます。

それでは何が原因で、930kcを受信する際にビートが発生するのでしょうか？  
それは、中間周波 463kc の第二高調波

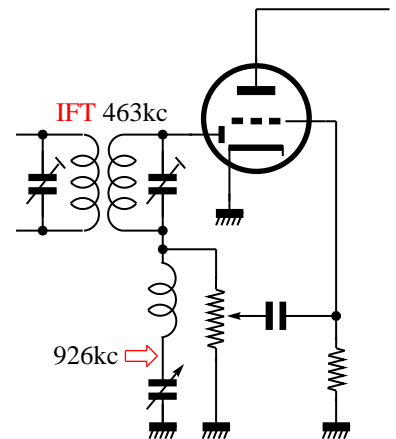
$$463 \times 2 = 926kc$$

と、到来シグナル 930kc とで生じる

$$930 - 926 = 4kc$$

のビートです。要するに、中間周波の第二高調波がその原因であるわけです。

ところでこの中間周波の第二高調波はどこで生じるのでしょうか。これは2個所の非直線性部分、即ち第一検波(変換管)と第二検波の部分です。第二検波での高調波発生は第42図のように、二極検波の負荷と並列に936kcに同調するLC直列共振フィルタを挿入することによって高調波勢力を弱めることができ、事実このフィルタによってビートの強さを幾分弱めることはできますが、決して完全には消えません。このビートは周波数変換のための第一検波という非直線性要素がある以上、スーパーでは避けることのできない問題です。従って930kcで放送している局がある限り、463kc



第42図 第二検波の負荷と並列に第二高調波に対するフィルタを挿入する

の中間周波数は不都合であることは決定的です。また中間周波数を455kcあるいは他のどんな周波数に決めようと、その第二高調波が放送バンド中に入ると、必ずどこかの局と一個所はビートを作るということは、スーパーを理解できる者なら容易に判るでしょう。

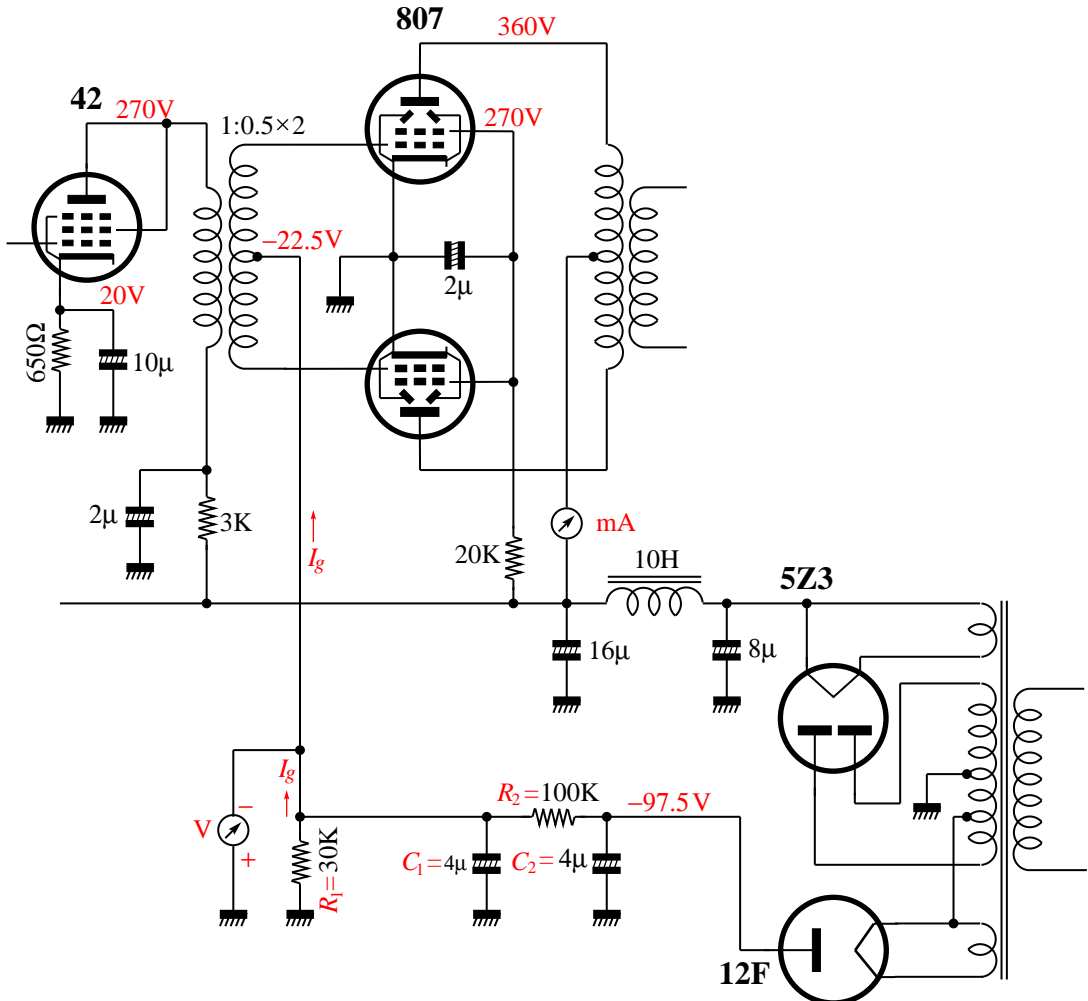
結論としては463kcの中間周波数に対しては930kc、455kcの中間周波数に対しては910kcの放送を中止してもらった方が手っとり早いということになります。

## 第3部 増幅器関係

### 3・1 出力とは反対にプレート電流が減る電力増幅

AB級またはB級増幅では、出力に比例して出力管のプレート電流は増加する……，と理論は教えています。ところがどうでしょう。実際にはそれが反対になっている増幅器を私はしばしば見えています。

その一例は第43図のような807PP AB<sub>2</sub>級の場合です。固定バイアスとなっていて、そのドライバーは42の三極管接続です。この出力管のプレート回路に入っている電流計は静止状態では88mAを指していますが、鳴らし始めると音声の一



第43図 固定しない固定バイアス回路



節ごとに指針は50mA ぐらい、あるいはそれ以下のところまで下ります。つまり出力音量に逆比例して動いているのです。

そこで試みに、動作させながら固定バイアスの電圧を測ってみました。静止状態で-22.5Vを示している指針は、音量のピークの際には-100V近くまで上昇することが認められました。要するに、このようなバイアス電圧の上昇に原因して、プレート電流の一時的減少が生ずるのです。

不動であるべきはずの固定バイアスが、どうしてこんなにも変動するのでしょうか。これは入力振幅の増加に伴って生ずる807のグリッド電流のためです。グリッド電流は固定バイアス回路の分割抵抗  $R_1 = 30k\Omega$  中を、矢印で示したような方向に流れるため、そこに  $I_g \times R_1$  という値の電圧を生じ、この電圧が静止状態のバイアス電圧 -22.5V にさらに加わって、その負電圧を一層高めます。そして増加した負電圧は  $C_1$  に充電されますから、それが放電されて正常なバイアス電圧に戻るまでの間は、たとえ入力小さくなってグリッド電流が停止しても、しばらくはバイアスは高くなったままでいてプレート電流もその間は減少しています。こうして音声の強いアクセントの次の瞬間にはプレート電流の甚だしい減少となり、あたかも出力のピークごとにプレート電流が減るかのようにみえるのです。入力のピークの際にグリッド電流を流す状態で動作するものが即ち  $AB_2$  級である以上、このようなバイアス回路であったら、バイアス電圧が変動するのは当然です。これでは固定バイアスとしての意味は全くなくなります。

$AB_2$  級に対して固定バイアスを文字通り固定たらしめるには、 $R_1$  の値を極力小さくしてグリッド電流による電圧降下をできるだけ小さくすると同時に、 $R_1$ 、 $C_1$  との組合せの時定数を小さくするとよいのです。そのためには分割抵抗  $R_1$ 、 $R_2$  の値は  $100\Omega$  台にする必要があります。そうするには、バイアス電源の電流は  $100mA$  以上流す必要がありますから、 $12F$  などでは使いものにならないことはいまでもありません。

なお動作中のグリッド電流の量は、負荷抵抗が高い場合は同じ入力振幅でも多く流れますから、上記の現象は一層著しくなります。従って負荷インピーダンスのマッチングも重要です。

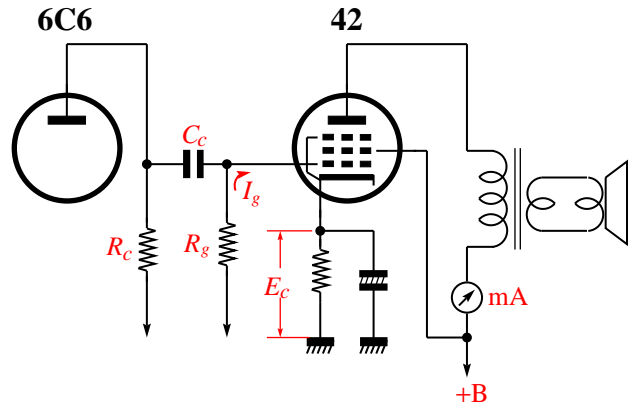
807PP で固定バイアスした増幅器は、各方面で相当使われていますが、私が見たもののうちの80パーセント以上は、上記のように音量と逆比例的にプレート電流の減るような動作をしていました。そして技術者の中には、それが当然だと考えている者もいることには驚きました。そのような固定バイアスでは、自己バ

イアスに較べ出力も音質もはるかに劣るでしょう。「理論と実際とは一致しないものさ」などとすましていないで、不一致の原因がどこにあるかを探究することこそ、真の技術者の態度ではないでしょうか。

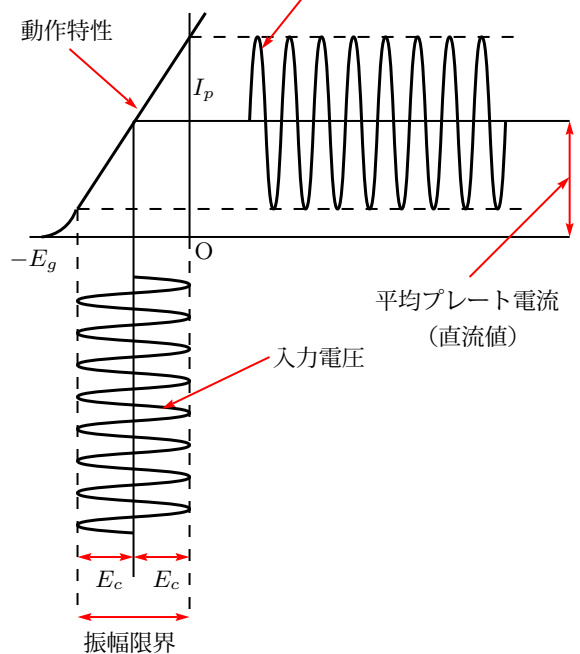
### 3・2 出力を出すとプレート電流が減る 42 シングル

第 44 図のようなシングルの一  
般の受信機ですが、“42 のプレート電流を測ってみていると、大きな音を出すごとに、それが半分ぐらいに減るのは、どこの故障か”と、質問を受けました。“それは普通にみられる現象で、一向差支えないことである”と答えておいたら、“理論上 A<sub>1</sub> 級増幅は、出力の如何にかかわらず、プレート電流の平均値、つまり直流プレート電流は変わらないはずだから、その答はおかしい”と折返して言ってきました。これはしばしば聞かれる問題です。

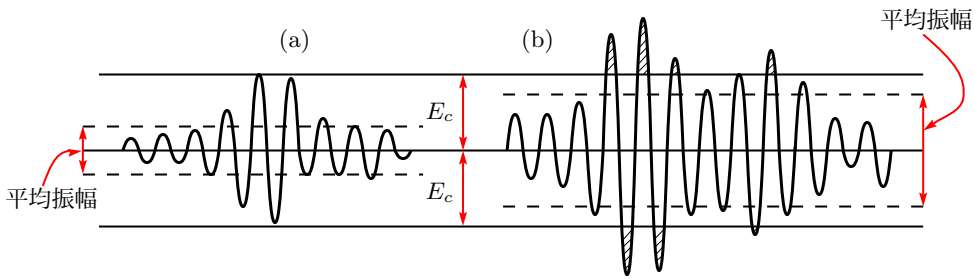
そこで、この理論と実際との喰い違いの問題を、ここで考えてみましょう。A 級増幅の条件として、グリッドに与える入力電圧の限界は、第 45 図のように、そのピークがバイアス電圧値を超えない範囲までです。従ってその場合のプレート電流変化の平均値は、やはり最初の直流値と同じか、五極管のように特性が多少非直線的のものでは、数パーセント増加する程度です。これは実際の場合でも、低周波発振器から定振幅のシグナルを入れて



第 44 図 鳴らしながらプレート電流を測ってみたら  
プレート電流変化



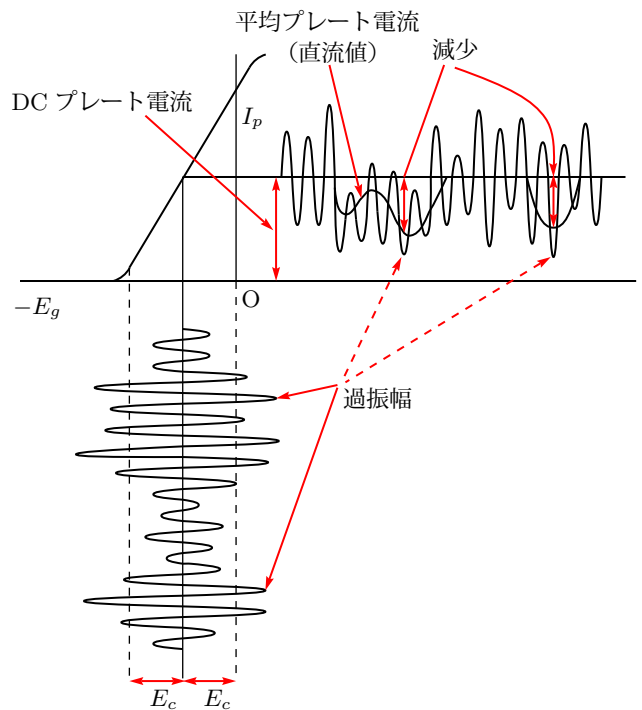
第 45 図 A 級増幅の入力と出力の関係



第 46 図 音声入力振幅

やってみると、必ず理論どおりになり、理論の正しいことが実証されます。

ところが実際に使うときの入力は音声ですから、その振幅は一語ごとに、あるいは一リズムごとに、刻々変化しています。そういう入力で第 46 図の (a) の部分のようにその最大振幅のときでも、バイアスの値  $E_c$  を超えないように制限すると、その平均音量は、まことに小さなものになるのでしょうか。また (b) の部分のように、平均振幅をバイアスの範囲いっぱいになると、音量のピークときには当然過入力となり、グリッド電流を生じさせることになります。現にこうした動作状態で使っているのが普通で、そうでないと、使用出力管なみの音量として感じられないで



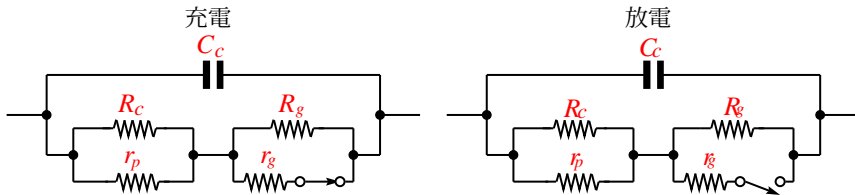
第 47 図 音声信号に対する動作状態

しょう。もち論、その場合ピークの瞬間には出力に歪を生ずるのは当然ですが、普通級受信機では、それはほとんど問題にしていないのです。

さて、上記のような実際の状態では音声のピークごとに相当のグリッド電流が流れるとすると、このグリッド電流はグリッド・リーク中にグリッド側が負になるような電圧を生じさせます。そしてその電圧は、結合コンデンサー  $C_c$  に充電されます。そしてそれが放電されてしまうまでの間は、グリッドに高い負電圧を

バイアスに加算して与えているので、その間プレート電流は減少してしまいます。このようなしだいで、大振幅入力直後にプレート電流の減少がみられるわけなので、この状態は第 47 図に示しておきます。

動作状態のグリッド電流は、プレート側の負荷インピーダンスが高いほど多いので、もしあまりにも動作中にプレート電流の減少が甚だしいときには、インピーダンス・マッチングをやり直して負荷抵抗を適当に下げてやる必要があります。



第 48 図 ブロッキングの充・放電時定数関係 ( $r_g$  はグリッドが正のときの内部抵抗)

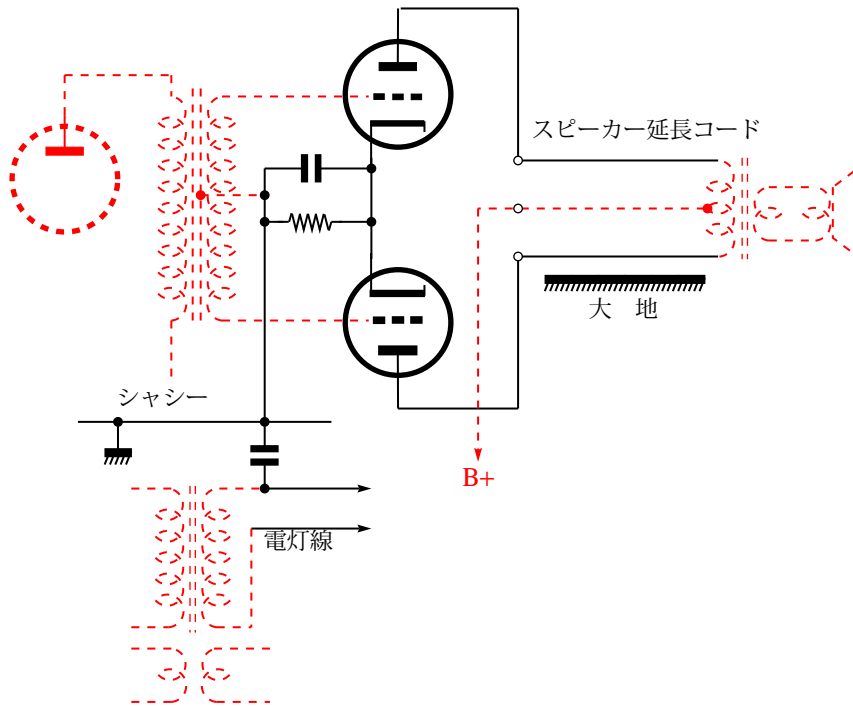
大入力直後のプレート電流の減少している時間は、結合回路の放電の時定数に比例します。つまり第 48 図のように結合コンデンサー  $C_c$  の容量がグリッド・リーク  $R_g$  の値、前段管の内部抵抗、結合抵抗  $R_c$  に関係します。プレート電流が減少した場合それをなるべく速やかに回復させるためには、上記の時定数は小さいほどよいのですが、そうすることは低音部の出かたを悪くしますから、これらの点で一考を要するわけです。

以上の現象が、つまりブロッキング現象といわれるところのものなので、一般の抵抗結合の受信機をガンガン鳴らすときは、避けられない現象です。

### 3・3 近所のラジオに混入するマイク・アンプ

私の家の前の広場にお祭の舞台ができ、賃貸のアンプが持込まれました。スピーカーは二箇所コードを引延ばして取付けられ、アンプの電源は近所の家の電灯線から取ったのです。

やがて舞台上で素人喉自慢が始まりました。するとどうでしょう。マイクに噛りついて叫び唄うその声が、私の家のラジオに酷く悪い声で這入ってくるではありませんか。ラジオのプログラムも何も聴いたものではありません。第二放送にダイヤルを合わせて見ると、なんとそれにも這入ってくるのです。同調をはずした状態ではアンプからの声も消えてしまいます。その声は近所の他の家のラジオにも這入っています。これは要するに、放送電波に混入する、いわゆる混変調現象なのです。仔細に聴いていると、唄い手が大声で唸鳴ったときにだけ這入るのです。アンプのスピーカーから出ている音はそんなに酷くはありませんが混入してくる

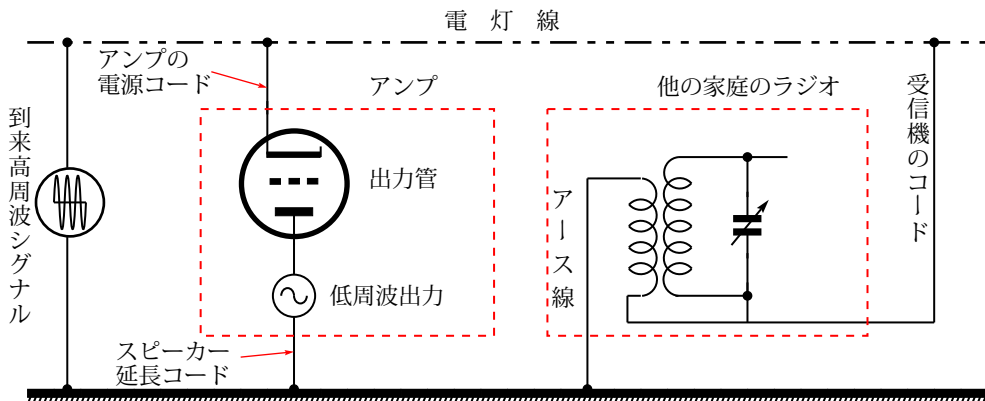


第 49 図 妨害を与える出力回路

音はバリバリという形容詞がよく当てはまります。

祭が終わって取片付けのとき、そのアンプを見せて貰いました。42のプッシュプルで、そのプレート回路でスピーカー・コードを延長するようになっていました。他人のアンプなので実験してみることはできなかったのですが、推定でその原因を解析してみましょう。

第 49 図に、そのアンプの混変調妨害に関係すると思われる回路を実線で示し



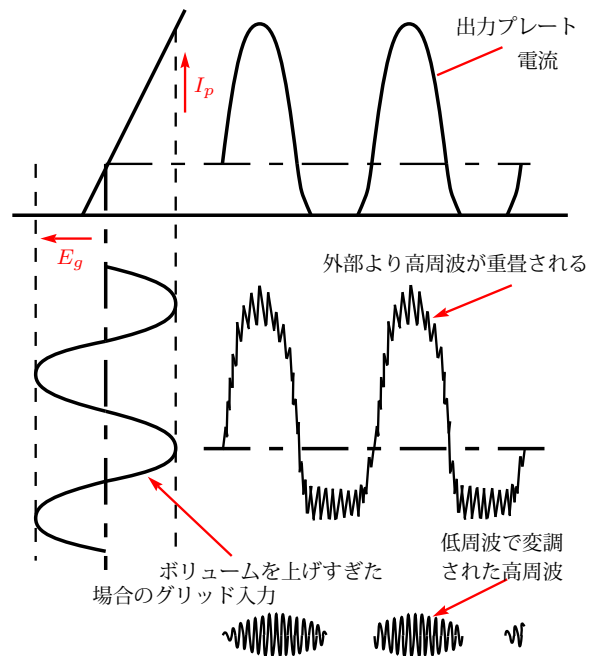
第 50 図 混変調妨害の系統図

てあります。引張り廻したスピーカー・コードは大地との間に相当大きな容量を持ったことは明らかで、そのため出力管のプレート回路は、高周波的には接地されたと同様な効果になりましょう。またアンプのパワー・トランスの一次側で、電灯線はアンプのシャシーと容量的に結合されています。従ってこれを第50図のような等価回路的に書き直してみると諒解し易くなります。

第50図では、電灯線とアース間に動作をしている出力管が挿入されている状態になっています。これは到来電波によって電灯線に誘起される高周波シグナルに並列に入っていることになります。同時にこの電灯線を使ってアンテナ無しで聴取している近所のラジオ受信機のアンテナ・アース端子に対しても、側路としてアンプの出力管のプレート回路が挿入されているわけです。もしこの出力管が非直線的な動作をしているならば、これで到来電波によって電灯線に誘起されている高周波電流をアンプの出力が変調し、放送シグナルにアンプの出力を混入させることが容易にできるわけです。

アンプの出力管は、A級増幅であるなら理論上は直線的な動作をするわけですから、混変調の原因にはなりません。AB級やB級増幅が問題です。しかしたとえA級に設計されているものでも、それが歪を生ずる程度の出力で働かされる場合には、プレート電流の変化は歪波形となることは明らかですから、AB級やB級と大差ありません。この動作状態で、そのプレート回路から高周波シグナルが混入すれば、第51図のように高周波は出力低周波で変調されてしまうわけです。

アンプが大音量のときにだけラジオに混入し、そして甚だ明瞭度が悪いということは、以上で説明がつくわけです。アンプがラジオに混変調妨害を与える実例は、しばしば報告されています。それが上記のような原因によるものだとしたらスピーカー・コードの延長はプレート回路でせずに、増幅器の方へ出力トランスを組込み、一端をシャシーに接地した



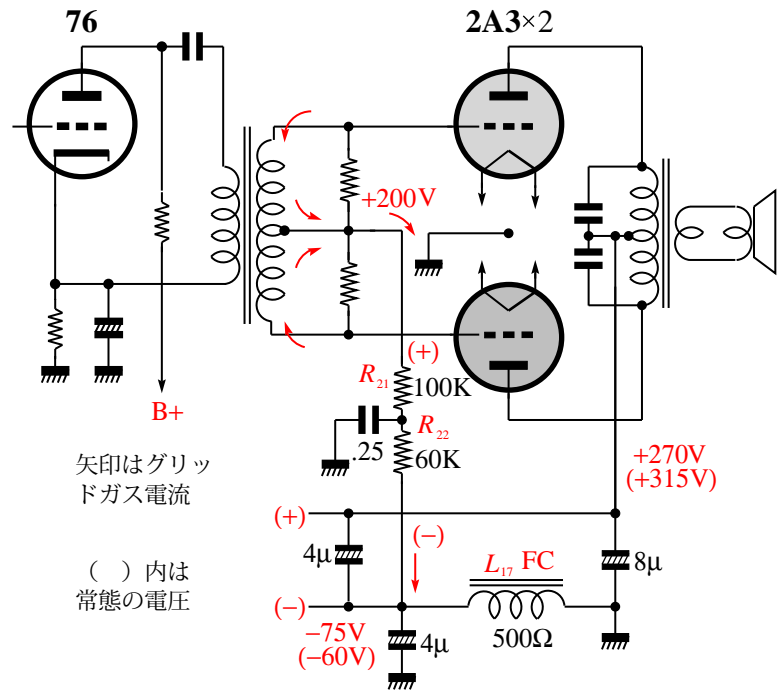
第51図 非直線動作は変調を生じる

二次側で延長するように改めるとよいと思います。

### 3・4 2A3を続いてダメにした話

毎度引合いに出して恐縮ですが、第52図(次ページ)のようなビクターRE-48型電蓄が、どうも音が変わったというので調べることになりました。

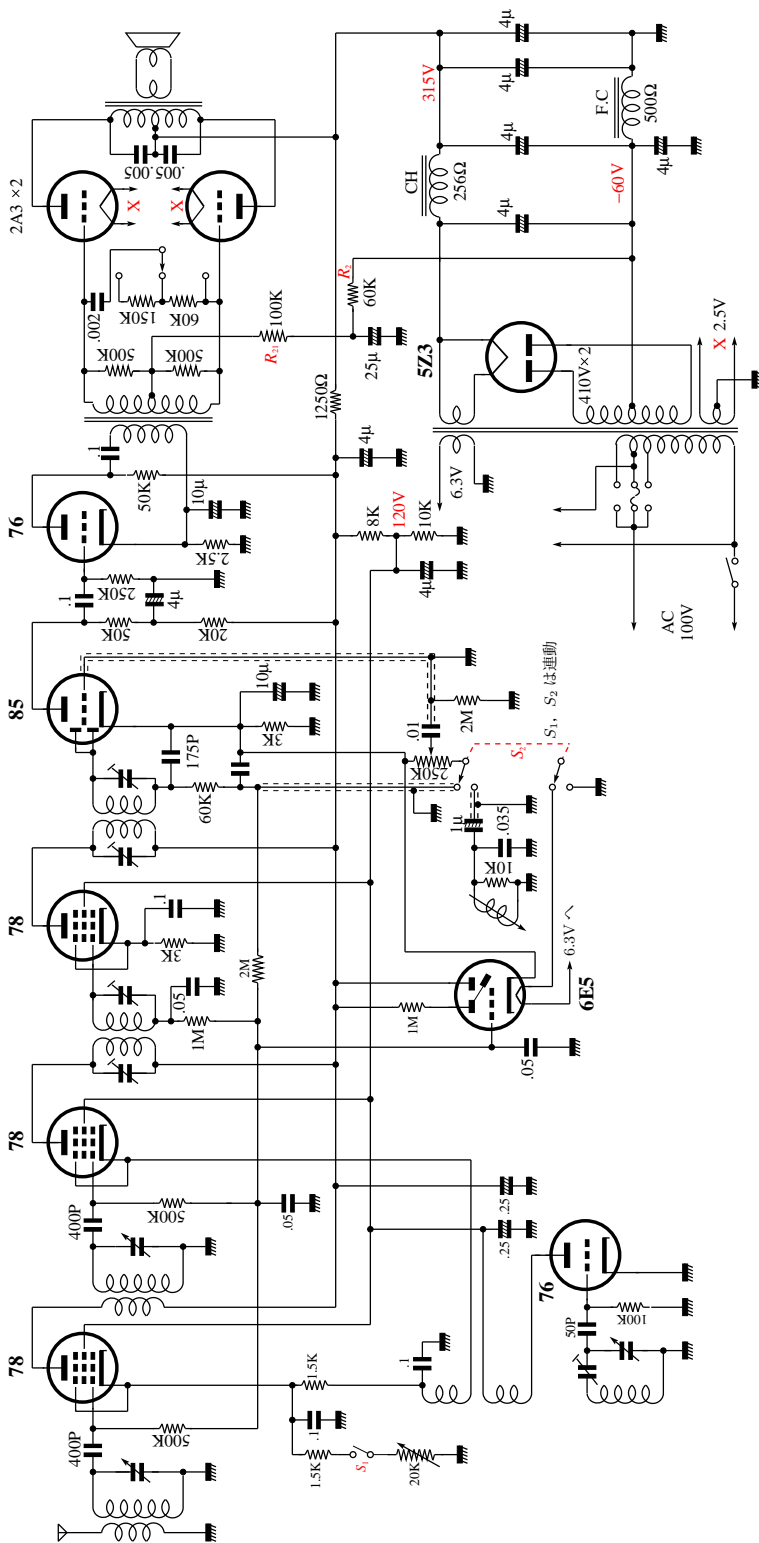
スピーカーから出る音は、この電蓄にしては幾分小さく、そしてにごりがありました。2A3を見ると、2本とも電極の中がかすかに紫色に光っていました。故障は低周波回路にあると見当を付け、B電圧を測って見たら、第53図のように315Vあるべき筈のところは270Vでフィールド・コイルの(-)側で-60Vある筈のものが-75Vになっていました。このことはB電流が増えていることを意味しています。



第53図 ガス電流の結果グリッドはプラスになる

そこで2A3のグリッドに正味どの位のバイアス電圧が掛かっているだろうかと、アースと2A3のグリッド間をテスターで測って見たら、メーターの針は逆に振れ、なんと+200Vを超える電圧が掛かっていたではありませんか。本来ここにはフィールドでの電圧降下の-60V、いやこの場合なら-75Vであるべきですが、それが反対に(+)になっていたのです。この症状は前編の、「グリッドにプラスの高圧が出る出力管」として述べたものと同じですから、これは2A3の不良と断定しました。要するに2A3の真空度低下で、グリッド回路にガス電流が流れているわけで、案の定2本とも新しい真空管に取替えたら、完全に動作するようになりました。

ところが数日ならずして、また元のような状態になってしまったといつてきま



第 52 図 日本ビクター RE-48 型電蓄配線図



した。調べてみると確かに前と同じ症状で、2A3が2本ともダメになっているのです。用意してきた新しい2A3に取かえてみると、もちろん完全な音で鳴りだしました。

近頃の真空管は弱いといわれていますが、それにしても悪くなるのが余り早すぎるので、念のためもう一度確かめてみようとして、新しい1本を抜いて代りに不良になった球を差してみました。しかしダメになったものはやはりダメで、すぐ音が変わりました。そこでその不良の方の球を抜いて、新しい方の球1本だけで鳴らしてみると、なんとやはり音が変わり、テスターで測ってみるとグリッドに(+)の電圧が出ています。錯覚で良い方の球を抜いてしまったのかなと思い、再び差してみて確かめると、やはり新しい方がダメになっているのです。そこで残りの正真正銘新しい2A3を差してみると、やはり音は変です。こいつはシマッタ！と気が付いて前から差してある球を抜いたのですが、もう手おくれで、とうとう新旧合わせ6本の2A3をオシャカにしてしまったわけです。

誠に腑甲斐ないしで、ダメになった球を前に、しばらく考えてみるよりほかありません。フィールド・コイルの一端には-75V出ているのだから、それが2A3のグリッドに達するまでに+200Vに変わってしまうとすると、 $R_{21}$ 、 $R_{22}$ で275Vの電圧が生じている計算になるわけです。そうするとオームの法則で約1.2mAという電流がグリッドから流れ出ている勘定です。要するに $R_{21}$ 、 $R_{22}$ という高抵抗がグリッド回路に入っているから、1.2mAのグリッド逆電流で高い電圧が生ずるのだから、この高抵抗が無ければよいのじゃないかと気が付き、その二つの抵抗を針金でショートさせてみました。なんとありがたいことに良い声が出てくれました。プレート電圧、バイアス電圧も最初の通りの値に戻り、ダメと思った6本の2A3は全部完全に働いてくれるようになりました。

故障についての話はここまでですが、さて、よく考えてみなければならない問題がここに残ります。おおかたの真空管には、いわゆるグリッド電流とは反対のグリッド電流即ちガス電流が僅かながら存在しましょう。これは抵抗結合ではグリッド・リーク中を、RE-48型では $R_{21}$ 、 $R_{22}$ 中を流れ、そこに電圧降下を生じ、それはバイアス電圧を打消すように作用し、従ってプレート電流は増加しましょう。自己バイアス式ではそのため自動的にバイアス抵抗中に電圧降下がふえ、それはグリッド回路の電圧とは反対の関係であるため、ガス電流のためのバイアスの低下を抑制するので、大きな問題はありません。

ところが一般の半固定バイアスや、このRE-48型のような式の半固定バイアス

では名の通り半固定で、自己バイアスのようにガス電流によるバイアスの低下を抑える作用も少く、従ってプレート電流は加速度的にふえ、その結果さらにガス電流もますますふえていき、イタチゴッコ式にみるみるうちに前記のような症状におちついてしまうのでしょうか。その上 RE-48 型では悪いことには  $R_{21}$ ,  $R_{22}$  が両真空管に共通であるため、片方の真空管だけに上記の現象が起きても、相手の真空管をも無理心中させてしまうおそれがあるのです。私が早くこのことに気が付いていたなら、2A3 を何本もノバしてしまわずに済んだでしょう。

真空管のカタログをよく読んでごらんください。2A3 ではグリッドに挿入する抵抗は、自己バイアスでは  $500\text{k}\Omega$  以下、固定バイアスでは  $50\text{k}\Omega$  以下となっていますが、それは上記の危険から救うために違いありません。ところで半固定バイアスについては、グリッド挿入抵抗の最大限は示されていませんが、想像はできましょう。RE-48 型では 2 本の 2A3 に対し  $100 + 60 = 160\text{k}\Omega$  ですから、1 本当りについてみるとその 2 倍の  $320\text{k}\Omega$  となるわけです。この抵抗が無かったならば、いやせめて  $R_{21}$  だけでも無かったならば、2A3 を続いてノバすという、こうしたなげきはあるまいものと痛感させられました。

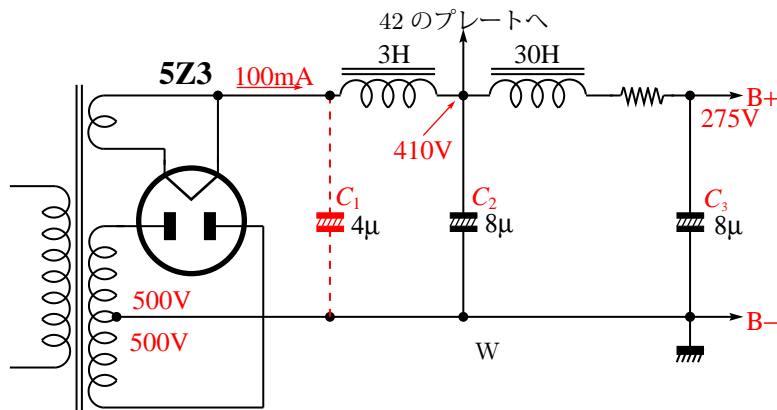
現にダメになったと思った球も、 $R_{21}$ ,  $R_{22}$  をショートさせた状態で再び使うことができたのですから、考えさせられるではありませんか。

受信機メーカーとしたら、昔の球なら大丈夫だったじゃないかと、このごろの真空管のせいになりたいところでしょう。真空管メーカーとしたら、真空管のカタログをよく読んでくれたらというでしょう。これはビクターさんと球屋さんのお互の間に検討していただきたい問題でして、私自身で結論を出すことは差控えておきましょう。なぜなら球を続いてオシャカにした腹いせをやっているようにしかみえないでしょうから。

### 3・5 チョーク・インプットの悩み

あるサーカス団のために作ってやったアンプが、全国巡業を了<sup>お</sup>えて 1 年ぶりで帰ってきました。興行を打つ先きざきで故障続出で悩まされ通しだったから、徹底的に直してくれというのです。故障はいずれもフィルター・コンデンサーのパンクと出力管 42 の不良だったそうです。

増幅器は 42 の AB<sub>2</sub> 級 PP です。重量と容積の関係から電解コンデンサーを使ったので、その安全のためにもと思い、B 電源は第 54 図のようなチョーク・インプット方式を採用して製作した筈でしたが、それがいつの間にか一般のような



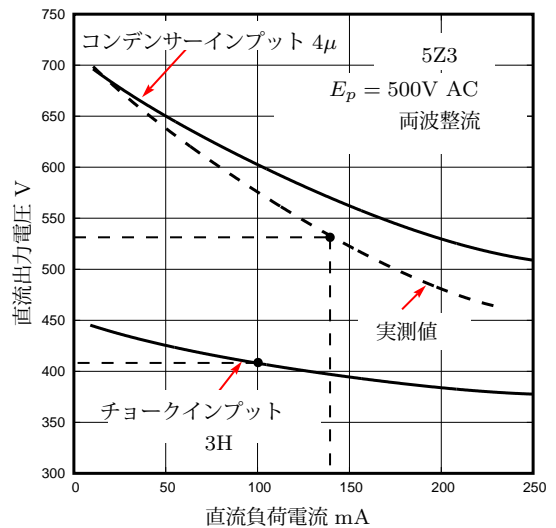
第 54 図  $C_1$  を入れると入れないとで出力電圧は 100V 以上も違う

コンデンサー・インプット・フィルターになって帰ってきたのです。つまり整流管の出力側に新たに点線で示した  $C_1$  が付け加えられたのです。

チョーク・インプットの状態でちょうど適当な電圧が得られるように、パワー・トランスの巻線は大分高くしてありますから、それをコンデンサー・インプットに改めたので、出力 B 電圧は非常に上昇してしまい、その結果は耐圧の低い電解コンデンサーをパンクさせ、また出力管に過電圧を与えて早く消耗させてしまうようなことになったのでしよう。

電源部以外の回路はほとんど原形のままなので、整流管出力側のコンデンサー  $C_1$  を取り去ってやっただけで、最初作ったときの通りの正しい動作状態に戻りました。

ところが甚だ困った事態が生じました。興行者は“音が大分減ってしまった”と大そう不服なのです。42 の AB<sub>2</sub> 級の出力はこれが限度だと説明してやっても承知しません。“巡業していた間はもっと大きな音だった。もっとも君に作って貰った最初は、やはりこの程度の音だったが、巡業先であるラジオ屋さんに入手入れをして貰ってから、音はズンと大きく出るようになった。ラジオ屋は言っていた。つまり部分品が 1 個不足していたのを発見したからそれを付けたしたのだと。



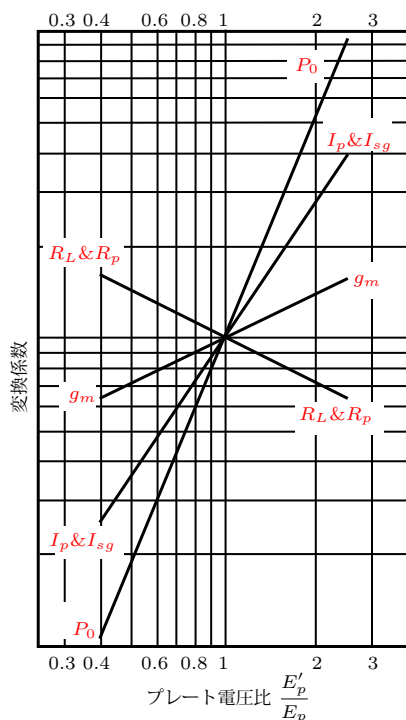
第 55 図 コンデンサー・インプットとチョーク・インプットの比較

折角大きな音に直してくれたものを、また小さくすることはなかりと、どうしても承知しません。あげくのはてに“君の腕はダメだ”と結論を下され、こちらもとうとうシャッポを脱いでしまいました。

第55図はチョーク・インプットとコンデンサー・インプットとの出力電圧の比較です。チョーク・インプットは出力電圧は低いけれど、変動率は極めてよく、AB<sub>2</sub>級増幅のように出力とともにプレート電流の変動するものには好適であることは御存知の通りです。それと同時に始動時のB電圧の上昇も抑えられ、ピークによるフィルター・コンデンサーの危険が大分少くなります。42のAB<sub>2</sub>級動作の最高規格のプレート電圧375Vに対するB供給電圧約400Vを得るためには、5Z3で全B電流100mAのとき交流B電圧はチョーク・インプットの場合は約500Vを要します。その電圧でインプット側に4 $\mu$ Fのコンデンサーを入れると、直流出力は600Vに昇るわけです。実測では直流出力電圧は約30%増しの500Vで、全B電流は40%増しの約140mAになりました。42のプレート電圧も規格最高値を超えること約30%の上昇です。プレート電圧の上昇だけなら高内部抵抗の42のことですから、プレート電流には大差ないわけですが、SG電圧も共に30%増すので、どちらの電流も実際には40%も増加するのです。

この関係は第56図のRCAカタログに出ている出力管定数変換係数表でよく判ります。この場合プレート電圧およびSG電圧が1.3倍になったので、 $I_p$ 、 $I_g$ の斜線からプレート電圧比の1.3の目盛を求めると1.5が得られるでしょう。実際は1.4なので少々誤差になっていますが、これで大体の見当は合っています。同様な方法で出力の増加割合を求めてみると、それはちょうど2倍になることが判りましょう。ただし同様に負荷抵抗は0.86倍に下げてやらなければ2倍の出力にはならないことも判りますが、負荷抵抗は元通りとしても出力は大体2倍見当にはなるはずで

結局チョーク・インプットをコンデンサー・インプットにしたことによって、出力は2倍にふえることになってしまったのです。それでは確かに大きい音が出るのはもっともです。ただし42は直



第56図 出力管定数変換係数表  
三極管及び五極管

ぐ参ってしまうでしょう。

無理が通れば道理引っ込むとやら、とんだところで信用を落してしまいました。それにしても知ってか知らずか、うまく男をあげた何処かのラジオ屋さんが怨めしいです。

### 3・6 音の酷く歪む学校用増幅器

2個の校庭用ダイナミック・スピーカーと、各教室向け3線式出力回路を持った学校用の増幅器を新設したところ、各教室のスピーカーを動作させるとき、音声のピークごとに酷い歪音を発し、とても聴くに耐えない状態なのです。それがピック・アップでレコードを演奏してみると異状なく聴こえ、マイクロフォンを働かしてみても差支えはありません。つまりラジオを受信するときだけに不都合が生じるのです。校庭用のスピーカーを鳴らすときにも歪音は出ますが、各教室のときほど酷くはありません。

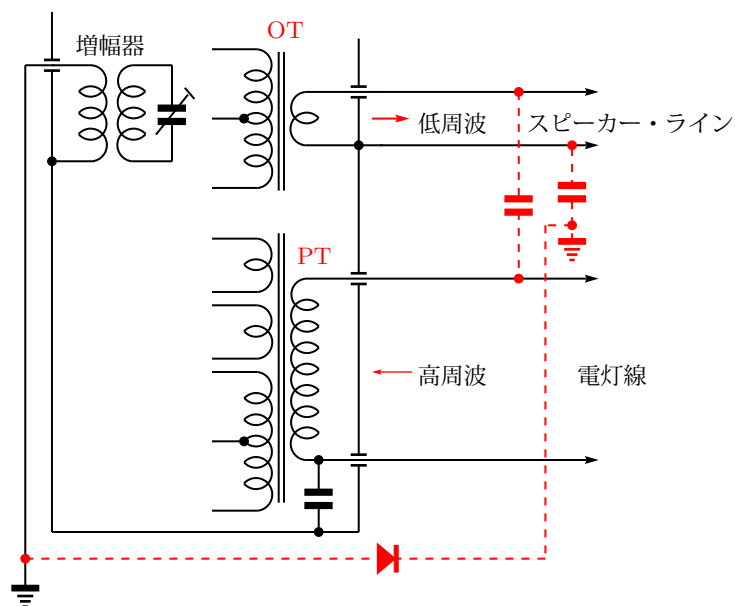
この受信機は807のプッシュプルで、ラジオ受信回路は標準型のスーパーになっています。取付けかたをみると、正規のアンテナを用いず、アンテナ・ターミナルへアースを挿して、いわゆるアース・アンテナと称する方法にしてありました。

そこで試みにアース線を外し、テスターのリードをアンテナ端子に接続して聴いてみると、歪音はなくなる代わりに音量が減るので、更にボリュームをあげてやると歪音は再び出るようになります。先のアース・アンテナ式のときでも、ボリュームをずっと絞れば歪音は減るのでした。今度はテスト・リードをアンテナにして、アースを正規のターミナルに接続してみると、歪音は完全になくなりましたが、ボリュームを最大にしても感度がやや不足気味です。要するにアース・アンテナ式だから悪いので、アンテナ及びアースを正規に接続してやればよいのだと決め、新たに標準アンテナ<sup>1)</sup>に近い逆L型を校舎の屋根上に張ってみました。ところが案に相違して、ボリュームをあげてみると歪音は依然として出るのです。ただしその程度はだいぶ軽くなっています。それが面白いことには、避雷スイッチを切替えてみると歪音は取れるのです。つまり避雷スイッチを取付けた軒下のところから受信機までの引込線だけがアンテナとして働いている状態ならよいわけなのです。この場合感度が不足してもいけないと思い、引込口の庭先に高さが軒先と同じで長さ4メートルばかりの申しわけのアンテナを立てて使うことにしたら、出力を桁外れに大きくしない限り歪音は出ず、完全な受信ができるように

1) 高さ8m 水平部の長さ12mの逆Lアンテナ。使用する導線は直径0.8mm×7 錫メッキ線。約1mの地下に0.3m×0.3mの銅板をアースとして使用する。アンテナ実効抵抗  $R_a = 50\Omega$ ，アンテナリアクタンス  $X_a = -1000\Omega$ ，実効高 = 7m

なりました。

では歪音はなぜ出たのでしょうか。増幅器から出ている線を考えてみると、第57図のようにシャシーからアンテナ・コイルを通過してアースへ行く線が一つ、片線がシャシーに接続された状態の出力回路の3本の線が1組、それから電源の100Vのコードが1本と、合計3組です。出力回路の3線は普通の場合の2線と同じに考え、またダイナミック用の出力回路は無視して考えても差支えはないでしょう。



第57図 低周波出力は高周波に乗ってアンテナ回路へ

さて出力回路からは相当大きな低周波出力が送り出されています。この回路のインピーダンスを例えば  $500\Omega$  あるとし、ピーク出力を  $20$  ワットとしてみると、このラインの低周波電圧は

$$E = \sqrt{P \cdot R} = \sqrt{20 \times 500} = 100V$$

になります。

アース・アンテナ式とは電灯線アンテナにほかなりませんから、電灯線を通ってきた入力高周波シグナルを受信するわけで、この高周波電圧はどんなに大きくともミリボルト台でしょう。

出力回路のラインと、電灯ラインは校舎内で交叉または並行し、互に容量を持っていることは当然で、従って出力ラインの出力低周波電圧は、その容量を通じて電灯ラインへ誘導することは、これまたあたりまえでしょう。たとえその誘導量はわずかでも、高周波のミリボルト台に較べれば、低周波の百ボルト台は相当問題になる値です。従って高周波と一緒になった低周波出力は、パワー・トランスとシャシー間の容量を通じ、アンテナ・コイルを通過してアースへの経路をたどるわけです。そしてその経路のどこかに多少なりとも非直線の部分があるか、あるいは非直線性のものが挿入されていたなら、高周波と低周波の間に相互変調が起

るわけです。ところが低周波出力は高周波の変調成分と全く同じものなのでから上記は再変調ということになり、

出力ライン → アンテナ回路 → 受信回路（検波・低周波増幅・出力）

→ 出力ライン →

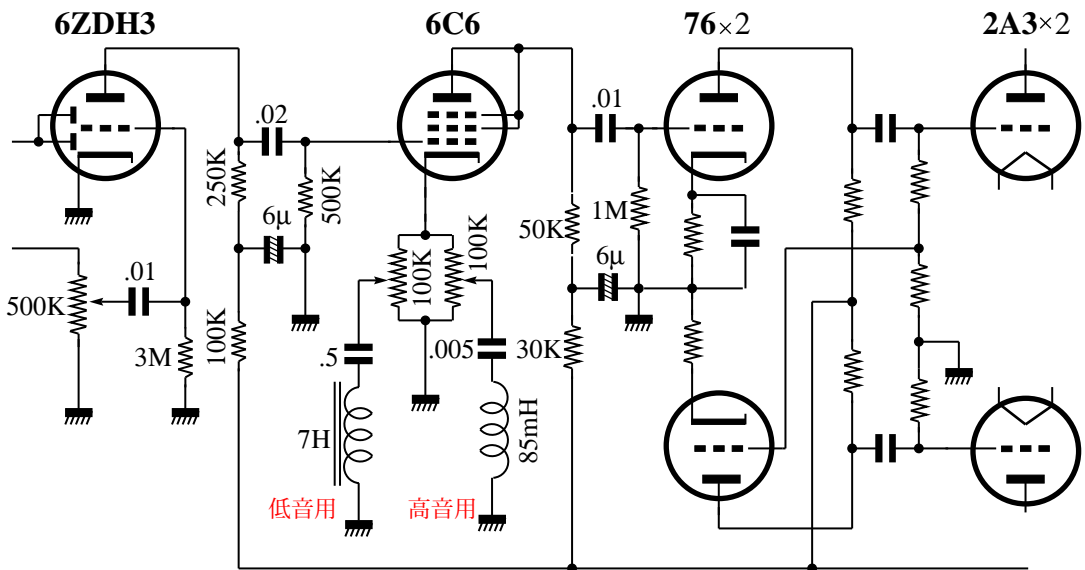
という循環経路をとり、ここに発振を生ずる可能性ができ、低周波のピーク入力  
のときにそれが起って酷い歪音となったのだと考えたらいかがでしょう。ただし  
出力ラインからアンテナまでの経路にある筈の非直線成分は、はたしてどこにあ  
るか私には明らかではありません。

以上のように解釈すれば、屋根上のアンテナでは出力ラインとの結合が多少な  
りともあるため、歪音除去に余り効果はなく、むしろ校庭の隅の小さいアンテナ  
の方が無難だった理由もわかるでしょう。

このような例は、実際にあちこちで耳にします。アンテナの状態が音質に関係  
すると云うと、まさかと思うでしょうが、あり得べき話です。

### 3・7 LC 音質補償回路の悩み

“バイターンを使って電蓄を拵らえてみたが、ハムが酷くてどうも思わしく  
ないと第58図のような回路のシャシーを持ちこまれ、実験する機会を得ました。  
それは近ごろ流行しているLC音質補償器を使って、高音低音を別々に増強で



第58図 歪を起しやすいLC音質補償回路の応用

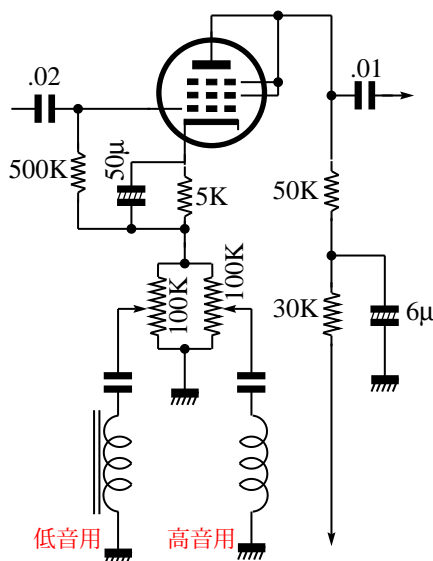
きるようにしたのですが、何とかトーンというマークが付けられていて、バイタトーンとは似て非なるものです。バイタトーンという、LC音質補償回路の代名詞だと思っている人がいるので混同するのは無理ありませんが、バイタトーンとは三田無線製の1個の組立てられた音質補償装置の商品に付けられた名前です。それが好評だとなると、たちまちまがい物が続出するのは、さすが日本のラジオ界だと感心させられました。

ところで、この電蓄で第一に問題になった点は、ハムがもの凄いことです。低音増強最大の点では、ハムは实用限度を遙かに超えている状態です。そこで試みに低音用のLをショートしてみると、ハムはどうやら我慢ができる程度に減ります。またLをはずしてシャシーの外に置き、クリップ・コードで接続してみると、ハムは最少ですが、それをシャシーに近づけるに従いハムはふえてきて、パワー・トランスの近くへ持ってきた場合、最大になります。明らかにパワー・トランスの漏洩磁束をこのLが拾ってハムを出すのだということが判りました。シャシー上でパワー・トランスから最も離れた位置に取付けてハムを最小にしましたが、しかし完全にハム誘導を防げたわけではありません。Lをもっと完全な防磁ケースにでも入れ替えない限り、とてもハムから脱れきることはできないようです。

また試みにCを換えて共振点を70~120サイクルの間で移動させてみましたが、ハムのレベルは2dbとは減らず、ほとんど徒労でした。

第二の問題は音の歪ということです。高音増強を最大にすると、スピーカーのコーン紙が裂けてでもいるかのように、ビリビリと音を出すのです。低音部でも歪は出ているらしいのですが、聴いただけでは何ともいえません。

この歪は6C6の段で発生するものらしく、鳴らしておいて6C6のプレート電流を測りながらボリュームを上げていくと、最初0.2mAぐらいだったのが段々増加していき、0.5mAを超すと酷い歪になります。これは高音、低音とも増強が最大のときの状態です。A級増幅としたら、この場合プレート電流は変らない筈のところ、それが増加するので、明らかにプレート検波に近い動作状態であることがうかがえます。6C6のカソードに入っている抵抗



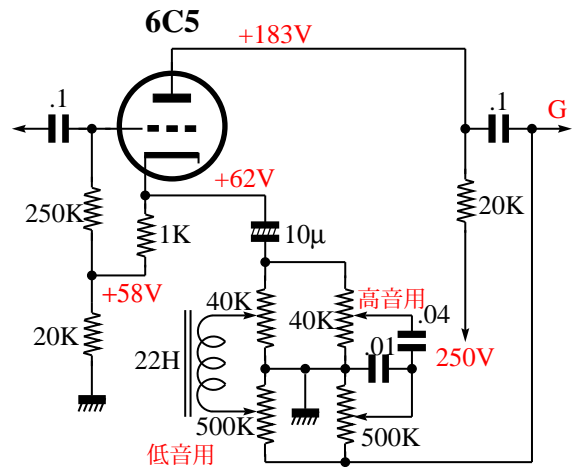
第59図 バイアスのかけかたで歪は減る



は  $50k\Omega$  に相当するわけですから、これでは増幅用としてはだいぶ高いようです。そこでこの部分を第 59 図のように接続換えをしてやりました。これで増強度合は前と大差なく、歪の方は多少よくなったようです。とはいうものの、高忠実度とはだいぶ縁遠い音です。

以上の実験によって感じたことは、カソード回路での  $LC$  音質補償はよほど注意しないと歪を発生するのではないかということです。補償効果を 10db 以上にするためには、調節器の抵抗値は、どうしても  $100k\Omega$  に近い値のものが必要となり、その結果としてどうしてもバイアス電圧は高めになりますから、入力を大きくすると非直線歪を生ずることになるものと思います。また入力電圧の小さい前段に入れるようにすると歪は軽減されるでしょうが、ハム発生という問題にぶつかってしまいます。

結論としてこの種の  $LC$  補償回路は、<sup>きわ</sup>際だった増強効果のあることは否めませんが、与えられたデータを鵜呑みにして、そのままどんな増幅回路にも適用するということは考えものだということになりましょう。音質というものは、周波数特性の補償だけで改善されるものではないのですから、第 60 図の回路のように高すぎるバイアスをかけたものを大きな入力レベルのところを用いた場合の波形歪や、また共振回路を用いた回路でとかく発生し易い位相



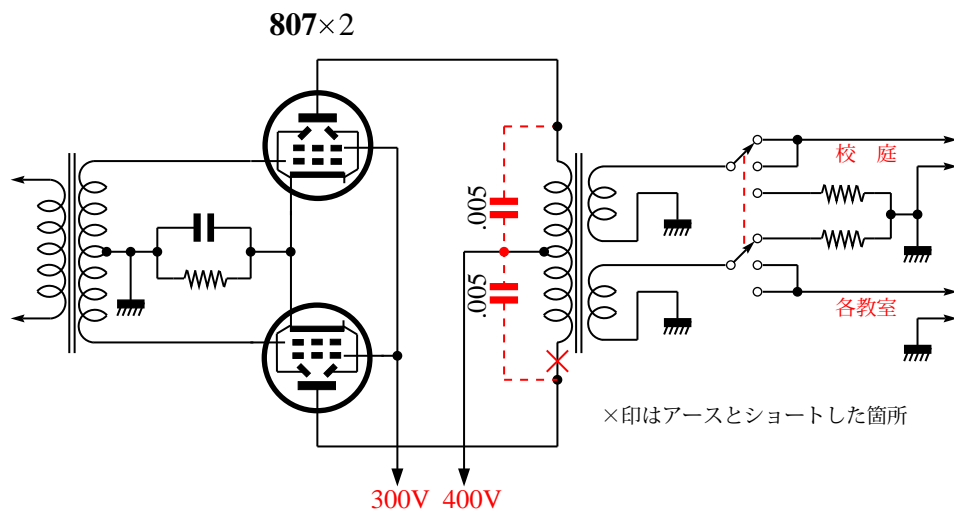
第 60 図 ソーダーソンのデュアル・トーン・コントロール

歪とそれに伴う過渡特性の問題などについて、再検討を要するものと思います。

なお参考までにアメリカの広告で見たバイタトーンのようなものを第 60 図にお目にかけてみましょう。形も回路もよく似てはいますが 2 連のバリャブル・レジスタンスを使って増強も減衰もできるようになっているところがバイタトーンとは違っています。遙か昔 1938 年のソーダーソンの製品です。

### 3・8 出力トランスの絶縁破壊

学校用の拡声機で、出力トランスを何度取替えてみても一次側と鉄心との絶縁が破れてショートしてしまうが、もっと完全なトランスはないものかと相談を



第 61 図 連動スイッチで負荷を切替えることは危険

受けました。この拡声機は 807 のプッシュプルで、それをサービスしているラジオ屋さんの考えでは、絶縁破壊はたぶん出力トランス自身が悪いのだろうというのでした。

そこでとりあえずその増幅機の修理に立会ってみることにしました。出力管のプレート供給電圧は 400V、SG は 300V あり、相当な出力が出せるようになっています。それを動作させてみたところ少しも異状はありません。出力回路は第 61 図のように校庭用と教室用のスピーカーを 1 個のスイッチで交互に切替えて使うようになっています。使わない方のスピーカー回路に対しては等価抵抗が切替えて入るようになっています。従ってインピーダンス・マッチングの点は旨くうまいっているわけです。

ところが拡声機を扱う学校の先生は、鳴らしながらこの切替スイッチを操作してみせるのです。そうすると切替える瞬間に出力トランスの端子のところではピシッと音がしてスパークする場合があります。このことは出力管のプレート回路に相当な高圧ピークが発生しているに違いありません。プレート側に電圧が出るということは、動作中に出力管が無負荷になる場合に起きるもので、要するにスイッチの切替に際しオープンになる瞬間があるわけです。807 はプレートが頭にあるから助かっているものの、もし 42 や 6L6 などのようなシングル・エンド<sup>1)</sup>のものでは、この電圧のため真空管のステムでスパークして真空管をダメにするおそれもあり、あるいはソケットの足でスパークしてソケットを燃してしま

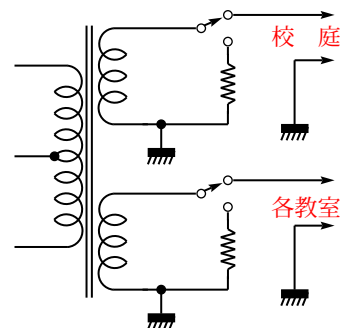
1) single-ended tube——内部の電極と接続されているピンがすべて真空管の下部にある真空管

うこともあるでしょう。

しかしながらどちらのスピーカーに切替えたところで、必ず等価抵抗が代って入り、負荷インピーダンスは適当な値に保たれているわけですから、異状電圧の発生はちょっと考えられません。それでも事実スパークが出るのですから、切替えに際し無負荷状態になる瞬間があることは確かです。この増幅機に使ってある切替スイッチは、通信機用のガッチリしたもので、接点は完全ですが、やはり切替える過程にはオープンになる瞬間があることはやむを得ないものと思います。

出力管のプレート回路を詳細に調べてみると、この図に点線で示したコンデンサーが、片線だけを外したままで残っていて、その1個は完全にパンクしていました。多分最初はこのコンデンサーが入れてあって、それが電圧でパンクしたので、これをはずしたため次には出力トランスをショートさせることになったものと想像できます。

のですが、そうはいつでも取扱う人が専門家でないので、この注意を守ってもらうことは無理です。そこで**第62図**のように校庭用と教室用のスイッチを別々にしてやりましたが、こうすれば片方のスイッチを操作しても他方はそのままになっているわけですから、たとえ動作中に操作しても大して危険はないでしょう。確かにこのように改造してからは同じような故障を再び起すようなことはなくなったそうです。



第62図 スイッチは単独に

要するに出力トランスの一次側にスパークの事故が生じた場合、それを出力トランスのせいにする前に、一度負荷の状態を検討してみる必要があるわけです。

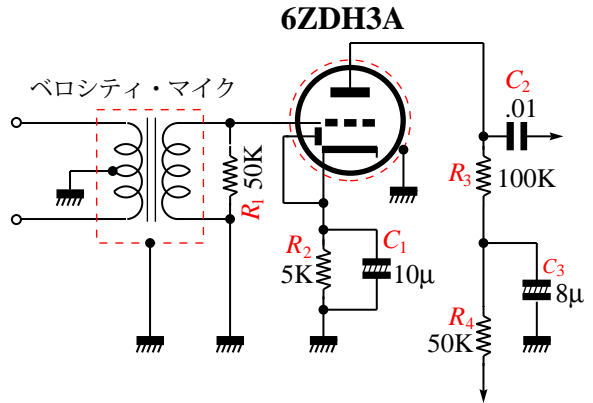
### 3・9 初段管からのハムの原因は？

ある劇場でベロシティー・マイクを使っているのですが、ボリュームをあげると聴いていても気の毒なくらいハムがでるので、余計なおセッカイとは思いますが、修理させて貰うことにしました。マイク専用の2A3 PPのンプで、問屋などで売っている既製のンプ・ケースに組立ててありました。**第63図**のように初段の球は6ZDH3Aで、これがマイクのプリ・ンプになっているのです。その次段は6C6ですが、そのグリッド回路にボリューム・コントロールが入れてあり、それを絞るとハムは出なくなりますから、ハムは初段の6ZDH3Aのところからだ

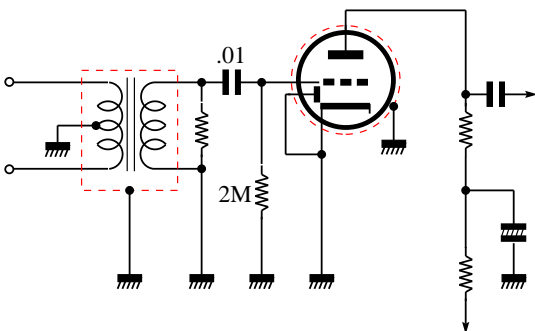
ということが判りました。

そこで 6ZDH3A を抜いてみると、ハムは止まります。従って 6ZDH3A のプレート回路のリプルが原因ではないことは判ります。この B 電圧にリプルがあれば球を抜けば余計にふえることはあっても止まることはないわけです。次に 6ZDH3A のグリッドをショートしてみるとハムは幾分減ります。6ZDH3A のカソードを直にアースして試してみても同じくハム

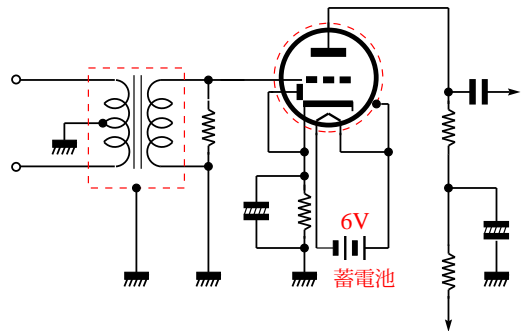
は幾分減ります。そうすると、ことによるとカソード・ヒーター間のエミッションに原因しているかも知れないと思い、第 64 図のような自己整流バイアスに改造してみました。ハムは前と変わらず出ます。この状態でマイクのインプット・トランスの二次側をショートしてみました。今度は出ているハムは少しも変わりません。要するにマイク・トランスが誘導を受けているのではないことも判りました。完全防磁というケースに入っているからでしょう。それではヒーターを AC で点灯させているため、ここからハムが出るのかなと思い、劇場に備え付けの蓄電池につないで第 65 図のようにして、DC で点灯してみました。出ているハムは少しも減りません。6ZDH3A にはもち論シールド・ケースがかぶせてありますから真空管は何本取替えてみても同じです。6ZDH3A はパワー・トランスから他の真空管や部品を何本も隔てた 40cm の距離にありますから静電誘導はほとんど無いことは判ります。



第 63 図 ハムの出るプリアンプ



第 64 図 自己整流バイアスにしてみる



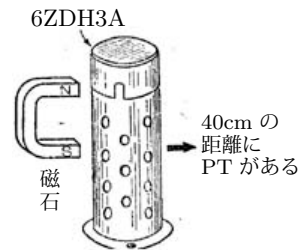
第 65 図 ヒーターを電池で点灯してみる

要するにハムの原因は

- a. マイク・トランスの電磁誘導
- b. プレート電圧のリプル
- c. カソード回路及びグリッド回路
- d. ヒーター回路
- e. 真空管に対する静電誘導
- f. 真空管自身の不良

等のいずれでもありません。

さてそこで奥の手というべきハム探索の手段を用いてみました。道具の一つとして用意してある強力磁石を取り出し、**第 66 図**のようにシールド・ケースの外から 6ZDH3A に近づけてみました。ところが



第 66 図 磁石を近づけるとハムはふえる

どうでしょう。丁度パワー・トランスの正反対の位置から 6ZDH3A に磁石を近づけるとものすごいハムになることを発見し、これは、この球から約 40cm の距離にあるパワー・トランスから交番磁力線が漏洩<sup>ろうえい</sup>して、その一部が漂游<sup>ひょうう</sup>してきて 6ZDH3A のニューム<sup>1)</sup>のシールド・ケースを通過して、真空管内の電子流を攪乱し、その微小変化が高増幅度で増幅される結果大きなハムとなったものと考えられます。そこで薄鉄板でできている昔のシールド・ケースを探してきて 6ZDH3A にかぶせてみると、心なしか少しハムが減るように思えました。しかしシールド・ケースでは、どんな厚い材料でこしらえても頭かくして尻かくさずですから、完全防磁にはなりません。メタルチューブなら鉄の殻で覆われているため漂游磁力線は通さないから、ハムは出ない筈<sup>はず</sup>と思い、6ZDH3A をやめてメタル管の 6SF5 に換えてやったら、結局予想通りハムはピタリと出なくなりました。

### 3・10 ロフティン・ホワイト直接結合電蓄の音質

ラジオ界には実に迷信が多く、特に音質に関しては、それが甚だしいようです。たとえばダイナミックのコーン紙の色が音色を左右すると思ったり、インチキトランスでも舶来品<sup>2)</sup>まがいのケースに入れるとトタンに音が良くなると考えてい

1) アルミニウムの俗称

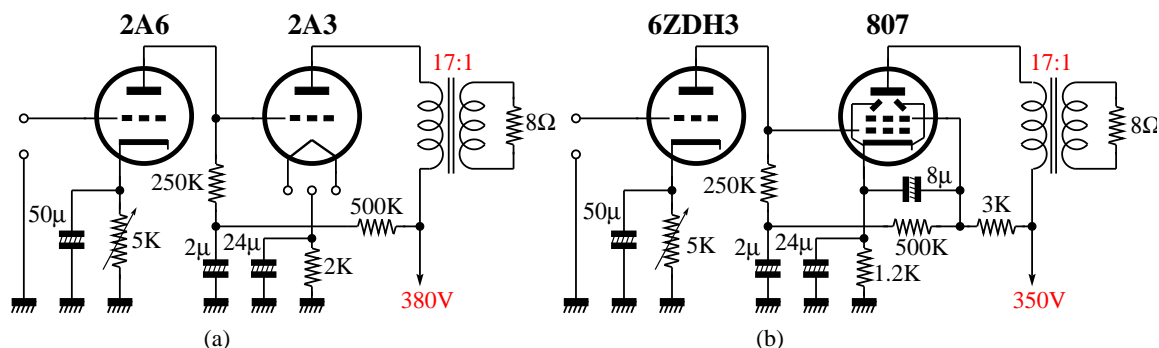
2) 外国からの輸入品。輸入品が主に船舶で輸入されたために、「船舶に乗せられて来た品」から「舶来品」と云われた

る人がいるようです。この筆法でいくと、トゲ抜き地藏<sup>1)</sup>のおフダをコーンに張り付けるとピークがなくなり、富士山のお砂を原料としたダスト・コアーでコイルを作ると、 $Q$ がスバラしく上ると考えるようになります。これほどでなくとも送信管のシングルで6<sup>インチ</sup>半のフリーエッジ・ダイナミックを鳴らすのでなければ、ハイファイデリティー<sup>2)</sup>の電蓄<sup>3)</sup>ではないとか、あるいは56や76よりも、27や37の方が音質がよいと、大まじめに信じていて、それらの理論的根拠を知ろうとすることは、真空管の神秘性を冒瀆するものだと考えているものなどもあるかも知れません。

電蓄ファンの中には、ロフティン・ホワイト直接結合方式<sup>4)</sup>は、他の結合方式では絶対に得られぬよい音質を持っていると信じている者もかなりいるようです。耳が悪いせいか、正直のところ私には、直接結合と抵抗結合の音質の違いが、どうも判らないのです。そこで耳に頼らず測定器にそれを聴いて貰いました。

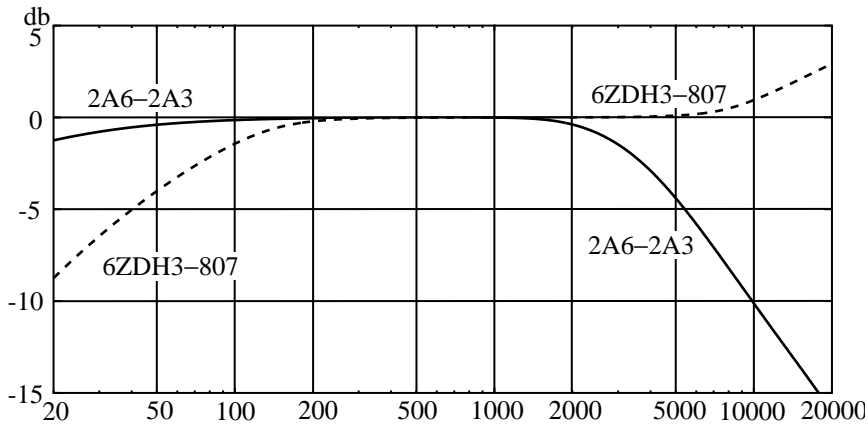
第67図のような、2A6と2A3及び6ZDH3と807の2種の組み合わせの回路です。ここに使った出力トランスは、八角ケースに入っている高級品と銘打ってある品です。その一次インダクタンスは一次側にプレート電流を60mA流したとき約8ヘンリー、一次側から見た全漏洩インダクタンスは約160ミリヘンリーのものです。その17対1のタップの二次側に $8\Omega$ の純抵抗をつないで測りました。その場合、一次側から見たインピーダンスは、400サイクルのとき約 $2500\Omega$ ですから、2A3及び807に対しては最適値のはずです。

第68図はその周波数特性ですが、これは従来しばしば発表されているような、



第67図

- 1) 東京都豊島区巢鴨にある曹洞宗の寺院高岩寺の本尊である地藏菩薩の俗称
- 2) High Fidelity (忠実度)「ハイファイ」とも「ハイファイ」とも言われた。主に音声信号を忠実に再生することを意味した
- 3) 電気蓄音器。レコードを再生するプレイヤーとラジオが一つの筐体に収められたもの
- 4) ロフティン・ホワイトとも云う。ロフティンとホワイトが発明した回路で、その特徴は出力管のグリッドに前段の電圧増幅管のプレートを直結するところにある



第 68 図 ロフティン・ホワイト増幅器の周波数特性

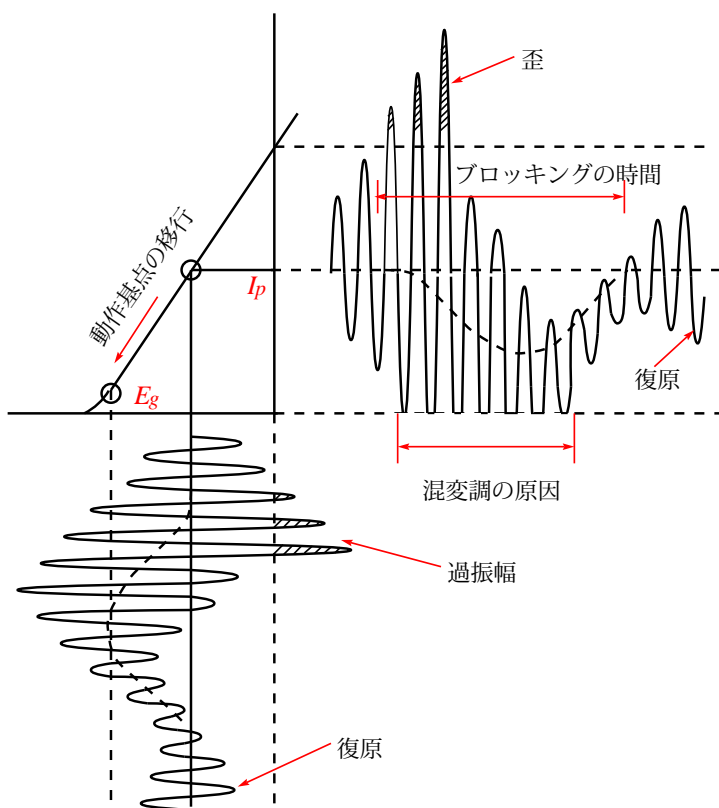
20 から 20,000 サイクルまで、フラットな特性のカーブとは、およそ掛け離れています。この程度の特性なら、抵抗結合でも容易に得られましょう。このように低い方の出にくいのは、主として出力トランスの一次インダクタンスのためで、また電源回路のインピーダンスも多少は影響しているでしょう。高い方で下るのは、真空管の電極容量や配線の漂游容量、及び出力トランスの漏洩インダクタンスの影響と思われます。出力トランスを普通のスピーカーに付いているもので較べてみると、これよりも一層低い方の特性は悪くなりますが、高い方の出かたは良くなります。要するに出力トランスの特性によって、全体の特性が大きく左右されているのです。

直接結合の特長は、0 サイクル即ち直流までも増幅できるという点にあります。その良さを充分発揮するためには、一体どれくらい優秀な出力トランスを使ったらよいでしょうか。たとえ飛切り上等なトランスを使い、低い方の特性を可聴周波外にまで延ばしてみたところで、どうしてそれが耳に聴えるでしょうか。抵抗結合でも出力トランスの特性を含まないで、16 サイクルまでは 0 デシベルというものは簡単にできるのですから、音声増幅器に関する限り、直接結合も抵抗結合も選ぶところがないといえましょう。

それにもかかわらず、実際に直結式と普通の抵抗結合とを並べて比較すると（もち論 SP と PU は同一品にて）明らかにその差が認められ、音の分離とか、いわゆる迫力というもの、直結式は抵抗結合より確かに優れていて、例えば低音楽器の、特に打撃音のような瞬間的な音の分離再生等は、抵抗結合では再現できないものを直結式では明らかに聴きとれ、シンホニーなどをかけたときの音の分離や再生音に迫力があって、生き生きした音になり、その点で抵抗結合より優れて

いるということをよく聞きます。従って直接結合と抵抗結合とでは実際には何か違った動作をするのでしょうか。また音質について聴いた感じの表現、たとえば迫力とか分離とか、ないしは生き生きした音という電蓄の試作記事専用語に何か技術的な説明が付けられないのでしょうか。これらについて私見を加えてみましょう。

「出力を出すとプレート電流が減る 42 シングル」でも述べましたが、実際の音声の振幅特性には非常に不同があり、それをある程度出力音量で聴こうとする場合、最大振幅のところでは出力管のグリッド・バイアスの範囲を超えて過振幅となることが見られます。そして過振幅のときは当然グリッド電流が流れ、出力波形には歪を生じます。これは結合方式の如何にかかわらず、いずれにも起るもので、直接結合とでもそれは免れません。ところが抵抗結合では更に悪いことには、結合コンデンサー



第 69 図 過振幅のブロッキング現象

に充電が起って出力管のグリッドは一層マイナスになり、動作基点は特性曲線の下の方に移転してしまいます。移転した動作基点は結合コンデンサーの充電電圧が放電されるに従い徐々に復原します。復原に要する時間は、結合回路で低い周波数をよく出るように設計するほど長くなります。そして復原するまでの間、出力管は非直線的な増幅動作をするため、出力の瞬間的な低下と、同時に混変調とを起します。

出力の瞬間的な低下は即ちブロッキング現象で（これは第 69 図を御覧下さい）混変調とはグリッドに周波数の異なる二つの入力を同時に与えた場合、出力には入力と同じ二つの周波数の他に、更に両周波数の和及び差の周波数を新たに生ず



る現象です。これはスーパーの第一検波即ち周波数変換管で中間周波が作られるのと全く同じ現象ですが、低周波増幅の場合にでも、増幅管が非直線的動作をしている場合に当然生じます。このブロッキング現象に伴う混変調現象は抵抗結合シングル出力管に生じ易く、そして著しく音声の明瞭度を害するものです。それゆえ音質について論ずる際、これは無視することはできないでしょうが、それにもかかわらず、これについての解説は従来あまり見受けません。

以上がいわゆる迫力と音の分離という表現に対する愚考です。そうすると問題は入力過振幅にあるので、なるほどこうした状態で抵抗結合と直接結合を較べたならば、耳のよくない私にも両者の差はよく判ります。しかし両者を  $A_1$  級増幅としていかなる場合にもグリッド電流を流さないような正しい状態において比較していたのでは、おそらく聴き分けはできないでしょう。ところで皆さん、直接結合で「瞬間的な打撃音」の迫力のある生き生きした音の中に、いかに波形歪が含まれているか、聴き逃さないように耳を澄まして聴いてみて下さい。

直接結合について位相特性や過渡特性を問題にするものもありますが、それをいうには増幅器よりも現在のピック・アップやスピーカーの機構の方が遙かに先決問題です。

結局、直接結合は音声増幅器としては、全く意味がないものと思いますが、いかがでしょう。

研究の課程として、一度は直接結合を試みることは必要でしょう。しかし先入観念に捉われて、理論的根拠のない結論を下すことは、よろしくないと思います。

## 第4部 部分品について

### 4・1 巻線と鉄心間に高電圧の出るパワー・トランス

部品屋の店先へ、アマチュアらしき客が、気負いこんで入ってきました。抱えてきた大型のパワー・トランスを、カウンターの上へ叩きつけるように置きながら、「君の店は、すいぶん酷いものを売るね。こんなパワートランス、使いものにならないから、引取ってくれ!」と、大変な意気ごみです。

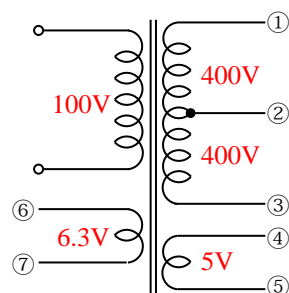
「いったい、どうしたということですか」と、店員の応待も少々ぶっきら棒です。

「どうもこうもあるもんか、まるで絶縁不良で、あぶなくて使えやしない。まあ測ってみてくれ」と客。

店員はカウンターの下からメガー<sup>1)</sup>を取出し、パワー・トランスの巻線と鉄心間にリードを挟み、ハンドルを勢いよく廻転させてみて、「どうです、ごらんの通り悪くはないじゃありませんか。100メガ<sup>2)</sup>もあればたくさんでしょう。大体うちじや試験をして品物を仕入れるんですからね」と得意顔をします。

「変だな。おれに借してみてくれ」と、今度は客自身でメガーを廻し、「このメガーはインチキだぞ。うちでこのパワー・トランスに電気を入れてみたら、コアに漏電していて、危くて触れやしないんだ。試しにここでやってみてくれ」と、まだ承知しません。

「100メガもあるものが、そんなことあるもんですか」と、店員はクリップ・コードを取出し、一次側に接いで、コンセントに差込み、「いいですか、アッ痛え」と、鉄心に触ろうとした手を急に引っこめ、「変ですね。絶縁は確かに良い筈ですが。電気を入れるとショートするのかしら?」と、店員はつぶやくようにいいます。お客は、したり顔をして、「どうだい、ダメだろう。第一このB巻線の片方と、コアの間を、テスターのACレンジで測ってみたまえ、500Vも漏洩電圧が出るんだから。ともかくもこういうトランスが多いんだ。だいたいパワー・トランスの絶縁は、メガーでは判らないものだよ。一次に電気を入れてみて、交流電圧計で測って調べればすぐ判るよ。」と、店員相手に講義を始めだしました。



第70図

1) 数 MΩ 単位の高抵抗を測定する機器

2) 100MΩ

話はここまでですが、さて、どうして鉄心に触れると感電するのでしょうか。そして、どうして巻線と鉄心間に電圧が現われるのでしょうか？ 結論として、このパワー・トランスは、はたして使いものにならないのでしょうか？

いま例を第70図のようなトランスにとり、実測してみた結果は第1表の通りになりました。ただしこのトランスの巻線鉄心間及び巻線相互間の絶縁は100MΩ以上のものです。使ったテスターは、感度200μAで、AC1000Vレンジで測ったものです。

この電圧の出かたは巻線の順序によってはだいぶ違うこともあります。いずれにしても巻線と鉄心間に電圧の全く出ないという物は、ただの1個もありませんでした。

これは、パワー・トランスの巻線と鉄心、及び巻線相互間には必ず、ある容量が存在するからです。一次に交流電圧をかけた状態で、例えばB巻線の片方と鉄心の間に電圧計を入れれば、B巻線の他の端と鉄心間の容量を通じ、交流の回路ができますから、当然そこには交流電流は流れ、メーターに電圧が指示されても不思議はないでしょう。

巻線と鉄心間の容量は、ほとんど分布容量ですから、トランスの寸法や工作法によって相違があり、従って巻線と鉄心間に現われる電圧と、巻線の電圧との間に一定の関係は認められません。また分布容量は、そんなに大きな値ではありませんから、そのリアクタンスのため、測るメーターの感度またはレンジによって、かなり相違しましょう。

一次とB巻線の間には静電シールドをしてある良心的な製品では、その間の容量は比較的大きく、従ってシールドが鉄心に接続してある場合にはB巻線と鉄心間には驚くほどの高い電圧が現われ、またシールドが鉄心に接続されず別の端子で出ているものでは、鉄心には高い漂游電圧が現われていますから、不用意に鉄心に触れれば、相当痛い電撃を受けるのは当然で、むしろそれが、パワー・トランスの常態なのです。

#### 4・2 パワー・トランスのワットと鉄心断面積

市販パワー・トランスのほとんど大部分が、使用容量（ワット）に対して鉄心

第1表

①と鉄心間	.....	約120V
②	// .....	// 300 //
③	// .....	// 620 //
④	// .....	// 380 //
⑤	// .....	// 380 //
⑥	// .....	// 240 //
⑦	// .....	// 240 //

断面積が不足であると、なげく人が多いようです。その根拠となるのは

$$A = 1.4\sqrt{W}$$

$$A = \text{鉄心断面積 cm}^2$$

$$W = \text{使用容量 Watt}$$

という実験式か、あるいは第71図のような容量対断面積のグラフです。いずれも使用容量即ち負荷電力と鉄心断面積とは密接な比例関係にあることを示してあります。こんなところから、鉄心が多く使ってあれば大負荷に耐えられるものと思われ、反対に小型にできているものは危険視されるのでしょうか。

ところが私の調べたところでは、この計算式またはグラフに適合しない鉄心断面積になっているパワー・トランスで、優秀なものが相当あります。現に私の使っている42PPのパワー・トランスは、鉄心断面積 $9.5\text{cm}^2$ で、このグラフによると $16\text{cm}^2$ 必要なわけですが、もうまる3年間も使っていますが、いまだかつて故障にもならなければ働きが悪いということも絶対にありません。理論と実際とはこんなにも違うものでしょうか。

ちょっと待って下さい。パワー・ト

ランスの計算理論を調べてみましょう。よく知られている次の式があります。

$$E = 4.44NfAB \times 10^{-8}$$

$$E = \text{一次電圧 (ボルト)}$$

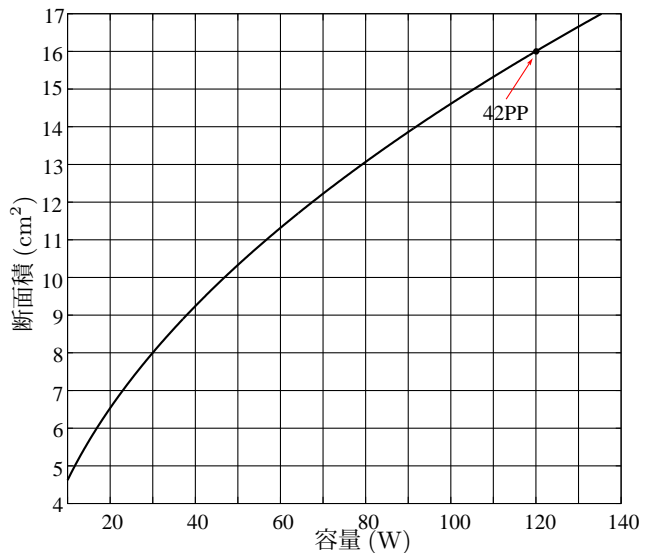
$$N = \text{巻数}$$

$$f = \text{使用周波数 (サイクル)}$$

$$A = \text{鉄心断面積 (cm}^2\text{)}$$

$$B = \text{磁束密度 (ガウス)}$$

この式を吟味してみると、パワー・トランスの使用一次電圧は100V、周波数は



第71図 パワー・トランスの鉄心断面積の算出法

50 または 60 サイクルですから、それ等を上式の定数 4.44 と同様に扱ってみると、

$$A \propto \frac{1}{NB}$$

つまり、断面積は一次巻数と磁束密度に逆比例するという答が出ます。磁束密度は鉄心の品質が良いほど多く通せますから、上記をいい変えれば、断面積は一次巻線と鉄心の品質によってきまる、というわけです。もち論この式には、負荷電力に直接の関係をもつ項はありません。

要するに、どう検討してみても、そこには何ら断面積対負荷電力の直接的関係は見出せません。容量対断面積として、このグラフに示されたものは、理論ではなく単なる統計から得たデータか、あるいは特定の形状の鉄心にだけ当てはまるデータではないでしょうか。ともかくも、これが理論上のグラフではないことは、上記の基本式からは導き出せないし、また私の使っているパワー・トランスもそれを実証しています。鉄心断面積 9.5cm<sup>2</sup> というと、ちょうどシングル用程度の大きさで、これでは例としては余り突飛すぎますから、次に従来の常識の範囲内で納得いただけるデータをお目にかけてみましょう。

**第2表**は、市販某社製パワー・トランスの 42 シングル用の A のデータのものを対照とし、別に同社に頼んで巻線の太さと巻数をそのまま同じ鉄心で断面積を 17%減らした B のデータのものを試作して貰って比較してみたものです。これは実際の回路に付け替えてみた場合のものですから、回路自身の自動的な電流調節作用で両者の優劣の差は接近しています。これを見ると全く同じ鉄心で積厚の薄い、つまり断面積の小さいものでも、なんら劣らずむしろ優れている傾向すら認

第 2 表

	A(規格製品)	B(試作品)
鉄心断面	28.5 × 35mm	28.5 × 29mm
一次巻数	580t	580t
一次抵抗	7.2Ω	6.9Ω
一次抵抗 (試験終了後)	9.0Ω	8.6Ω
B 巻線電圧	無負荷 → 全負荷 380V → 348V	無負荷 → 全負荷 380V → 350V
ヒーター用電圧	7V → 6.3V	7V → 6.4V
〃	5.5V → 4.9V	5.5V → 5.0V
一次電流	0.08A → 0.54A	0.1 → 0.55A
備考	負荷電流は 6.3V 巻線は約 4A, 5V 巻線は約 2A B 巻線は 8μF コンデンサー入力型で DC60mA	

められます。温度上昇は一次巻線の抵抗の増加割合からみて、どちらも大差ないことが想像できます。この事例には鉄心対銅線の設計上の問題に対する示唆が含まれていましょう。

この結果についてTKトランスの社長の意見を叩いてみたところ、次のようにいわれました。設計については当社として独自の見解もありますが、一般的にみて鉄心をもう少し減らしても性能に影響せずにコストを下げることができ、或は鉄心はそのままで巻数を減らして太い線を巻いた方が同じ値段でさらによいものができることは判っています。しかし鉄心使用量や甚だしきはその積厚などで批判され、また無負荷電流の多いことを嫌う現状では、変動率のよい小じんまりとしたものを作ったところでスポイルされてしまい商売になりません。買い手が今のような基準の選び方をされる限り、やはり積厚でハツタリを効かせ、そして無負荷電流の極めて少ないものを作る方が利巧でしょう。もし電圧変動率と温度上昇をもって優劣を判定していただけるなら、同じ値段でもう少し良いものができると思います。というしだいでした。

ところでラジオ界には理論でないものももっともらしく信じられ、幅をきかしている例がたくさんあり、このパワー・トランスの鉄心対負荷電力の関係もそのよい例でしょう。RFコイルやIFTその他各部分品が、あげて小型化を望まれている今日、パワー・トランスだけは鉄心をたくさん使ったものがよいとする考えかたは時代錯誤といわねばなりません。

しかし、なにぶんにも負荷電力と鉄心断面積は密接な比例関係にあると一般に信じているところへ、パワー・トランスの良否は鉄心の断面積では判定できない、それは鉄心断面積対負荷電力の間には直接的な関係はないからである、などと「常識を無視」したことをいい出したのでは、にわかには納得いただけないでしょう。なかには「鉄心の断面積の小さいものの方がよい」と早のみこみされる方があるかも知れませんが、むろんそういう意味ではなく、「鉄心が多く使っているからと云っても、必ずしも優秀だとは限らない」というわけなのです。しかし鉄心の多いものは粗悪品である、などと反対なことをいっているのではありませんから、誤解なさらぬよう願います。

パワー・トランスの品質は、要するに電圧変動率や温度上昇によって決められるもので、鉄心断面積の大小をもってしては、良否の判断は決してできないことを重ねて申し添えておきます。

#### 4・3 パワー・トランスのワットと巻数との関係

前述のパワー・トランスの負荷電力と鉄心断面積の間には、なんら直接の関係はない、ということに対し次のような意見をいつて来られたかたがあります。

“ラジオ技術教科書下巻に、パワー・トランスの出力と一次巻数の相互関係が第72図のようなグラフとして載っている。巻数  $N$  と鉄心断面積  $A$  は密接な関係にあることは、トランスの基本式

$$E = 4.44NfAB \times 10^{-8}$$

$f$  : 周波数

$A$  : 鉄心断面積

$B$  : 鉄心磁束密度

に示されているから、けっきょくは容量と鉄心断面積は関係があるのではないか。” というのです。

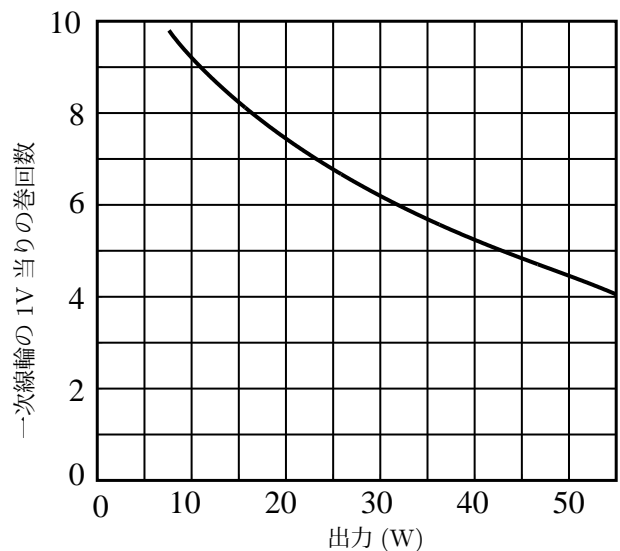
このような考えかたは一般に通用しているようです。しかし第72図の出力と一次巻数の関係は、どういう理論から導き出されたのでしょうか。上記のトランスの基本式からは得られないことはもち論で、前の容量対断面積の関係の場合と同じです。

確認したわけではありませんが、ある人の言によると、このグラフはNHKの認定合格品について、それから得られた統計上の記録であるとのこと。ただし、このことが誤りであるならNHKの当事者から御叱正を頂きたいと思います。

統計上のデータは参考資料としては貴重なものに違いはありませんが、それは決して理論ではありません。

従って、それを設計製作の目安にすることは結構ですが、反対にそれに準じないでも、なんら差支えはないわけです。技術教科書中にもその意味で載せてあることは、その文意からわかります。

要するに、パワー・トランスの良否は使用容量に対する鉄心断面積とか、一次



第72図 巻線と容量の関係を示したもの

巻数などによって判じることがは適当ではありません。その証拠には、NHKの認定規格にも、決して使用容量に対する巻数とか断面積とかは規定されていないはずで、従って設計製作の際には、容量対断面積または一次巻数という関係にとらわれず、自由に選んでよいと思います。要は結果においてレギュレーションの良いパワー・トランスができればよいのですから。

#### 4・4 パワー・トランスの無負荷電流

「パワー・トランスは全負荷電流に較べ無負荷電流の少ないものがよく、10%以下が望ましいと聞いたが、舶来セットを調べてみたところ無負荷電流は全負荷電流の30%強であるにかかわらず、少しも差支えなく働いている。そうすると上記の理論はアメリカ製品には当てはまらないのか？」とある人から見解を求められました。

私は、無負荷電流が少ないほど良いと書いてあった文献をまだ見ていないので、どういう根拠でそういっているのか判りませんから、別に実験をしてみることにしました。

まず市販品の中で、外観から信用の置けそうなトランスを、いろいろと10個ほどアトランダムに選んで測ってみたところ、定格電流に対する無負荷電流は大体10%前後が普通でした。比較のためRCAのセットに付いているもの数種について調べてみたところ、それは30%内外で、たしかに国産品に較べ多いようでした。そこで電圧変動率はどうかと調べてみたところ、国産品では10%以上、RCAでは4~6%で、RCAの方が遙かによいことがわかりました。

これからみると、無負荷電流は多くても必ずしも変動率が大きいとは限らず、却って無負荷電流の少ないものに変動率の大きいものが多いという結論が出てきそうです。参考までにRCAのアンプのパワー・トランスを測ったものを第3表に示しておきます。机上論だけが先走りしているわが国の製品と、充実した設備を

第3表 RCA M1-12202用P.T.

巻線	無負荷	全負荷	変動率	負荷電流	抵抗
一次 110V	(0.33A)			1.1A	3.5Ω
P~P	700V	670V	4.3%	110mA(DC)	138Ω
整流	5.1V	4.8V	6%	3A	
増幅	6.5V	6.1V	6.2%	3.5A	
鉄心断面	38 × 38mm		無負荷電流/全負荷電流 = 30%		

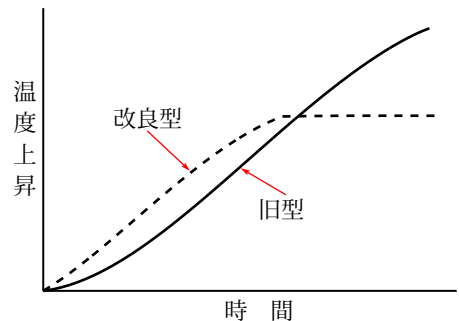


第 4 表

旧 型					
巻線	無負荷	全負荷	変動率	負荷電流	抵抗
一次 100V	(0.06A)			0.51A	9.0Ω
B	380V×2	318V×2	8.5%	60mA(DC)	
整流	5.5V	4.9V	10.9%	2A	
増幅	7V	6.3V	10%	2A	
鉄心断面 28.5 × 35mm 一次巻数 580T					
無負荷電流/全負荷電流 = 11%					
改 良 型					
巻線	無負荷	全負荷	変動率	負荷電流	抵抗
一次 100V	(0.1A)			0.55A	3.8Ω
B	375V×2	350V×2	6.7%	60mA(DC)	P~P
整流	5.5V	5.06V	8%	2A	700Ω
増幅	6.8V	6.25V	8%	2A	
鉄心断面 28.5 × 35mm 一次巻数 470T					
無負荷電流/全負荷電流 = 18%					

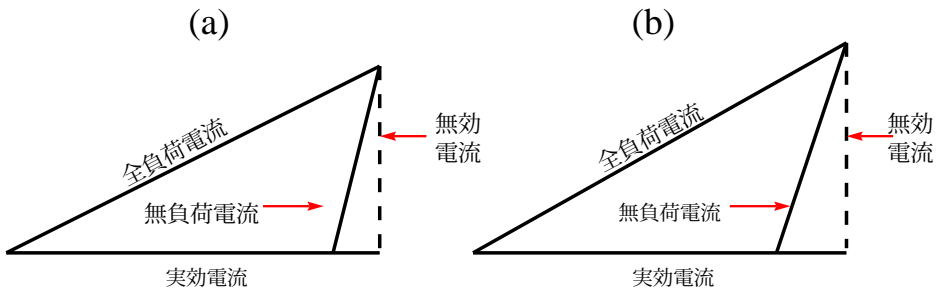
持つアチラのメーカーの研究室からの所産のものど、皆さんはどちらが信用できるとおもいますか？

では上記のような結論は、アメリカ製品だけに当てはまり、国産品には適用できないのでしょうか。第4表は国産品である某メーカーの42シングル用のものの旧型と、その改良型といわれるものを比較したものです。この両者はボルト当りの巻数と使用線番が相違するだけで、鉄心量やその品質は、いずれも同一のものです。これを見ると、変動率を少くしたのものの方が無負荷電流は明らかに多くなっています。また温度上昇は、一次線の抵抗値変化から推したのですが、無負荷電流の多い方がかえって少いということが判りました。また時間的経過をとってみると、大体第73図のようになります。これで判る通り、無負荷電流の多いことは必ずしも粗悪品であるとは限らない、ということがわかりましょう。



第 73 図 温度上昇の時間的経過

ここで興味あることは、無負荷電流は多くとも全負荷電流はさほど相違しないということです。これは無負荷電流の大部分は無効電流、即ち電力を消費しない



第74図 無負荷電流と全負荷電流の関係

電流で、従って負荷電流との関係は第74図のようになるため、

$$\text{全負荷電流} = \text{無負荷電流} + \text{負荷電流}$$

とはならないからです。従って、無負荷電流の大半が無効電流である限り、相当多く流れても発熱つまり損失の原因とはならず、要するに心配はないわけです。

この資料を提供してくれたトランス会社の専務に会ったので、第4表で見ると改良型といえど、まだまだ改良する余地があると思うから、もっと巻数を減らして、その代り太い線を使ってアメリカ製品なみの変動率にしたらどうか、といったら、“そこが商売のつらいところで……”と前置きして、次のように語りました。“一般に無負荷電流の少いものがよいと信じられているので、無負荷電流比30%というようなものを作ったら誰も買ってはくれません。それに、変動率の良いものは、もし一次側にヒューズの代りに針金でも入れて使われたら、回路に事故でもあったと焼かれる率が多くなるでしょう。そうなると、あのトランスはすぐ焼けるなどと宣伝されるのが落ちですから、営業政策上面白くありません。”とっていました。

さて以上の通り、またまた読者諸氏からのお叱りをうけそうな、常識とは反対なことをいいたしましたが、誤解のないよう飛躍して結論を述べておきます。無負荷電流は多くとも粗悪品とは限りません。むしろ無負荷電流が少いものには優良品は少いともいえます。ただし質のよくない鉄心を使ってあるものでは、無負荷電流の多いことは飽和を意味することがあり、この場合はいずれにしても良くありません。要するにトランスの良否は、見掛け上の大きさや重量や、無負荷電流などで見分けずに、電圧変動率と温度上昇で判定すべきだ、ということになります。

#### 4・5 擬皮フリーエッジの硬化

ラジオ屋仲間で、電蓄のある種の音質を“ビクターの声”というように形容しています。文字では適当に表現もできませんが、つまり戦前に作られた日本ビクターの電蓄が現在出しているような音のことなので、この種の音質を“電蓄らしい音”として好む人もありますが、高忠実度とは大分遠い音です。

さて、こういふとビクターの電蓄の音は酷く悪いといっているようにとられるでしょうが、事実そうなのです。しかしちょっとお待ち下さい。これはスピーカーが故障状態にあるときの音なので、日本ビクターの電蓄の本来の音は決してそんな悪いものではありません。だからいわゆる“ビクター声”は元通りのよい音に直してやる必要があります。

たとえば戦前の日本ビクター社製品の最高級品たる RE-48 型マジック・ボイス電蓄などが、数百サイクルにピークを持った音域の狭い音質で鳴っていたとするならば、直ちにそのスピーカーを調べてみる必要があります。マジック・ボイスの密閉された裏蓋を外すと、フィールド・コイルの特に大きな10<sup>インチ</sup>のスピーカーが見えます。これをはずして点検するのですが、たぶんコーンは新品のように綺麗で故障などはどこにも見当たらないでしょう。しかしそのコーンの縁を第75図のように指で軽く押してみると、かなりの手ごたえを感じ、コーンがよく動かないことを発見するでしょう。これが要するに故障症状なのです。

この型の電蓄に限らず戦前の日本ビクターの各種電蓄に使っていた10<sup>インチ</sup>のスピーカーのコーンの縁は、いわゆるフリー・エッジ式で、その材料はレザー・クロス(擬皮)の一種で布の表面にラシャ<sup>1)</sup>の粉を吹付けしたようなものです。このエッジが年数の経過とともに硬化してしまっていて、何か金属か木の板のような感じになっているのです。多分吹付けに使う糊が乾きすぎて固くなってしまったものらしいのです。このような状態ではフリー・エッジならで完全なフィクスト・エッジです。そのためコーンをエッジで押えてしまう結果、低音共振点は200~300サイクルに移動していて、それよりも低い音はほとんど再生されず、またそれより高い音も非常に減衰されてしまうのです。だから音域の狭い感じの音になり、ビクターの電蓄独特の音として形容されるようになっているので、たとえマジック・ボイスのように独特の共鳴パイプを装置した豪華な電蓄でも、その効果は全然発揮されなくなるのです。



第75図 コーン紙を軽く動かしてみる

1) ポルトガル語 raxa——羊毛の一種で地が厚く密なもの

このような状態になったものでもコーン紙には異状はないのですが、そのエッジだけを張り替えてやればよいのです。それだけでこれこそビクターの電蓄の本来の良い音に帰る筈です。エッジの材料としては鹿皮が推奨されますが、あるいは薄いラシャなどもよいと思います。これを張り付けるにはセメンダインCのような接着材がよいようです。

ビクターの10<sup>インチ</sup>のスピーカーを使ってある電蓄が、もしボンボン声であったならば一応スピーカーを調べてみると、このような状態になっていることに気付かれると思います。

#### 4・6 パラフィンのいたずら

暑いにつけ、寒いにつけ思い出すのは、某有名セットの特有な症状です。この受信機はスーパーで6<sup>1/2</sup><sup>インチ</sup>のダイナミック・スピーカーが付いています。同じ社の製品で高周波2段のものも同様な症状になるのです。この会社では昔から毎年何種類か新しい型のものを発表してきていますが、ここに述べる症状を起すものは、そのうちの昭和14~16年頃の製品に多いようです。

この症状というのは、夏になると普通に鳴るようになりますが、涼風が立つころから来年の初夏までの間は音の調子が変わり、つまり低音も高音も出にくくなって音量も小さくなるというのです。調べたところ、冬のことでしたが、そのセット付属のダイナミック・スピーカーのコーンがまるきり動かなくなっているのです。パラフィンがムービング・コイルのギャップの中に一杯に詰まっているからなのです。コーン自体にもパラフィンがすっかりしみこんでしまっています。

この状態では、いくら出力を送ってやっても、ムービング・コイルは動きませんから音が変わる道理です。夏まで待っていれば、気温とフィールド・コイルの発熱やキャビネット内の温度上昇でパラフィンは融け出しますから、普通に鳴るようになるのです。もちろん寒い最中でも、スピーカーを火にかざしてパラフィンをすっかり融かし出してやれば直りましょう。ところがパラフィンは、あとからあとからと、きりなく出てくるのです。

よく見たところ、このスピーカーに付いている出力トランスは、なんとコアもバンドも全部をパラフィンでスッポリと覆せてあり、またフィールド・コイルの方もパラフィンで処理してあるのです。よほど気長にあぶっていてやらないとパラフィンは全部融け出てくれません。再びムービング・コイルのギャップ内にパラフィンがたまらないようになったとしても、コーン紙にしみこんだパラフィ

ンのため、音質は決してすっきりとはなりませんので、コーンを張り替える必要があります。

修理に経験のある方なら、すぐにハハア例のセットかとお気付きになるでしょうが、初めてのときはテスターでは全く判らないので、ちょっと間違<sup>まちご</sup>つきます。スピーカーを箱から外してみても気がつくのです。

この社のスピーカーは現在でもそうですが、フィールド・コイルをファイバー製の枠に巻いてパラフィン処理をしてあるのです。元来フィールド・コイルの線はガラ巻きにしてあるのが普通ですが、この社ではエナメル線の被覆の絶縁に信頼できないとみえて、それをパラフィンで固めてあるのです。しかし他社の製品のほとんど全部が、フィールド・コイルは同様なガラ巻きでありながら何の処理もしてないのかかわらず、絶縁がダメになってレアー・ショート<sup>1)</sup>するような事故は非常に少ないのです。それゆえ、フィールド・コイルのパラフィン処理は層間の絶縁としては全く意味がないと思います。

それでは線と外部の絶縁のためかというに、この社のフィールド・コイルの絶縁低下は常に見られることで、決して処理をしてないものに較<sup>くら</sup>べ優<sup>くわ</sup>ってはいないようで、それはフィールド・コイルがよく断線することでも判ります。つまり絶縁低下に伴って生ずる故障は、線とボビンの接触面<sup>ろくしょう</sup>に緑錆<sup>ろくしょう</sup>が出て断線することです。

フィールド・コイルを自分で巻いてみようと思うとき、そのボビンには決してファイバーを使ってはなりません。ファイバーの吸湿性のためか、或はそれ自身不純物を含んでいるためか、電線と接するところに緑錆<sup>ろくしょう</sup>がわいて腐蝕断線をしがちです。たとえ純良パラフィンで処理しても、上記の製品のような結果になるだけで、得るところはないと思います。ともかくも直流電圧のかかっている線に接するところへファイバーを使うことは禁物<sup>きんぶつ</sup>です。

1) layer short 「層間短絡」とも云う。トランスのコイルを多層巻きする場合、その層と層の間でショート（短絡）すること

## 第5部 修理技術のいろいろ

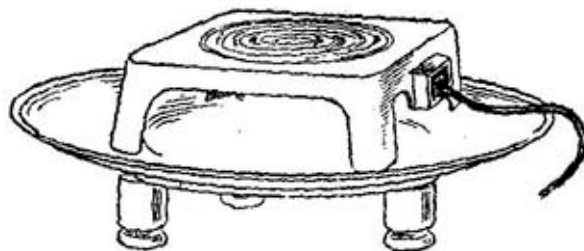
### 5・1 電熱器とモジュレーション・ハムの問題

前編で電熱器によるモジュレーション・ハムの問題について、原因と思われる諸例をあげました。しかしその理由は未解のまま結んでおきました。この問題につき、その原因を電熱器の絶縁不良による漏洩電流ろうえいに帰して、その対策として電熱器の台がいしに碍子がいしを置くことをすすめられている人もあるようですからこれを検討してみましょう。

一応これを是認するとし、それならば問題となる漏洩電流ろうえいがどの位の値か、普通のテスターでは測ることは困難なので、私は湯をふきこぼした直後の電熱器で、試みにコイルと枠の間の絶縁を測ってみたら約0.1MΩでした。従って極めて僅かの漏洩電流ろうえいの筈ですが、ふきこぼした直後ラジオから出るモジュレーション・ハムはふえ、乾燥するに従ってしだいに減り、遂ついににはハムは出なくなりました。そのときの絶縁抵抗は3MΩでした。これはちょっと考えると、確かに漏洩電流ろうえいに原因するということを証明しているように思えます。

そこで私は電熱器をはずし、それが絶縁不良であったときと等価の抵抗、即ち100kΩの抵抗を、電灯線と水道カランの間に接いで漏洩電流ろうえいを作ってみました。それでは絶対にハムは出ませんでした。とすると、漏洩電流ろうえい説はどうなりましょうか？

更に今度は、電熱器の熱盤に水をブツ掛け、最も絶縁不良の状態になったものを、第76図のように大きい皿と碍子がいしによる二重の絶縁台ろうえいの上に乗せて使ってみたら、漏洩電流ろうえいはほとんど無い状態なのに、モジュレーション・ハムは相当出るではありませんか。それも熱盤が完全に水分を蒸発して、電熱コイルが白熱してくると、ハムは止まってしまいました。



第76図 水をかけて絶縁を悪くした電熱器を、乾燥した皿の上のせ、更にそれを碍子でささえたが、さてハムは？

私は特に電熱器に水をかけ、普通では使用に耐えないような状態にして実験をしましたが、もしほんの僅かの漏洩ろうえいが問題だとしたら、他の電気器具や室内配線状態の絶縁不良も、当然モジュレーション・ハムの原因になり得るはずでしょう。

電熱器によるモジュレーション・ハムは、電熱器のスイッチを入れた直後に強く出て段々弱くなり、コイルが白熱するに及んで止んでしまいます。電灯電圧が低下していて電熱コイルが赤熱状態のときは、モジュレーション・ハムは連続して出ています。そして、電熱コイルが音を発して振動している間だけハムは出るのです。これが私の実験から得た結果です。

要するに私の実験では、電灯電圧が低下している時ほど、ハムは出やすいのですが、もし漏洩電流論ろうえいによるなら、反対に電圧の高い時ほどハムは強く出る筈です。結局漏洩電流論ろうえいは誤りだということになりましょう。

## 5・2 ラジオ火事

“ラジオから火事を出した”となると、当然そのセットの製作者は責任を問われましょう。これについて私達は決して無関心ではられません。家ごと丸焼けになってしまっただけは、ラジオのどの部分から発火したのかは、おそらく調べるによくないでしょうが、一般にはパワー・トランスの過熱によるものが多いと思われるようです。

私の見たところではパワー・トランスのコイルが黒こげに、時には絶縁紙までほとんど灰になっているのに、トランスそのものは発火に到らない場合が多いようです。その一次側のヒューズの功績でしょう。スイッチを切り忘れていて火事を引き起したというのは、多分ヒューズが不完全だったからでしょう。しかしこれだけがラジオ火事の主な原因とは考えられません。電源スイッチの絶縁が破れ、一次電流がシャシーにリークして、アンテナコイルを焼くことがよくあります。診査中に誤まって焼いてしまったという経験は、きっとあなた方にはありましょう。アンテナコイルが焼けてもせいぜいボビンを輪切りに焼切ってしまう程度で、他の部品へ引火することは少いようです。それまでには安全器のヒューズが飛ぶか、アンテナコイルそれ自身が切れてしまうからでしょう。いわゆるアース・アンテナ式で聴く場合に多い事故です。

私の見た“も一歩で火事に到るところだ”というものをお話ししましょう。

### その一例は

その一例は、ダイヤル・ランプのソケットがショートして、そのリード線を過熱し、それがダイヤルのセルロイド<sup>1)</sup>の文字盤に接していたため発火し、すぐ上のスピーカーのコーン紙に燃え移ったものです。セルロイドは御承知の通り、ま

1) celluloid ニトロ・セルロースに樟腦を混ぜて造った半透明のプラスチック様の物質。燃えやすいが戦後おもちゃやフィルム、文房具などに多く用いられた。ラジオのダイヤル目盛盤もこのセルロイドで造られていた

たコーン紙は防湿塗料のため相当引火し易いものです。ガタガタのダイヤルでは、廻すたびにダイヤル・ランプを動かし、チャチな豆球ソケットをショートさせるぐらいは当然です。そして、その位のショート電流では、パワー・トランス一次側のヒューズは、めったに飛びません。このような引火の実例は何度も見えています。近頃ではキャビネットは横型になり、ダイヤル文字盤もガラスになっているので、幾分は安心できましょう。

### 第二の例

第二の例は最近のもので、実に恐るべき事故の報告を受けました。それは鉄架式の学校用のアンプに起った火事です。その原因は、マイク・スタンドをアースするのを忘れて使おうとしたため、強い低周波発振を起して出力トランスの一次側に高い発振出力電圧を発生し、プレート側と最も近いどこかのアース側との間にスパークを始めました。その火花がトランスのリードに被せてあるエンパイア・チューブに移ったと思った瞬間、凄い勢いで火を吹き出し、各配線に被せてあるエンパイア・チューブに燃え移り、みるみるうちに鉄架の下の方から上の段へ、ふんだんに使ってあった全部のエンパイア・チューブが火になってしまったのだそうです。これはホンの一瞬のできごとでバケツに3杯の水でやっと消し止めたそうです。

そのアンプを私が調べてみたところ、焼けたのはエンパイア・チューブだけで、部品は水浸しになったものの、特に燃え易いものを除いて殆んど助かっています。しかし真空管は急に水をかけられたためか、全部ガラスが割れてしまいました。恐るべき速さで、下から上に燃え上がったことが想像できます。さてエンパイア・チューブというものはそんなに火を引き易いものでしょうか。そこで、試みに新らしいものをマッチの火にかざしてみると、実によく火を吹いて燃えるではありませんか。しかし昔の品で試みたところ、それほど燃え易くはありません。近頃の製品に特に燃え易いもののあることが判りました。皆さんも一度試してごらん下さい。これではヒューズの切れる前に発火してしまうことは当然とうなずけましょう。

ところで燃え易いか否かは塗料の相違でしょうが、引火し易いエンパイア・チューブの塗料には何を使ってあるものでしょうか。絶縁材料屋に尋ねても、遂に聞き出すことはできませんでした。

## 5・3 予言をする共聴スピーカー



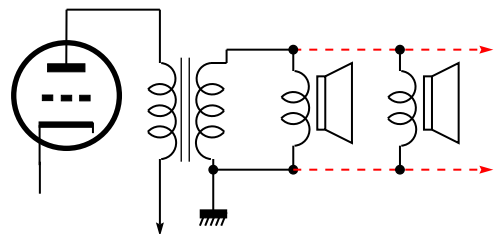
あるアパートで、気の合った同士の四世帯が一つの受信機から共同で聴取することになり、それぞれの室へパーマネント・ダイナミック・スピーカーを取付けました。まことに調子よくいったのですが、数日経って親受信機の持主から苦情が出ました。人が皆寝静まった真夜中、その受信機に付いているスピーカーから、かすかな赤ん坊の泣き声が聞こえてくるのだそうです。「ひとりで夜泣きをするラジオなんて気味が悪い」と調査を頼まれました。真夜中に推参することもできないので、放送終了後にすぐ出かけてみました。

受信機やスピーカーや配線回路を調べてみても異状はありません。ところが問題のスピーカーのそばで耳を澄ますと、赤ん坊の声ならでなんと男と女の、ののしり合う声が聴こえるではありませんか。かすかではありますが、どうやら夫婦ゲンカらしく、まさかこの時刻にラジオ・ドラマでもあるまいと、受信機を見ると確かにスイッチは切っております。試しにスイッチを入れてみると、怪放送はスーッと消えてしまい、反対にハムが聴えるだけです。そうこうしているうち、どこかの部屋の戸があいて、ガラン・バタンと物をほうり出す音がして、廊下で本物の夫婦ゲンカの大立ち廻りが始まったのです。

問題のスピーカーの持主は、夜な夜な赤ん坊の泣き声を出したり、夫婦ゲンカの予告をする魔法のスピーカーに、ますます気味悪がる始末です。

そこで受信機の診査は中止し、各室の状態を見て廻ることにしました。そして判ったことは、増設したスピーカーの一つは、赤ん坊のいる世帯へ行っていて、毎夜お母さんはスピーカーの前で赤ちゃんのオムツの交換をやるのだそうです。もう一つのスピーカーは子供のいない夫婦ものところにあり、おやじさんが酔っぱらって遅く帰ってくると、ヒステリーの妻君と必ず大立廻りになるのだそうです。

それぞれの部屋のスピーカーは第77図のように四個とも全部並列につながれていました。試しに受信機のスイッチを切った状態で、スピーカー



第77図 各スピーカーは共通のラインにつながれている

に向けて大声で「今日は晴天なり」とやっておいて各室を訪ずれ、確かにその声が聴えたという住人からの証言を得ました。今度は別の部屋のスピーカーの前で怒鳴ってみると、その声が他の室のスピーカーに聴えるのでした。これは前にも述べたように、パーマネント・ダイナミック・スピーカーはそのままマイ

クとなるから、知らない間に**第 78 図**のようにマイク兼スピーカーという、四世帯一組の相互通話装置ができていたのです。

マイク兼スピーカーの相互間には増幅器は入っていないので、出てくる音はもち論大きくはありませんが、アパートの狭い部屋で真夜中に起った事件くらいは、明瞭に伝えてくれましょう。受信機が働いている間は、もち論その出力で打消され、上記の受信機では出力管 42 にネガチブ・フィードバックがかけてあったので、見掛上の内部抵抗が低く、その並列効果でスピーカーから這入ってくる音を吸収するので、放送がないときでもスイッチを入れれば怪しい声は非常に小さくなるのです。以上の現象はマグネチック・スピーカーでも同様に起り得ることで、またスピーカー接続方法がたとえ直列であっても起り得ましょう。

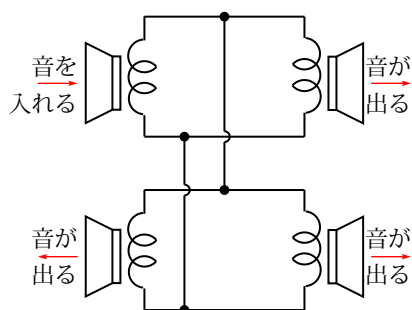
共聴方法は相互通話には便利である代りに、下手をするとこのように各世帯の私生活の曝露になるおそれもあります。各部屋にはスイッチを設け、スピーカーを切ると同時に補償抵抗に切替えられるようにすべきでしょう。

#### 5・4 ムービング・コイルから火花が出るスピーカー

スピーカーの修理屋をやっているあるアルバイト学生が、次のようなことをいっていました。

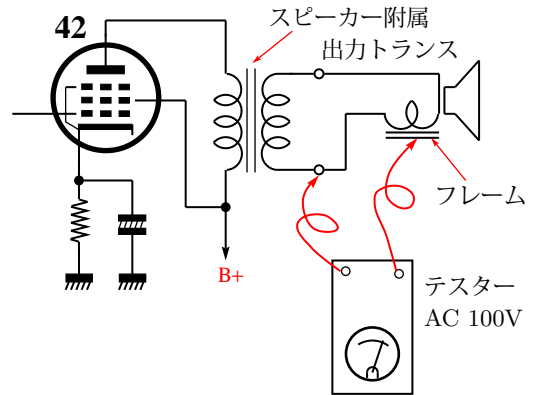
かけ出しのスピーカー屋の情けなさで、やった仕事にとどきお尻が来ます。せんだっても直したスピーカーが、“大きな音を出すとムービング・コイルのところで火花が出て、そのためラジオを受信するときはバリ・バリという雑音になって一層火花は大きくなる”とお小言が来ました。

調べてみると、コーン紙に対するムービング・コイルの取り付けかたが、わずかに曲っているため、大振幅になるとムービング・コイルの一部がギャップの外側の鉄部に軽く触わるのでした。これはテスターでムービング・コイルのリード線のホルダーとフレームの間の導通を測りながらコーンを手で動かしてみると、テスターの針が動くので判りました。そして実際に鳴らしてみると、その接触する部分で割合に大きな（と云っても僅かですが）火花が出るのです。これはムービング・コイルを再修理して完全にやり直しました。



第 78 図 マイク兼スピーカーで相互通話ができる

あとで考えてみましたがムービング・コイル回路とヨークの鉄部には回路はできていませんから、その間に電圧の生じている筈はなく、従って接触したところで火花が出るという理由が解りかねます。そこで試しに新しい完全なスピーカーで**第79図**のようにムービング・コイルの端子とフレームの間の電圧を、スピーカーを鳴らしながら測ってみました。DC電圧計にしたのでは電圧は示されませんが、AC電圧計にして測ったら、なんとそこに最大の時100Vレンジで8Vくらいまで針が動き、フレームをシャシーにアースしてみるとその電圧は一層高く出ます。そのときの電圧計の針の動きは音声出力に比例していますから多分音声電圧だと思います。



**第79図** フレームとムービング・コイル間に8Vの音声電圧が現れる

そして試しにムービング・コイル端子とフレームの間を細い線で接触させてみると、明らかに火花が出ました。

この新しいスピーカーのムービング・コイルとフレームの間の絶縁は非常に良好で、別のスピーカーで試してみても、やはり上記と同じような現象がみられ、要するに一般のダイナミック・スピーカーは大体こんなようになるらしいのです。

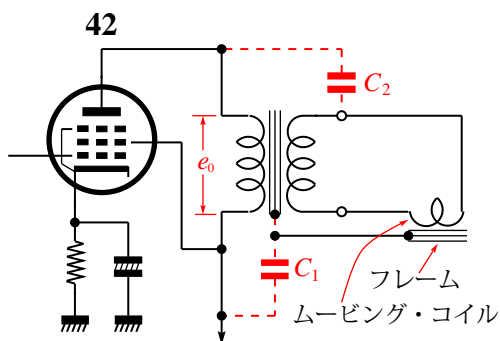
それからスピーカーのフレームとムービング・コイル端子の一端（どちら側でも同じ）をつないでおけば、接触しても火花は出なくなります。現にテレビアンテナのセットに付いているダイナミック・スピーカーはこのようになっています。ちなみにこの実験に使った受信機の出力管は42シングルです。

このスピーカーの修理屋をやっている若い学生の疑問は、

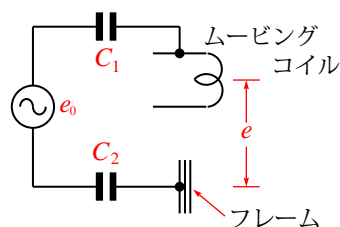
- (1) ムービング・コイルとフレーム間にAC電圧（音声電圧）が出るのはどうしてでしょうか。
- (2) 結論としてそのようなスピーカーは不良品でしょうか。

という2点でした。そこで私は次のような解答を与えておきました。

ムービング・コイル端子とフレーム間に示される電圧は次のような関係になっています。**第80図**で $C_1$ は出力トランスの一次巻線と鉄心間の自然にできる容量、 $C_2$ は同じく一次巻線と二次巻線間の容量です。出力トランスは普通にはスピーカーのフレームに取り付けられ、また二次側はムービング・コイルに接続されて



第 80 図 出力トランスの自然容量



第 81 図 第 80 図の等価回路

いますから、第 81 図のような等価回路ができればよい。それ故ムービング・コイル端子とフレーム間には、出力電圧  $e_0$  と同時に  $e$  という電圧が現われます。ムービング・コイルとフレーム間は完全に絶縁されているとすると、 $C_1$  と  $C_2$  の容量がどれだけであろうとそのリアクタンスとは無関係に  $e = e_0$  になる可能性があり、それは甚だしく高い電圧で、迷容量の関係で  $e = e_0$  にならないとしても決して 8V 位ではない筈です。例えば 42 で  $7000\Omega$  の負荷を掛け 3.22W の出力が出ている場合には

$$e = e_0 = \sqrt{7000 \times 3.2} \approx 150V$$

即ち 150V の電圧ですから相当の火花が出るのは当たり前でしょう。 $e$  をテスターで測ると、 $C_1$ 、 $C_2$  のリアクタンスに比べ、テスターの内部抵抗は甚だしく低いので、出力電圧は  $C_1$  と  $C_2$  の中で降下してしまい、僅か 8V しか振れないのです。ムービング・コイル端子とフレーム間の電圧をテスターでなく、真空管電圧計で測ったなら驚くほどの電圧が示される筈です。

結局、スピーカーは不良でもなんでもありません。ムービング・コイル端子の一端をフレームにつなぎ、その間の電圧をなくしておくことは賢明な策であり、スーパーのような高感度の受信機にとっては確かに良いことだと思います。

### 5・5 4.5V の乾電池で感電する?!

知りあいの高校生に、「パワートランスの導通を測るとき、その一次側を低抵抗レンジにして抵抗値を測れば、そのトランスの品質に対する目やすの一つにもなるよ」と教えてやりました。ところが数日後にやってきて、

「すいぶん酷いことを教えてくれたものだ。テスターのオーム計を低抵抗レンジにして、テスト棒の先を 1 本ずつ両方の手でにぎり、パワー・トランスの一次

線の両端に触れたとたんビリッときた。正確に言えば触れたときはそれほどでもないが、離すときの電撃はすごい。思わずテスト棒をほうりだしてしまった。あなたはすいぶん人が悪い」と大ムクレです。

“僕は君をからかおうと思って測らせたわけではないよ。だいいち、テスト棒の先を握って測るなんてないだろう。ちゃんと絶縁されている柄のところを持ってやるべきだ”というところ「ところがそれがダメなんです。一次線がそのまま直に出ているんで、手でしっかり押えないと接触抵抗が出てしまうんです。……ところでテスターの中には1.5Vの単1号乾電池が3個、つまり4.5Vしか入っていないのに、どうしてあんなに感電するのかしら？しかし普通の導通計のレンジで測ったんでは何ともありませんがね。いったいどこからあんなスゴイ電圧がでるんでしょうね？」と大いに不思議がっていました。

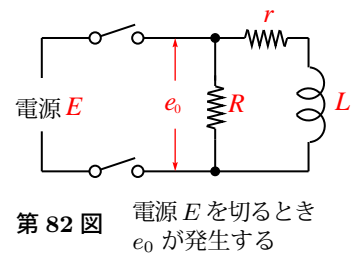
これと同じ話は今までもしばしば聞いています。ある人がこの電圧はどの位だろうと思って、別のもう一つのテスターを持ってきて、AC 250Vのレンジにして端子にあてがっておいて、抵抗計を離すときの電圧を調べてみたら、何と50～60Vを示したとのことです。

ところで、この現象はひと昔前のラジオ屋さんなら誰でも知っていたことなのです。まだテスターなど普及していない時代のことですから、低周波トランスやチョークなどの断線の有無を調べるにはこの現象を利用したものでした。低周波トランスの場合、二次側端子の両端を指で触わりながら一次側端子に4.5VのC電池<sup>1)</sup>を接触させて、それを離すときのショックで見別けたもので、この診査方法は臆病な者にはチョットできない相談です。

ではこの高い電圧はどこから出てくるのでしょうか。これは理論的にも知られているもので、電気工学理論の過渡現象という項をみれば詳しく出ています。第82図のような抵抗とインダクタンスを含む回路を瞬間的に開くと、その端子には

$$e_0 = \left(1 + \frac{R}{r}\right) E$$

という誘起起電力を生じる可能性があります。パワー・トランスに当てはめると、 $r$ は一次線の直流抵抗、 $R$ はその端子間の絶縁抵抗または触わっている人の指の



1) 初期の電池管式真空管を使用したラジオには、織條（ヒーター、フィラメント）用のA電池、陽極（プレート）などの高電圧用のB電池のほかにバイアス用のC電池が必要であった。その後整流器が普及するにつれて家庭用電灯線電源を整流して使用するラジオが出来た。交流を整流して使用するラジオを特に「エリミネーター式」と呼んで電池式ラジオと区別した

抵抗です。そこで、もし  $R$  がない場合、即ち指で押えず、そして端子間の絶縁も完全にインフィニティーとしたら  $R$  は無限大ですから、上式から導かれる答即ち誘起起電力  $e_0$  は無限大の電圧になる可能性があるわけです。

実際には回路を全く瞬間的に開くという事は不可能なことで、極めて短いながらある時間を要するわけですから、そのために  $e_0$  は無限大にはなりません。また感電する瞬間には、人体の指の抵抗が  $R$  として入っているわけですから、 $e_0$  は当然有限な値に下がってしましましょう。それと同じで、別のテスターの AC ボルトのレンジで同時に測っているときは、やはりそのメーターの内部抵抗が  $R$  としてシャントに入っているわけですから、数十ボルトという比較的低い電圧が指示されるわけです。

この誘起起電力は、回路を開く直前にインダクタンス内に蓄積されたエネルギーによって生ずるので、従ってそれは回路を開く瞬間に流れていた電流とインダクタンスの大きさにも関係があるわけです。それゆえヒーター巻線のように低インダクタンス、低抵抗の回路では、当てがう電池の内部抵抗がもっと遙かに低いものでないと感電するほどの電圧にはならないでしょう。同じく B 巻線では巻線の抵抗値が高いから、もっと電圧の高いものを当てがうのでなければ誘起起電力はさほど大きくならないでしょう。

話は違いますが、パワー・トランスの無負荷電流をみるため、無負荷の状態で一次側に 100V を通しておき、それを不用意に切ると、もしその瞬間の電流が最大値のときだった場合、B 巻線をスパークさせて絶縁を破ってしまうおそれがあります。これは一次線と同じように B 巻線にも高い電圧が誘起され電圧となるからです。この失敗はときおり耳にすることですから注意を要します。

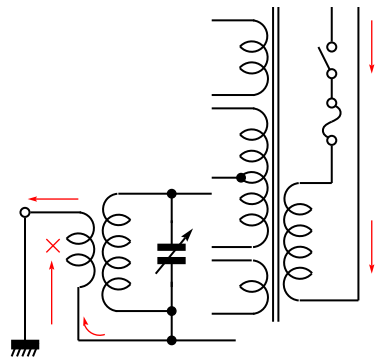
## 5・6 雷公御用心

雷というやつは、ピカリ・ドスンと落ちるとばかり思っていたら何のふれこみもなしに、いつの間にか落ちていて、近所の受信機を片っぱしから壊してしまっていた、ということもあったのです。都会地のこととて、もちろんどこの家でも屋外アンテナは用いてなく、従って雷公は電灯線を伝わってきて、受信機に被害を与えたのです。

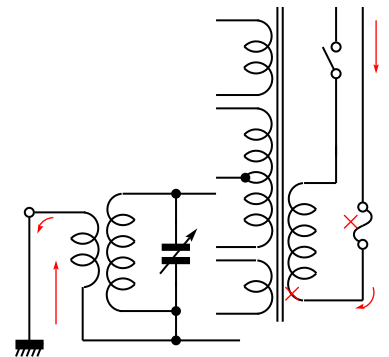
そのときのありさまを、まず私自身の体験について述べてみましょう。雷鳴が近くなると空電雑音があまりにも酷ひどくなってきたので、ラジオのスイッチは切ってしまいましたが、そのうち電灯会社の方でも送電を断ったらしく停電してしま

いました、夕立は一層強くなり、近所のあちこちに落雷しました。そのうちに家の中のどこかで“パチッ”と、ちょうど充電されたコンデンサーをドライバーでショートさせたときのような音がし、引続き暫くの間をおきながら同じような音が数回しました。そのときはどこでその音がしているのかは判りませんでした、実はラジオがやられていたのです。

数刻後に雷がおさまってから送電されましたが、もうラジオはスイッチを入れても全然働かなくなっていました。みるとアンテナ・コイルの線がボビンからずり落ちていて、その線はまるで灰のよう



第 83 図 アンテナコイルを焼く



第 84 図 ヒューズを焼く

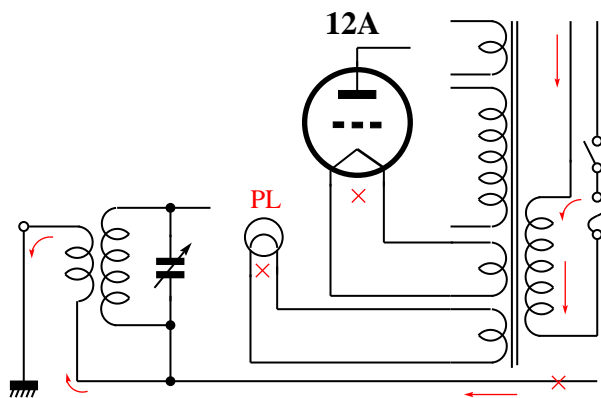
な感じになっていました。しかしボビンは少々くすんでいる程度で、焼けてはいません。パワー・トランスの導通をみると、一次線が完全に断線していました。これは後で分解してみても判ったのですが、一次線の最下層で線はズタズタに切断されていました。結局雷の強い電流は第 83 図の矢印のような経路を破壊して通っていったのです。

隣家のラジオのようすを聞いてみたところ、どうもウナリが少し出るようになったというのです。これを調べてみると、案の定一次側のヒューズが切れていました。それにもかかわらずスイッチを入れると働くので、変だなと思い導通を測ってみると、やはりパワー・トランスの一次線と鉄心がショートしていました。従って電灯線の片線とアース間の電圧で働いているわけで、アンテナ・コイルには電源の電流も共に流れるのでウナリが出るのです。この受信機ではヒューズの位置が第 83 図のものと反対側に入っていたので、雷の電流は第 84 図の矢印の経路を通り、パワー・トランスの絶縁を破壊すると同時にヒューズを切ってしまったので、単に一次線の巻初めと鉄心間をショートさせただけで済んだものと思います。

反対の隣の家では、真空管は点火するが聴こえないというのです。もちろん雷鳴中にはスイッチを切っていたそうですが、みるとやはりアンテナ・コイルが切

断されて次のようになっていました。導通を測ってみると、一次側のヒューズ・ホルダーの電灯ラインに近い方の側の端子がシャシーとショートしていました。従ってヒューズは切れていません。

向い側の家では古い型の並四球でしたが、ダイヤル・ランプと12Aが断線していました。そしてこれもパワー・トランスの一次側と鉄心間がショートされていました。雷の電流は第85図の矢印のように流れたため、パワー・トランスの二次側に瞬間的に高圧が誘起されフィラメントが最も細い12Aと豆球を切ってしまったものと思います。



第85図 12Aのフィラメントとパイロット・ランプを切る

すじ向いの家では、鳴ることに変わりはないが、スイッチを切ってもあかりは消えず、音が少し小さくなる程度で相変わらず鳴っているというのです。雷鳴中はスイッチを入れっぱなしにしておいたとのこと。調べてみると、スイッチのところでシャシーとショートしているだけで、アンテナ・コイルは助かっていました。

裏の家では、雷鳴中に細君が台所仕事をしていたところ、“パチッ”という音とともに水道カランのところで火花が飛び散り、アース線を結んだ所が熔けて切れてしまったといいます。ラジオは点火しないというので調べてみると、一次側とシャシー間に入れたモジュレーション・ハム止めの $0.01\mu\text{F}$ のチューブラ・コンデンサーの筒の中が燃えて炭ようになっていて、また電源コードの片線がボロボロに切れていました。この家では室内アンテナを使っていたため、雷の強電流は電源コードからコンデンサーを通り直接アースに行ったらしく、それにコードは大分古いものなので焼切れてしまったものでしょう。

向う三軒両隣の被害状況はかくのごとき次第でしたが、電源コードを電灯線から外してあった家ではもち論被害は蒙らなかつたようでした。

以上の各家庭の受信機は、瞬間的の落雷によって破壊されたのではなく、前後十数分にわたりパチパチと音がしている間にやられたのだと思います。即ち小規模の放電が雷雲と電灯線間に連続して起り、その電流は柱上変圧器のアースがよくないため各家庭へ分流されてきて、アースとの間の絶縁の最も弱い受信機を壊してしまったものと思います。電灯線や柱上変圧器には何の被害もなかつたよう



です。

このように気づかない程度の小規模の落雷によっても受信機は破壊されるおそれがあり、また受信機のスイッチは切ってもなくても被害は等しく受けるものですから、雷鳴中は電源コードを電灯線から外しておく必要があります。アンテナを張ってないからといって、決して安心はできないということを痛感しました。

## 5・7 夏場の修理は迅速に

「ラジオ屋は月曜日は忙がしい?! っていうことを知ってるかい」と、ある知り合いのラジオ屋がいます。「風が吹くと桶屋が繁盛」のくちだろう、というと、「まあそんなものさ」と前おきして興味あることを語ってくれました。

「梅雨が明けてカッと照るようになると、それハイキングだ、やれ避暑だのと、一家をあげて出かけることが多くなるね。日曜を利用する者が多いことはもちろんだがね。そこでラジオは留守番というわけだが、帰ってきて、いざ聴こうとスイッチを入れてみると、もうダメなんだ。トランスかスピーカーがやられているに決ってる。だから月曜日の朝ラジオ屋へ担ぎこんでくるわけさ。これは長年の統計で確かなんだ。」要するに、まる1日もラジオを聴かないでいると、その間に切れる部分は切れてしまうというわけです。

さらにそのラジオ屋さんは次のようなこぼし話もしました。

「並四<sup>1)</sup>の低周波トランスやチョーク・コイルぐらいならスペアを入れてすぐ直してしまうがね、ダイナミック・スピーカーのフィールド・コイルやアウトプット・トランスなどは、どうもスペア・コイルでは面白くない。そこで例えばアウトプット・トランスが切れて来たときなど、それを巻替に出すと最低1週間はかかる。ところがその間にいつの間にかフィールド・コイルの方も切れてしまっているのだ。ところで修理の契約はトランスだけなんだから、判らず屋の客に会うと、きつといざこざが起るに決っている。そうかといって、必らず切れるものとは決っていない個所の修理代まで予定して見積るわけにはいかず、あるいは故障の予告をすればインチキをやる魂胆だろうと疑われるし、実に弱るんだ。だから夏場の故障は手っとり早く直してしまうに限る。ともかく連続して使っていれば結構切れないうるものだ」と。要するに長い時間電気を通さないでいると、切れるおそれがあるというわけなのです。

1) 第二次世界大戦終了後もっとも普及した再生式4球ストレートラジオ。構成は再生検波(57A)—低周波電圧増幅(56A)—低周波電力増幅(12A)—整流(12F)からなる。国民型5号でもある

確かに梅雨明けから秋口までの間は、コイル類で直流のかかっている部分、即ちインプット及びアウトプット・トランス、中間周波トランスなどの一次線、またはチョーク・コイルやマグネチック・スピーカーのコイルとかダイナミック・スピーカーのフィールド・コイルなどの断線が多いようです。これは夏場は湿気が多いため、部分品の絶縁が低下し、直流高圧のかかっているコイルなど絶縁物中に酸性のある場合は、直流漏洩電流のためエナメル線ではピンホールのところ<sup>ろうえい</sup>で電気分解を起し、そのためプラスの電位にある銅線はだんだんやせてきて、ついには腐蝕によって切れてしまうわけです。

それではラジオ屋さんがいう“月曜日は忙がしい”という理由、つまり連続して電気を通している間とはともかくも切れないうち<sup>しば</sup>で、暫らく休むとその間に切れてしまうというわけは、一体なんでしょうか。それは次のように考えられます。

低周波トランスなり、ダイナミック・スピーカーのフィールド・コイルなり、その断線したものをほどいてみると判りますが、電線の腐蝕している箇所は決して一個所ではなく実に数十個所も切れている場合もあります。これは腐蝕が各所で同時に進行していたことを意味します。

ところでそのうちのどこか一個所が切れたとしても、電気を通すとたいいていそこでスパークをして再びつながってしまいます、もし同時に二個所以上が断線すれば再びつながる機会は殆んどなくなりましょう。

断線個所を見ると必ず緑青<sup>ろくしょう</sup>が吹いています。これは電気分解で電線が極めて細くなった個所が錆びてしまっているのです。この錆びは、電気を通してない時でも進行するわけです。従ってその個所の銅線が全部腐蝕されてしまえば断線状態になり、使用を休止していればいるだけ同時にいくつもそのような個所ができてしまいますから、もう再び電気を通してもスパークせず、つながらなくなってしまう。これが使用を休むと切れやすいという理由です。

以上でお判りと思いますが、断線したものをほどいてみて、たまたまその個所を発見したので、そこをつないで使ったとしても、再び他の個所で断線する危険は迫っているわけです。また断線したものを高圧をかけてスパークさせてつなぐと、その個所がつながると同時に次の層ともつながってしまい、つまりレアーショートになる危険もあります。アウトプット・トランスなどは、使用中にも自然にスパークしてレアー・ショートし、出力が出ないようになってしまうこともよくあります。

## 5・8 モジュレーション・ハム止めコンデンサーのパンク

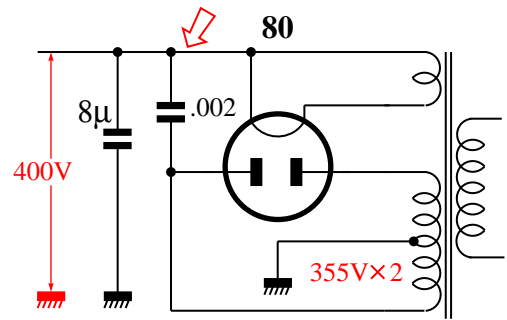
電源のヒューズが飛んだので、太い線を代りに入れてやったら、パワー・トランスが熱くなってきて危うく焼いてしまうところだったというのです。調べてみたら**第86図**のように整流管80のP～F間にマイカ・コンデンサーが入れてあり、それがパンクしていたのでした。それを取除いて働かせてみたところ、ラジオは酷いモジュレーション・ハムが出たので、一次側とシャシー間へ $0.01\mu\text{F}$ を入れて止めようとしたがなかなか止まりません。 $1\mu\text{F}$ にしてみてもハムは少し残ります。きっとパワー・トランスの一次側のシールドがしてないものなのでしょう。

ところで一次側へ容量の大きいコンデンサーを入れることは、シャシーのアースをはずした状態でさわるとビリビリくるので、それを嫌って図のように入れたものと思います。このようなモジュレーション・ハム止めの方法は今までも見たことはありますが、一般に整流管のP～F間は最も電圧が低いところだと思われているに違いありません。ところが整流管のP～F間は受信機内で一番高い電圧のかかるところで、もし無負荷のときは

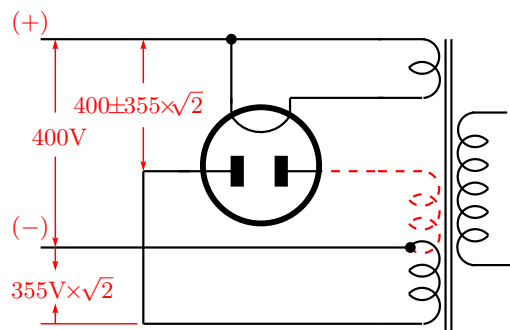
$$355 \times \sqrt{2} \times 2 \approx 1000\text{V}$$

にも達する可能性があり、これをピーク逆電圧といいます。整流管の規格表にある最大逆耐ピーク電圧というのは、このP～F間の電圧の許容値のことです。いま仮に整流管の出力側の直流電圧にリップルを全く含まないものとして考えると、**第87図**で判るように、直流出力の $400\text{V}$ にB巻線の交流電圧の波高値 $355 \times \sqrt{2} \approx 500\text{V}$ の合計即ち $400 \pm 500 = 900\text{V}$ 及び $100\text{V}$ で、もち論パンクさせた電圧は $900\text{V}$ の方で、実際には整流管出力側には相当のリップルが含まれていますから、もう少し高い電圧になるでしょう。それゆえこのようなやりかたはモジュレーション・ハム対策としては最も危険な方法で、もちろん半波整流に対しても同じです。

## 5・9 ハムはなぜ出ないか、またなぜ出るか

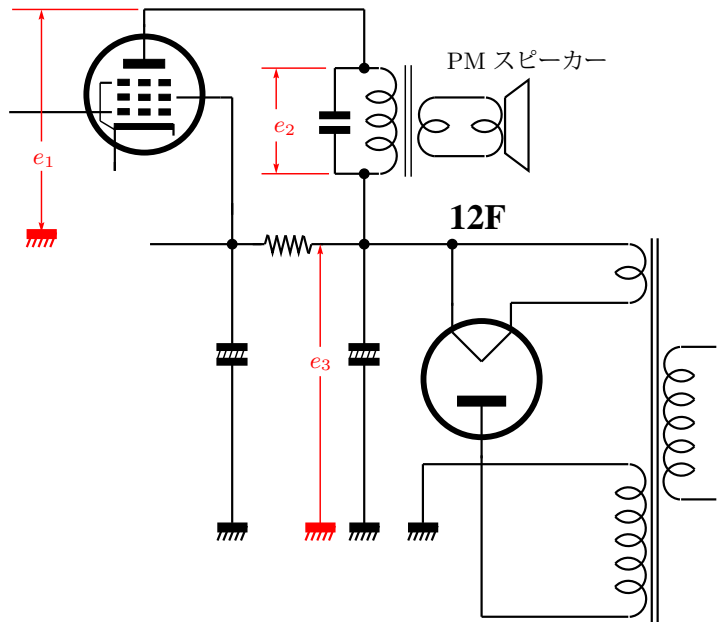


第86図 整流管のP～F間にCを入れることは危険



第87図

近頃の受信機の出力量のところをみると、プレート電圧の供給を第88図のようにB電源のフィルター・チョークを通さないうで、整流出力側に比較的大容量のコンデンサーを用いて、そこから直かにとるようになってきたものが増えてきました。もち論この方式は、マグネチック・スピーカーかPMダイナミック型を使ったもので6ZP1や42

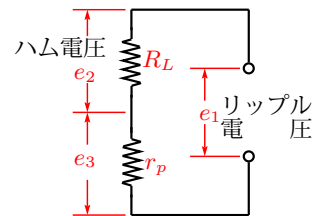


第88図 フィルター無しでもハムは出ない

その他のペントード<sup>1)</sup>またはビーム管の場合に限っています。プレート電圧には相当のリップルが含まれているわけですが、その割りに出てくるハムは少ないのです。

ところがこの方式を12Aとか2A3などのような三極管に試みてみると、物凄いハムで全く使いものになりません。B電源のリップルは同じなのに、ペントードと三極管では後者の方が10倍以上もハムは大きいのですが、次にその理由を考えてみましょう。

いま整流管出力側の直流出力に含まれているリップル電圧の成分を $e_1$ とします。ここからスピーカー及び出力管の回路を見ると、第89図の等価回路ができます。 $R_L$ は負荷抵抗即ちスピーカーで、 $r_p$ は出力管の内部抵抗です。これで見ると、リップル電圧は $R_L$ と $r_p$ に分割され、 $e_2$ がスピーカーにかかるハム電圧となるわけです。従って



第89図 ハムに対する等価回路

$$e_2 = e_1 \cdot \frac{1}{1 + \frac{r_p}{R_L}}$$

の関係となります。

1) pentode, 五極管

つまり、ハム電圧の大きさは、真空管の内部抵抗と負荷抵抗の比で決められますから、次のようになります。内部抵抗が負荷抵抗に較べて極めて高い真空管では、電源のリップルによるハムは小さい。それはpentodeやbeam管の場合に相当します。

例えば、2A3 シングルは  $r_p = 800\Omega$ ,  $R_L = 2500\Omega$  で

$$e_2 = e_1 \cdot \frac{1}{1 + \frac{800}{2500}} = e_1 \cdot \frac{1}{1.32}$$

42 では  $r_p = 80k\Omega$ ,  $R_L = 7k\Omega$  で

$$e_2 = e_1 \cdot \frac{1}{1 + \frac{80}{7}} = e_1 \cdot \frac{1}{12.4}$$

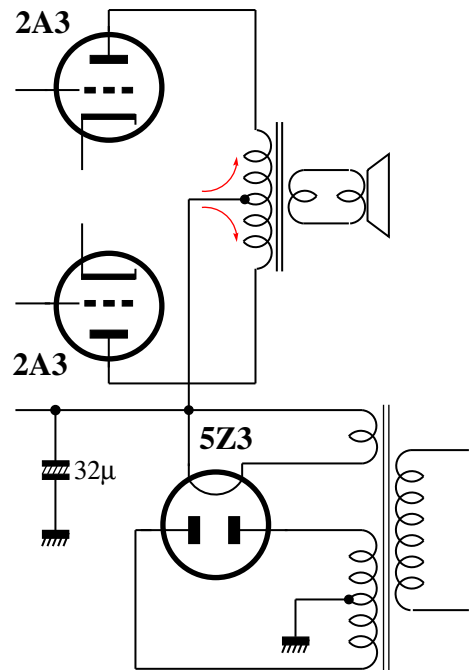
です。これを比較してみると 1.32 対 12.4 で、42 と 2A3 とではハムの出かたに約 10 倍もの相違があることが判ります。

この方式で注意を要することは、スクリーン・グリッドにはリップルがあってはならないことです。スクリーン対プレートが増幅作用でスクリーンのリップルは増幅されて相当なハム電圧となってプレート側にあらわれます。だからスクリーン電圧だけは十分なフィルターを通して与えるようにしなければなりません。

なおプッシュプルでは、pentodeやbeam管はもち論、三極管でも B 電源のフィルターを第 90 図のように簡略しても差支えありません。それは出力トランスの一次側を流れるプレート電流中のリップル成分は矢印のように位相が反対になりますから、ハムは相殺されてしまい、スピーカーには出てこないからです。

B 電源のフィルターを簡略にすることの利点は、経済的にはもち論ですがその電圧降下を救い、出力管に十分なプレート電圧が与えられ、また電源のレギュレーションをよくするため、出力の増大と歪の減少に大きな効果があります。

## 5・10 グリッド・リークが切れたら

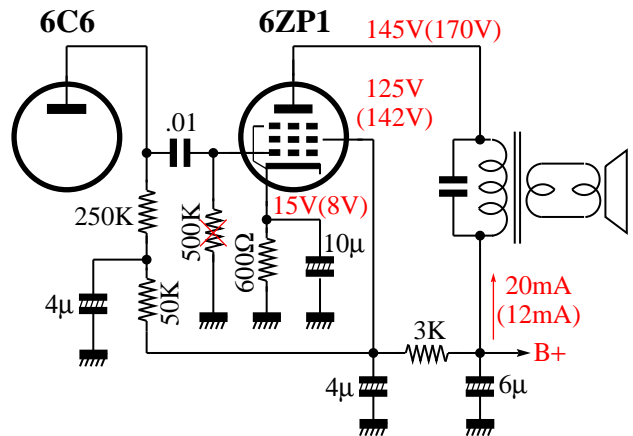


第 90 図 プッシュプルにするとハムは消える

抵抗結合回路で、グリッド・リークが切れているのを知らずに使っていたらどうなる？ というと、きっと次段の真空管をダメにしてしまうだろう、特に出力管の場合では……とは誰も思うでしょう。また実際に出力管のグリッド・リークが切れたため、球をボカしてしまったという苦い経験を持たれるかたもあるようです。

ところが、ここに上記の状態でも6カ月間も知らずに聴いていたにもかかわらず、何ともなかったという話があります。それは6ZP1を出力とした標準高一受信機で、実はこのセットは、始めに組立てた者が6ZP1のグリッド・リークを入れるのを忘れて配線してあったものです。音の出かたが少しおかしいのに私がたまたま気がつき、調べた結果誤りを発見したのです。そのときは既に使い始めてから6カ月も経っていたのですが、6ZP1や他の部分品には何の変化も認められませんでした。

ところで、この場合の症状は次の通りでした。まず音質や音量の変化ですが、普通に聴いていたのでは、正常の状態と大した変りはありません。しかしダイヤルを廻して放送を受けようとするとき、AVCのタイム・コンスタントを大きくとりすぎたときのように、うまく同調できません。またボリュームを一杯にあげると、大きい



第91図 6ZP1のグリッド・リークが切れたら

音が出たと思ったトタン、音が詰まってしまう、<sup>しばらく</sup>暫くすると再び音が出てきますが、またすぐ聴こえなくなるのです。つまりブロッキングの甚だしい症状です。

ではこれをテスターで調べた場合、どのように指示されるのでしょうか。これを正常の場合と比較して第91図中に記入しておきました。すべてアース側をマイナスとして測ったものですが、括弧内が正常の状態のときの値です。もち論結合コンデンサの絶縁の程度によってこの値は相当異なるでしょう。ところでこの値は静止状態のときの値ですが、大音量で鳴らしてみると、音声のひと節ごとにカソード電圧は減少し、ときにはこの電圧がゼロになってしまうこともあります。静止状態のときよりも増すようなことは決してありません。リークを忘れたためのプレート電流の増加は、静止状態では約50%ですが、大きいシグナルが入って

くと反対に減少し、ときにはゼロになってしまって音が出なくなることもあります。適度の音量で働かしているときは、プレート電流は正常の場合に近い値にまで減少し、その値を中心として多少増減します。

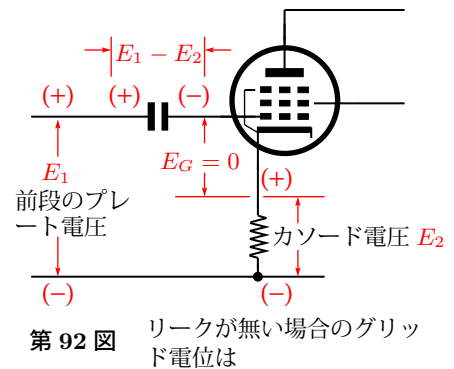
以上が即ちグリッド・リークが切れた場合の所見です。

それにしても、リークが切れればグリッドは宙に浮いてしまうのでプレート電流を制御する力はなくなり、プレート電流やスクリーン電流がジャンジャン流れてしまうだろうと考えられますが、事実はそれ程でないのはどうしたわけでしょうか。もち論電源回路の内部抵抗が高いため電圧が低下し、電流の増加を或る程度喰い止めはしますが、よく考えてみれば、グリッドにはやはり制御力はあるのです。といってもソ

ケットや真空管ベースなどの漏洩を無理に考えないでもよいのです。即ちスイッチを入れた瞬間は、グリッドの内部抵抗を通じ、結合コンデンサーに充電が行われ、やがてその充電電圧が前段管のプレート電圧とバランスされるに及んで充電は停止します。その状態では第92図のような関係として6ZP1のグリッドは大体そのカソードと同電位ぐらになり、即ち結合コンデンサーの絶縁が無限大ならゼロ・バイアス、あるいは結合コンデンサーにわずかの漏洩があるものとすれば極めてわずかプラスの状態になります。

ところが前段から入力があると、そのプラスの半サイクルでグリッド電流が流れるため、結合コンデンサーは一層高く充電されます。その状態ではグリッドはカソードよりもマイナスになってしまいます。そのマイナス電圧はやがて漏洩によって放電されようとはしますが、次から次へと連続してシグナルが入ってくれば、引続きマイナスに保たれるわけです。もし入力が適度の値であるなら、グリッドのマイナス電位は、ちょうど正規のバイアスと同じに保つこともできるわけで、従って中程度の音量で聴いているときは、つまり自己整流バイアスというわけですから、正常のときと何等変らないことになります。

しかし実際のシグナルの値は大幅に変化し、その最大のときはグリッド電流を多量に流すほどの値になり、従ってそのため結合コンデンサーの充電電圧は一層高まるので、グリッドはあまりにもマイナスになり過ぎてプレート電流をカット・オフし、ブロッキングを起してしまいます。このことは正規のグリッド・リー



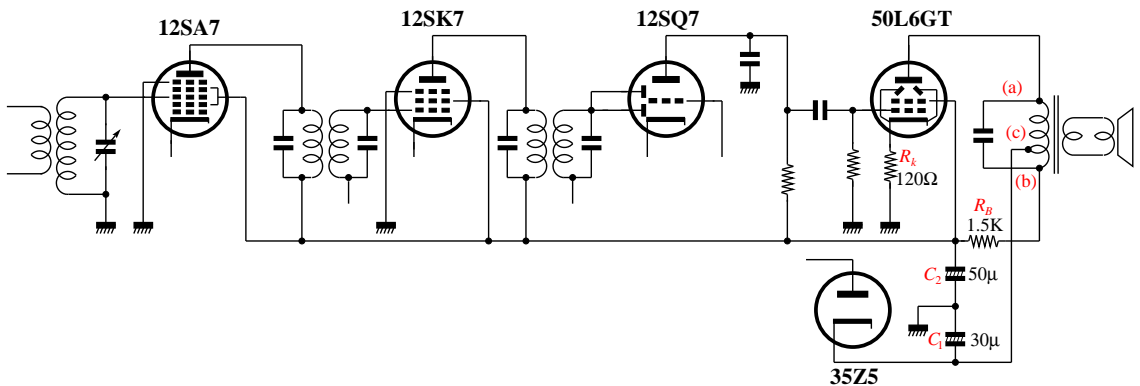
第92図 リークが無い場合のグリッド電位は

クが入っているものでも同じですが、グリッド・リークが切れているとブロッキングされている時間は甚だ長くなりますから、結局音がしばらく詰まって出なくなってしまうのです。

以上のように、動作中は6ZP1のプレート電流は減少しますから、危険になるということは、おそろくないと思います。それゆえグリッド・リークを忘れたまま半年間も使っていて異状がなかったとしても、決して不思議ではないでしょう。ただし家庭用受信機でこうだったからといって、この話を  $G_m$  の高い大型パワー管にそのまま当てはめるのは危険です。

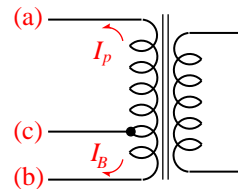
以上のように、グリッド・リークが切れていても、ある程度の音量で鳴らしていたのでは素人にはおそろく気づかれなんでしょう。従って、それを知らないで使っているということも実際にはかなりあるのではないのでしょうか。

### 5・11 直流磁化防止の出力トランス??



第 93 図 RCA モデル V-105 概要図

第 93 図のような RCA のモデル V-105 のトランスレス電蓄が故障を起したので、調べてみると出力トランスの断線でした。第 94 図の通りこの出力トランスはシングルであるのに一次側にタップが出ていて、前段の B 電流はすべて一次巻線の一部をくぐっていくようになっています。出力トランスを分解してみました、残念なことには線の腐食が甚だしく、正確なデータは得られませんでした、大体において (a)~(c) 間と (c)~(b) 間の比は 10 対 1 以下のようなものでした。詳細は完全なものを調べて改めて報告しましょう。



第 94 図 一次側を流れる直流電流の方向



さてこの風変りな出力トランスはどういう自的を持っているのでしょうか。鉄心の直流磁化防止か、ハム中和か、あるいは両方を兼ねているか、いずれにしても面白いアイデアです。このトランスの一次側に流れる直流電流は、出力管のプレート電流  $I_P$  は 50mA ぐらい、他の B 電流  $I_B$  は 20mA 程度ですから、一次側タップの位置からみると、鉄心の直流磁化打消しには大して役に立つものとは思えません。

リップル電圧についてみると、第 95 図のような等価回路になり、この場合ハム中和には相当役立っているものと考えられます。

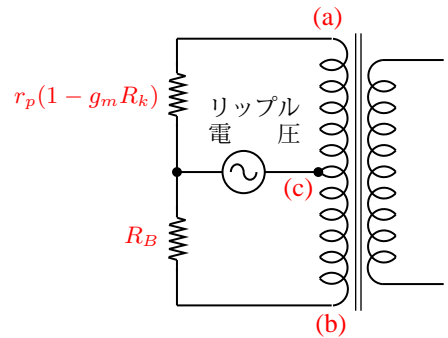
ところでこの配線を見るについて注意を要するところは  $R_B$  の存在で、この 1500Ω のフィルター用の抵抗に重要な鍵があるのです。この抵抗は出力管に対して負荷効果を与えるもので、当然低周波出力の一部を吸収する筈ですが、しかし実効負荷として計算してみると、上記の対比を仮に 10 対 1 と考えると、

$$1,500 \times 10^2 = 150,000\Omega$$

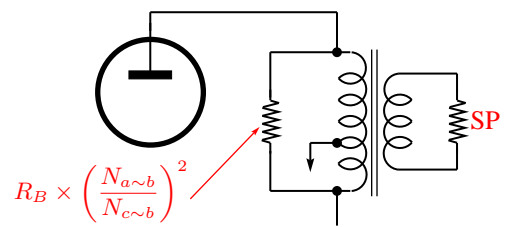
即ち 150kΩ となり、第 96 図のように 50L6 の負荷 2.5kΩ に対し全く無視できる大きな値になります。この抵抗  $R_B$  を入れないで、直かにフィルター・コンデンサー  $C_2$  を入れたら、低周波出力を殆んどそれに喰われて鳴りが悪くなってしましましょう。このことは  $R_B$  を試しにショートしてみれば諒解できるでしょう。

ところでひと頃の雑誌に、出力トランスの直流磁化防止だとか、単球プッシュプルだとかという変わった話題で紹介された回路がありました。その着想は多分この RCA のセットあたりにあるものと思われる。しかしそれ等の新案方式は、いずれもこれに似て甚だ非なるもので、例えば第 97 図の直流磁化打消し法は同時に低周波出力短絡方式であり、また第 98 図の単球プッシュプルは低周波出力打消し法です。従ってそれを見て試作し、間諜<sup>まご</sup>ついている気の毒な人も沢山おられたようです。

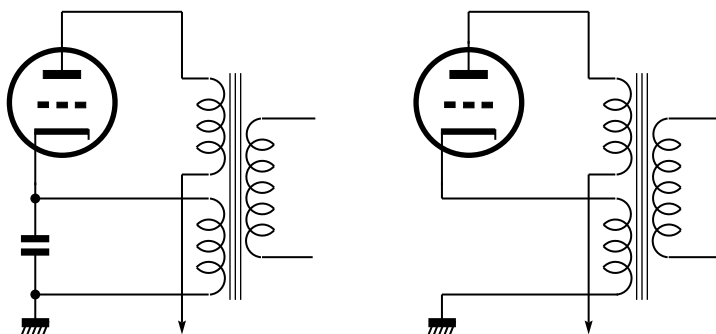
そそっかしい人がこの RCA の回路を見ると、とんでもないヒントを得てしまうものです。この回路をマネをする際には必ず  $R_B$  を挿入すること、そして、セ



第 95 図 リップル電圧に対する等価回路



第 96 図 フィルター抵抗の負荷効果



第 97 図 いわゆる直流磁化打消法 第 98 図 いわゆる単球プッシュプル

ンター・タップの出た普通のプッシュプル出力トランスではダメだということを、よく考えてみる必要があります。

## 修理メモをお読みになる皆様へ

これはラジオ技術を業とし、または趣味としている者たちの間で、いつも話題になるような故障診査に関するものを選んだものです。何ページのどの章から先にお読みになってもかまいません。各章が一つ一つ独立している短編集だからです。

ここに載せられたものは、誰もが経験され、あるいはこれからきっと経験されるだろうことばかりです。また診査用測定器としてはテスターだけしか出てきませんから、改めて実験をしたいと思う場合は、誰にも容易にできるはずです。また、その理論的解明は単に修理技術にだけでなく、試作実験など一般ラジオ技術の理解に役立つものと信じます。

著者しるす

- 
- 底本には、『ラジオ修理メモ 第2巻』（日本放送出版協会，1950年12月初版，1952年1月再版）を使用した。
  - 適宜振り仮名を追加した。
  - 理解を助けるために脚注を追加した。
  - 旧漢字は新漢字に、旧かな使いは新かな使いに変更した。
  - PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを

### ラジオ温故知新

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/>

に、

ラジオの回路図を

### ラジオ回路図博物館

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>

に収録してある。参考にしてほしい。